

平成4年度

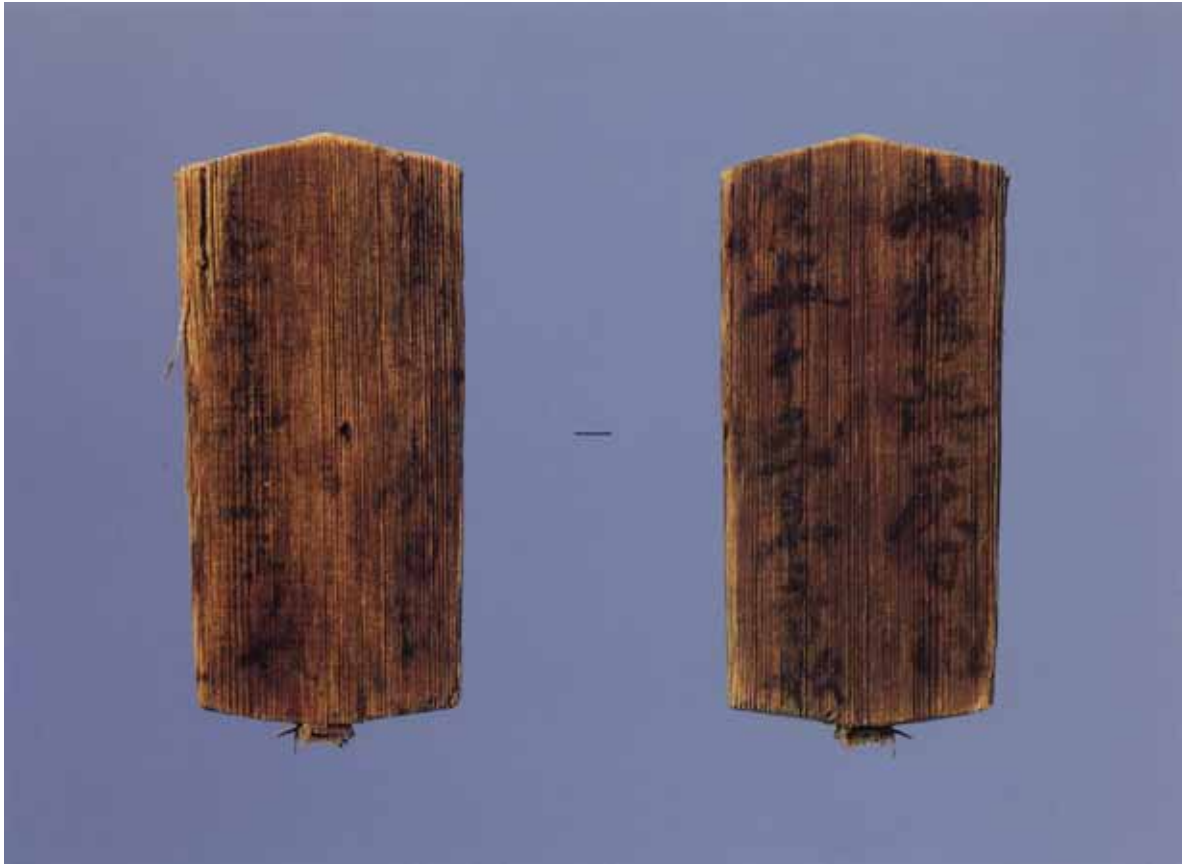
京都市埋蔵文化財調査概要

1995年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



洲浜（平安京左京四条一坊 3トレンチ）



題箋（平安京左京四条一坊 3トレンチ池出土）



人面文軒丸瓦（平安京左京四条一坊 3トレンチ出土）

序

平安京跡を始めとして、長岡京跡、六勝寺跡、烏羽離宮跡など、京都市内には多くの重要な遺跡があります。歴史都市としての京都ではありますが、地上の文化財と比べて、これら地下の文化財の重要性はまだまだ理解と認識が進んでいないように思われます。地下の文化財の価値を高めるには、市民の方々の協力を得て、調査・研究しなければならない遺跡が数多くあり、その責務を日頃痛感しているところであります。

当研究所は昭和51年発足以来、鋭意、埋蔵文化財の調査、研究、普及啓発活動に努めてまいりました。本概要報告はその一環として定期的に発刊しているものであります。今回は平成4年度に実施しました平安京跡を始めとする36項(41件)の調査概要を報告しております。

4年度も例年どおり平安宮・京跡の調査件数が最も多く、24件を実施致しました。建物、築地、溝、井戸などを検出しております。中でも左京四条一坊(中京区壬生朱雀町8-2)の発掘調査では園池の洲浜を検出しており、池から「朱雀院」と記された題箋が出土したことは注目されました。長岡京跡では昨年度に引き続き、調査対象面積が1万㎡を超える大規模な発掘調査を実施しております。この調査によって、長岡京の街路や宅地の一端を知る資料を得ることができました。また昨年と同様に古墳時代の水田や河川などを検出しております。松ヶ崎廃寺の発掘調査では、法華一揆の拠点の一つとなった妙泉寺跡の石垣を検出しました。史跡名勝に指定されている嵐山の立会調査では、平安時代の良好な遺物包含層を検出しました。このことは、今後嵐山地域の平安時代の様相を知る手がかりとして注目されます。この他にも調査で得られた各遺跡の多くの調査成果を、できるだけ簡潔に解りやすくまとめたつもりでおります。

今後とも本概要報告が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、わずかでも市民の方々に貢献できれば幸いと考えております。

終りに、埋蔵文化財の調査を依頼された原因者の方々、京都市をはじめ関係諸機関の方々にお礼申し上げますと同時に、広く市民の方々にも当研究所の活動にご理解をいただけますようお願い申し上げます。

平成7年7月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成4年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、普及啓発事業等報告（第4章）とした。
- 2 調査継続のため昨年度に報告を終了したもの、次年度に報告するものについては表5・6に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系Ⅵによった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500）、都市計画図（縮尺：1/10,000）、市街図（縮尺：1/30,000）を複製して調整した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点および調査対象地である。
- 8 図版1・2の調査地点番号のⅠは発掘調査、Ⅱは試掘・立会調査を表す。表5・6の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。
- 9 平成4年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、平成4年4月から12月実施分は平成4年度の各発掘調査概報に、平成5年1月から3月実施分は平成5年度の各発掘調査概報に報告している。
- 10 本年度の調査ならびに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。
- 11 写真は、遺物写真および一部を除く発掘調査の遺構写真は村井伸也・幸明綾子が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、編集と調整は資料課が行った。

目 次

第1章 発掘調査

I 平成4年度の発掘調査概要	1
II 平安宮・京跡	
1 平安宮中務省跡1	3
2 平安宮中務省跡2	4
3 平安宮左馬寮跡	5
4 平安京左京三条一・二・四坊	7
5 平安京左京三条二坊	16
6 平安京左京三条三坊	18
7 平安京左京四条一坊	20
8 平安京左京五条四坊	25
9 平安京左京九条二坊1	31
10 平安京左京九条二坊2	33
11 平安京左京九条四坊	35
12 平安京右京一条四坊	38
13 平安京右京四条一坊	41
14 平安京右京六条一坊	42
III 白河街区跡	
15 白河北殿跡	45
16 成勝寺跡	46
IV 鳥羽離宮跡	
17 鳥羽離宮跡138次調査	52
V 長岡京跡	
18 長岡京左京六条三坊・ 水垂遺跡	55
VI その他の遺跡	
19 松ヶ崎廃寺	60
20 植物園北遺跡	64
21 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	67
22 史跡大覚寺御所跡	68

23 史跡名勝嵐山	69
24 南春日町遺跡25～27次調査	73
25 史跡醍醐寺境内	77

第2章 試掘・立会調査

I 平成4年度の試掘・ 立会調査概要	79
II 平安京跡	
1 平安京左京二条四坊	80
2 平安京左京九条四坊	81
3 平安京右京三条一坊	82
III その他の遺跡	
4 長岡京左京三条四坊	84
5 長岡京左京四条四坊	85
6 長岡京左京九条二坊	86
7 嵯峨院跡	87
8 史跡名勝嵐山1	88
9 史跡名勝嵐山2	89
10 上里遺跡	91
11 向島城跡	93

第3章 資料整理

1 遺跡測量	95
2 コンピュータ	95
3 保存処理	96
4 復原彩色	97

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および 技術者養成事業	98
2 京都市考古資料館状況	99
3 役職員名簿	103

図 版 目 次

図版 1	調査位置図 1	平安京・白河街区・鳥羽離宮・長岡京地区調査位置図
図版 2	調査位置図 2	1 洛北地区調査位置図 2 嵯峨・桂地区調査位置図 3 大原野地区調査位置図 4 山科・醍醐地区調査位置図
図版 3	平安宮中務省跡 1・2	1 中務省跡 1 全景 2 中務省跡 2 全景
図版 4	平安宮左馬寮跡	1 B - 2 区全景 2 A 区全景 3 C 区全景
図版 5	平安京左京三条一・二・四坊	1 No.32 トレンチ全景 2 No.34 トレンチ全景 3 No.33 トレンチ全景
図版 6	平安京左京三条一・二・四坊	1 No.35 トレンチ全景 2 No.36 トレンチ全景
図版 7	平安京左京三条二坊	1 鎌倉時代から室町時代全景 2 平安時代全景
図版 8	平安京左京三条三坊	1 遺構面 3 全景 2 S E 56 3 S E 56 断ち割り
図版 9	平安京左京四条一坊	1 1 トレンチ平安時代前期全景 2 平安時代後期六角小路・S D 10 3 S X 200
図版 10	平安京左京四条一坊	1 2・3 トレンチ池全景 2 池導水施設 S X 36 3 題箋出土状況
図版 11	平安京左京四条一坊	1 2 トレンチ全景 2 4 トレンチ S E 300
図版 12	平安京左京五条四坊	1 第 1 - 2 面全景 2 第 3 - 1 面全景
図版 13	平安京左京五条四坊	1 第 3 - 2 面礫群および整地層 2 土壌 186 3 落込 5

図版 14	平安京左京九条二坊 1	1 全景
		2 S B 422
図版 15	平安京左京九条二坊 2	1 全景
		2 S X 185
		3 S E 80
図版 16	平安京左京九条四坊	1 B区全景
		2 A・C区全景
図版 17	平安京右京一条四坊	1 全景
		2 S A 4
図版 18	平安京右京六条一坊	1 1区全景
		2 2区全景
図版 19	平安京右京六条一坊	1 3区北半全景
		2 S X 11
		3 S X 11 北柱穴の下部礎板
図版 20	白河北殿跡	1 全景
		2 汀の状況
図版 21	成勝寺跡	1 南区全景
		2 北区東半部
		3 北区 S D 206
図版 22	成勝寺跡	1 S E 230
		2 S X 234
		3 西区全景
図版 23	鳥羽離宮跡 138 次調査	1 建物地業
		2 最終面全景
図版 24	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1 E 2・3区古墳時代全景
		2 E 1区古墳時代の河川と方形周溝墓
図版 25	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1 E 1区长岡京期全景
		2 E 1区六条条間大路
		3 E 1区東二坊大路東側溝
図版 26	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1 D区长岡京期全景
		2 D区长岡京期建物群
図版 27	松ヶ崎廃寺	1 全景
		2 石垣 B
図版 28	植物園北遺跡	1 1トレンチ全景
		2 2トレンチ全景

図版 28	植物園北遺跡	3	3トレンチ全景
		4	5トレンチ全景
図版 29	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	1	全景
		2	溝5
図版 30	史跡大覚寺御所跡	1	No.1 全景
		2	No.3 全景
図版 31	史跡名勝嵐山	1	江戸時代全景
		2	鎌倉時代から室町時代全景
図版 32	史跡名勝嵐山	1	地業1 基底部
		2	濠1 石垣
		3	S K 296
図版 33	南春日町遺跡 25・26次調査	1	25次調査全景
		2	26次調査全景
図版 34	史跡醍醐寺境内	1	1・3トレンチ全景
		2	4トレンチ土塁
		3	4トレンチ築地基底部
図版 35	平安京右京三条一坊	1	1トレンチ全景
		2	4トレンチ全景
		3	5・6トレンチ全景
		4	8トレンチ全景
図版 36	上里遺跡	1	1トレンチ全景
		2	建物

図 目 次

図1	平安宮中務省跡1	調査位置図	3
2	平安宮中務省跡2	調査位置図	4
3	平安宮左馬寮跡	調査位置図	5
4	〃	調査区および遺構配置図	6
5	平安京左京三条一・二・四坊	調査位置図	7
6	〃	遺構平面図	10
7	〃	No.35 トレンチ落込1 出土土器実測図	12
8	〃	調査位置図	13
9	平安京左京三条二坊	調査位置図	16
10	〃	遺構平面図	16

図 11	平安京左京三条三坊	調査位置図	18
12	〃	遺構面 3 平面図	19
13	平安京左京四条一坊	調査位置図	20
14	〃	1 トレンチ平面図	20
15	〃	4 トレンチ平面図	20
16	〃	2・3 トレンチ平面図	21
17	〃	3 トレンチ北壁断面図	22
18	〃	池出土題箋実測図	22
19	〃	出土瓦実測図	23
20	〃	出土遺物実測図	24
21	平安京左京五条四坊	調査位置図	25
22	〃	第 1 - 1 面遺構平面図	25
23	〃	第 1 - 2 面遺構平面図	26
24	〃	溝 1 - 3 断面図 (調査区北壁)	26
25	〃	第 2 面遺構平面図	27
26	〃	第 3 - 1 面遺構平面図	27
27	〃	第 3 - 2 面遺構平面図	28
28	〃	第 4 面遺構平面図	28
29	〃	落込 4 出土須恵器実測図	29
30	〃	土壙 527 他出土高麗青磁	29
31	平安京左京九条二坊 1	調査位置図	31
32	〃	調査区配置図	31
33	〃	遺構平面図	32
34	平安京左京九条二坊 2	調査位置図	33
35	〃	S X 121 出土土器実測図	33
36	〃	遺構平面図	34
37	平安京左京九条四坊	調査位置図	35
38	〃	主要遺構配置図	36
39	〃	S D 62 出土土器実測図	37
40	平安京右京一条四坊	調査位置図	38
41	〃	遺構平面図	39
42	平安京右京四条一坊	調査位置図	41
43	〃	遺構平面図	41
44	平安京右京六条一坊	調査位置図	42
45	〃	遺構配置模式図	43

図 46	平安京右京六条一坊	S D 15 出土土器実測図	44
47	白河北殿跡	調査位置図	45
48	〃	遺構平面図	45
49	成勝寺跡	調査位置図	46
50	〃	調査地全体図	47
51	〃	北区遺構平面図	47
52	〃	S E 230 実測図	48
53	〃	長沙窯黄釉褐彩壺	49
54	〃	白色土器・土塔実測図	49
55	〃	出土土器実測図	49
56	〃	出土漆塗瓦製品・軒瓦実測図	50
57	鳥羽離宮跡 138 次調査	調査位置図	52
58	〃	南壁断面図	52
59	〃	遺構平面図	53
60	〃	調査区配置図	54
61	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	調査位置図	55
62	〃	遺構平面図（古墳時代）	56
63	〃	遺構平面図（長岡京期）	57
64	松ヶ崎廃寺	調査位置図	60
65	〃	遺構平面図	61
66	〃	石垣 B 実測図	61
67	〃	出土土器実測図	62
68	植物園北遺跡	調査位置図	64
69	〃	遺構実測図	65
70	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	調査位置図	67
71	〃	遺構平面図	67
72	史跡大覚寺御所跡	調査位置図	68
73	〃	遺構平面図	68
74	史跡名勝嵐山	調査位置図	69
75	〃	遺構平面図（鎌倉時代から室町時代）	70
76	〃	遺構平面図（江戸時代）	71
77	南春日町遺跡 25～27 次調査	調査位置図	73
78	〃	遺構平面図	73
79	〃	1 トレンチ遺構平面図	74
80	〃	下西代 2 号墳移築復原全景	76

図81	史跡醍醐寺境内	調査位置図	77
82	〃	トレンチ配置図	77
83	〃	3トレンチ築地基底部	78
84	〃	4トレンチ土塁断面	78
85	〃	参道断面模式図	78
86	平安京左京二条四坊	調査位置図	80
87	平安京左京九条四坊	調査位置図	81
88	〃	2トレンチ全景	81
89	平安京右京三条一坊	調査位置図	82
90	〃	遺構平面図	83
91	長岡京左京三条四坊	調査位置図	84
92	〃	沼状遺構断面模式図	84
93	長岡京左京四条四坊	調査位置図	85
94	長岡京左京九条二坊	調査位置図	86
95	嵯峨院跡	調査位置図	87
96	史跡名勝嵐山1	調査位置図	88
97	史跡名勝嵐山2	調査位置図	89
98	上里遺跡	調査位置図	91
99	〃	1トレンチ遺構平面図	92
100	向島城跡	調査位置図	93
101	〃	No.116 地点出土唐津椀	94
102	〃	No.116 地点出土漆器椀	94
103	復原彩色	ポスターカラー	97
104	〃	アクリル絵具	97

表 目 次

表1	井戸枿材の整理と保存処理状況（保存処理）	96
2	小型木製品の整理と保存処理状況（保存処理）	96
3	平成4年度の遺物復原彩色件数一覧表（復原彩色）	97
4	平成4年度月別観覧者一覧表（京都市考古資料館状況）	102
5	発掘調査一覧表	105
6	試掘・立会調査一覧表	107
7	その他契約一覧表	108

第1章 発掘調査

I 平成4年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査の件数は32件で、昨年度より2件少ない。平安宮跡4件、平安京跡12件（左京域9件、右京域3件）、白河街区跡4件、鳥羽離宮跡1件、長岡京跡1件、その他の遺跡として洛北地区4件、太秦地区2件、南桂地区3件、伏見醍醐地区1件である。

白河街区跡（左京区岡崎最勝寺町63）と植物園北遺跡（左京区下鴨半木町地内）の調査については、すでに昨年度の『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』で報告している。また、平安京左京二条四坊（中京区柳馬場通竹屋町下る五丁目242）の調査については、次年度の調査概要で2次調査と合わせて報告する。したがって、本概要で報告する発掘調査の件数は29件である。ただし、平安宮左馬寮跡と成勝寺跡はそれぞれ2件を1項とし、南春日町遺跡についても3件を1項として項を立てている。

平安宮跡 中務省跡は国庫補助事業として2箇所を実施した。既往の調査では、築地、溝、柱穴などを検出したが、調査面積が狭く、部分検出にとどまり、建物規模を確定できなかった。今回の中務省跡1の調査（1）で、一棟分ではあるが、中務省北辺の建物の規模を確定できた。また中務省跡2の調査（2）で、省域の南北を二分する東西区画溝を検出した。左馬寮跡の調査（3）では、江戸時代に大規模な土取り作業が行われたため、遺物は出土したが、平安時代の遺構を検出することはできなかった。

平安京跡 左京域では、左京三条一・二・四坊（4）で、地下鉄東西線建設に伴う調査を行った。平成元年（1989）より継続して実施しており、神泉苑の池汀で検出した舟着の足場板を取上げる調査、平安時代前期の大型建物の補足調査などを行っている。地下鉄東西線の調査は、本年度でほぼ終了した。左京三条二坊の調査（5）では、平安時代から江戸時代までの遺構、遺物を検出している。また、左京三条三坊の調査（6）では、1町の中心を南北方向に延びる室町時代の濠を検出している。左京四条一坊の調査（7）では、六角小路の路面や側溝、園池の洲浜などが検出され、「朱雀院」と墨書された題箋が出土している。左京五条四坊の調査（8）でも室町時代後期の濠を検出している。この濠は、下京の町全体を囲む惣構に関連する濠とみられている。左京九条二坊では2箇所が発掘調査を実施している。左京九条二坊1の調査（9）では、平安前期の掘立柱建物、針小路の側溝、1町の中心である西二行と西三行を区画する溝などを検出している。また、左京九条二坊2の調査（10）では、平安時代後期から室町時代の柱穴、土壙、井戸などの遺構を検出したが、吉備系の土師器の椀が出土したことは注目される。左京九条四坊の調査（11）では、古墳時代の河川が検出され多量の布留式期の土器が出土している。

右京域では、市立花園小学校内で行った右京一条四坊の調査（12）で、中御門大路の北側の築地基底部、溝などを検出している。築地基底部の残存状態は良好であった。右京四条一坊の調査

(13)では、朱雀院の推定地ではあるが、11世紀半ばの湿地堆積層を確認するにとどまった。右京六条一坊の調査(14)では、楊梅小路を検出している。この調査によって、右京六条一坊十三町を東西に二分する南北溝が北に延長することがわかり、右京六条一坊十三町の北西部が4分の1町に分割された宅地であることが判明した。

白河街区跡 白河北殿跡の調査(15)では、北殿内に築かれた園池の汀線と考えられる遺構を検出し、池およびその周辺からは多くの瓦が出土している。成勝寺跡の調査(16)では、この寺院に直接関連する遺構は確認できなかったが、寺院が成立していた時期の井戸群と区画溝を検出している。遺構の状況からすると調査地に寺院の中心伽藍を想定することは難しい。下層で検出した弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の竪穴住居が検出できたことは大きな成果であった。

鳥羽離宮跡 鳥羽離宮跡138次調査(17)では、鳥羽離宮田中殿に関連する地業を検出している。地業最下層から出土した「讃岐国」と記された木簡は、田中殿の造営との関連で注目される。

長岡京跡 昨年度から引き続き長岡京左京六条三坊・水垂遺跡の調査(18)を実施した。長岡京左京六条三坊は、弥生時代から古墳時代の集落跡でもある。本年度は東二坊大路の東側溝と東三坊第一小路、六条第一小路とその交差点を検出した。また、3戸主分の宅地と建物を検出できたことも重要な成果であった。

その他の遺跡 周知の遺跡として登録されている松ヶ崎廃寺で試掘調査を行い、石垣を検出し、この石垣は妙泉寺跡に関連する石垣であることが判明した。試掘結果に基づいて発掘調査(19)を行い、造り替えながら室町時代後半から江戸時代まで続く石垣を検出した。天文法華の乱で妙泉寺は焼き討ちされるが、この時期に対応する石垣も検出している。地下鉄烏丸線の北進に伴う植物園北遺跡の調査(20)では、北山通の造成工事によって削平されたため遺構の残存状況は良くなかったが、弥生時代後期の竪穴住居の一部を検出している。特別史跡特別名勝に指定された鹿苑寺庭園の一角に鐘楼があり、この鐘楼の修理に伴う調査(21)を実施した。江戸時代後期の土壙から多量の陶磁器が出土した。また、室町時代の溝や土壙なども検出した。

史跡大覚寺御所跡の調査(22)では、注目される遺構の検出はなかった。史跡名勝嵐山の調査(23)では、天龍寺旧境内から鎌倉時代の濠、室町時代の濠、地業などを検出している。地業は2箇所検出しており、一つは方形を呈する石積みの地業であることが判明した。

南春日町遺跡では25～27次調査(24)を実施した。25次調査では、平安時代中期の土壙、平安時代から中世の遺物包含層などを検出しており、26次調査では、中世のピット、土壙、溝を検出した。27次調査は下西代古墳の石室移築に伴う調査である。

史跡醍醐寺境内の調査(25)では、江戸時代の築地の基底部を検出している。

以上、平成4年度の発掘調査概要の大略を述べたが、本年度も平安京跡を中心に市内各所の遺跡を活発に調査することができた。京都市内は、歴史都市と言われるだけに、発掘調査の対象遺跡は多岐にわたる。本概要にも弥生時代から江戸時代までの集落跡、都城跡、寺院跡、城跡など各種の遺跡が含まれている。こうした種別に富んだ遺跡の発掘調査を順次進め、内容ある概要報告を積み重ねることによって京都の歴史を解明する一助としたい。

(永田信一)

II 平安宮・京跡

1 平安宮中務省跡1 (図版1・3-1)

経過 平安宮中務省推定地域にあたる調査地で、ビルの建設が予定された。そのため工事に先立って試掘調査を実施したところ、平安時代の遺構が良好に残存していることが判明したので、発掘調査を行うことになった。

遺構 調査地の基本層序は、盛土層が0.15m、平安時代遺物包含層である褐色砂泥層が0.1～0.2m堆積、その下が第1遺構面となる。第1遺構面では、灰黄褐色砂泥層を0.2m積み上げた低い盛土（基壇）の上で礎石建物、その北側



図1 調査位置図 (1:5,000)

にある瓦溜、北限築地の内溝などを検出した。礎石建物の柱穴には方形のものと円形のものがある。いずれも深さは10cm前後で、他でみられた根石は検出できなかった。瓦溜は基壇の北縁に沿って形成されているが、建物の軒から落ちた状態で堆積したのではなく、崩れ落ちた瓦を基壇の周辺に廃棄したものと思われる。北限築地の内溝は幅2.7m以上、深さ1.1mを測る。堆積層は4層に分かれ、上3層は溝を埋め立てた時のもので、一気に埋められたことがうかがえる。また、この溝は西辺で狭くなり、台状の張り出しがある。

灰黄褐色砂泥層を除去すると地山の黄褐色粘質土層となり、この面が第2遺構面となる。第2遺構面では平安時代前期と古墳時代後期の遺構が形成されている。平安時代前期の遺構には掘立柱建物の柱穴、北限築地の内溝がある。掘立柱建物は、付近の調査で検出された柱穴とのつながりから考えると、身舎が2間×7間東西棟で南庇の付く建物に復原でき、今回はその東の妻部を検出したことになる。古墳時代後期の遺構には土壇、柱列、溝、竪穴住居がある。竪穴住居は、築地内溝の張り出し部でカマドの底部と床面の一部を検出した。カマドは楕円形を呈し焼土と炭が堆積している。上部構造を失うが、支脚の石が据え付けられている。

遺物 遺物の大半は北限築地内溝と瓦溜から出土した瓦類で、軒丸瓦1点、軒平瓦2点、緑釉瓦片1点などがある。平安時代の土器類は、土師器皿・杯・高杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・壺、黒色土器、緑釉陶器椀・耳杯、灰釉陶器の皿・蓋・壺、青磁椀などがあり、古墳時代の土器類には、近江型とよばれる長胴の土師器甕・杯、須恵器杯・蓋・甕・甕などがある。

小結 今回の調査では、中務省関連の遺構として新旧2時期の遺構を検出した。これは従来の付近の調査と一致する。特記すべきことは、平安宮造営当初の中務省北辺建物の規模を確定できたことである。

(木下保明・吉崎 伸)

『平安京跡発掘調査概報』平成4年度 1993年報告

2 平安宮中務省跡 2 (図版1・3-2)

経過 当地に住宅兼事務所の新築が計画されたことにより試掘調査が行われた。その結果、現地表下0.3～0.4 mにおいて平安時代の瓦を包含する土層が確認された。このため、建築工事に先立って発掘調査を実施することになった。調査は、機械掘削で現代盛土層および近世以降の整地層を除去して開始した。しかし、予想したよりも近世以降の攪乱が多く存在しており、島状に残る箇所を調査を行うといった状況であった。

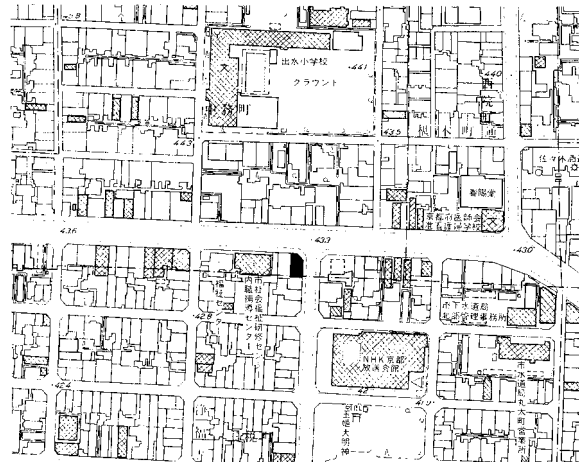


図2 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 基本層序は、現地表下0.3 mまでが現代盛土層、以下0.1 mの近世整地層が認められ、黄褐色から褐色を呈する砂泥層（地山）に達する。

検出した遺構には、近世以降と平安時代前期のものがある。

平安時代前期の遺構は地山を掘り込む状態で検出したが、先述したように近世以降の遺構や攪乱に寸断され、いずれも遺構の全容がわかる状態で検出できたものはなかった。主なものには、柱穴（P 31・50・67）、溝（S D 46・52・57）、土壙（S K 47）などがある。

S D 46は、調査区のほぼ中央にあり、東西方向の溝と考えられる。検出面での規模は幅3.4 m、深さ0.25 mある。東西約3 m分を検出しており、埋土は瓦片を多量に含む上層と、ほとんど含まない下層に大別でき、上下2時期あることがわかった。下層からは、溝が半ば埋まった段階で投棄された完形に近い土師器杯や緑釉陶器碗などが出土した。一方、上層は下層溝が埋没後再度掘削されており、埋土からは細かく破損した多量の瓦片が廃棄された状態で出土した。S D 52・57も東西方向の溝であり、S D 46と平行するものと考えられる。また、柱穴はいずれも建物としてのまともは確認できず、P 31・67はS D 46を切った状態で検出した。

遺物は、整理箱で73箱出土した。その大半は瓦類であり、土器類はごく少量であった。遺物のほとんどはS D 46の埋土から出土している。土器類には、土師器杯・皿、須恵器碗・皿・甕、緑釉陶器碗などがある。瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦が少量あるが、ほとんどは平瓦であり、丸瓦がこれに次いで多い。瓦類はいずれも磨滅が著しく、完形に復原できるものはなかった。

小結 調査地は、中務省域の南北のほぼ中央で、その東部に位置するものと推定される。本調査区中央で検出した東西溝S D 46は、これまでの調査成果から、中務省域の南北を二分する東西区画溝の一部であると考えられる。また、この溝に平行するS D 52・57も同様に区画に関する溝の可能性はある。

(高橋 潔)

『平安京跡発掘調査概報』平成5年度 1994年報告

3 平安宮左馬寮跡（図版1・4）

経過 京都市立朱雀第二小学校の校舎全面改築に伴い、試掘調査（発掘調査のA・B区に該当する地点）を行った。その結果、B-2区で南北方向の瓦を多量に包含する溝状遺構を検出したことから発掘調査を実施した。

調査地点は平安宮左馬寮跡に該当し、同校敷地は左馬寮跡のほぼ北半に位置する。平城宮馬寮跡の調査では、同官衙区域北寄りに正殿や付属施設、および馬場、既舎が検出されており、今回の調査においても上記遺構の検出が想定さ



図3 調査位置図（1：5,000）

れた。他に西面築地（西大宮大路東築地）、北面築地（中御門大路宮内延長路南築地）および藻壁門などが想定できた。左馬寮跡北西隅部は、既存校舎の位置に該当するため解体時に立会調査を行った。調査は既存建物の解体と併行するため、4箇所に分けて調査区を設定し、A区・B-1区・C区・B-2区の順に調査を進めた。調査の結果、各調査区とも大部分が聚楽土採取のための土取穴で占められていたが、一部で平安時代の土壌、遺物包含層を検出することができた。

遺構 各調査区の基本的な層序は、A区・B-1区・C区では現地表面から同小学校整地土層および建物建設時の積土層、江戸時代から明治時代にかけての旧耕作土層（黒褐色泥土層）、江戸時代の整地土層と考えられる黄灰色砂泥層（礫混）などが堆積しており、現地表下0.8～1.0mで無遺物層となる。ただし、B-2区南側では前述した旧耕作土層は堆積していない。B-2区では無遺物層上面で江戸時代から明治時代にかけての土取穴や土壌を重複した状態で検出している。無遺物層は黄褐色・灰黄色粘土（聚楽土に該当する）と黄褐色砂礫が混在する。

なお、火山灰の調査のため、B-2・C区では無遺物層検出面からさらに約2m下まで掘り下げて土層の観察を行った。B-2区の層序を示すと、灰褐色微砂層、灰褐色腐植土層（礫混）、黄褐色粘土・微砂層、始良Tn火山灰層、暗灰色腐植土層となり、火山灰層の上面は現地表下約1.8mで検出した。火山灰は灰黄色から灰白色を呈し、厚さは5～20cmある。細部を観察すると、火山灰下層の粒子は粗く上面に向かって徐々に細かい粒子となることが確認でき、いわゆる二次堆積のものと考えられる。

検出した遺構総数は105基に及ぶが、大半は江戸時代以降に属する遺構である。

平安時代に属する遺構にはC区では土壌2基、B-2区では遺物包含層（厚さ約0.1m）を検出した。いずれも平安時代前期の遺物を包含している。

江戸時代以降の遺構には土取穴、耕作に伴う溝がある。土取穴は一辺約2～3m程度の方形を呈する土壌の連続するものと、不定形で壁面の立ち上がりの不明瞭な土壌の2種がある。なかには検出面からの深さが約2mに達し、砂礫層下の粘土層を採取するものもある。土取穴からは近

世の陶器などと共に平安時代に属する多量の瓦や土器類が出土した。

耕作に伴う溝は、大部分が東西・南北溝である。土取穴との重複状況や出土遺物から明治時代とそれ以前（江戸時代）のものと少なくとも2時期があるようである。

遺物 遺物は整理箱で118箱出土した。大半は土取穴から出土し、平安時代と江戸時代以降のものが主である。平安時代に属する遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦、室町時代に属する遺物には土師器、陶器、江戸時代に属する遺物には瓦、土師器、陶磁器、染付などがある。

瓦類には軒丸瓦31点・軒平瓦25点・緑釉丸瓦6点・鬼瓦1点・ヘラ記号瓦5点などがある。軒瓦の多くは平安時代前期から後期に属するものであるが、搬入瓦も幾つか含まれている。

平安時代に属する土器類は大半が土取穴から出土し、細片が多数を占める。須恵器では円面硯、風字硯がある。緑釉陶器は大半が椀・皿類で、陰刻花文を施すものが数点、透かしのある香炉蓋が1点ある。灰釉陶器も椀・皿類が多数を占め、他に壺・平瓶がある。輸入陶磁器には黄釉褐彩陶器、青磁、白磁などがある。このほか石製品では面取りを施した凝灰岩片がある。

小結 今回の調査では、左馬寮跡を示す明確な遺構は検出できなかった。調査区の大部分が江戸時代の土取穴による削平を受けていたことが大きな要因である。また、B-2区の遺物包含層、C区の土壌はいずれも浅いものであることから、今回の遺構検出面と比較して平安時代の遺構面が高く、全面的に後世の削平を受けたことも考えられる。

遺物では瓦類が破片数で約13,600片出土した。各地区ごとの瓦の分布状況を概観すると、B-2区に集中し軒瓦の出土も多いことがわかる。B-2区の西端から約1m西に西大宮大路東築地心推定線が通ることから、B-2区出土瓦は同築地に使用されていた瓦の可能性も考えられる。

平安時代の土器類については細片が大半であるが、平安時代前期のものが多数を占め、平安時代中期から後期に属するものも少量ではあるが出土している。土器類の破片数を示すと、土師器約3,550片、須恵器約780片、灰釉陶器約240片、緑釉陶器約190片、黒色土器約10片がある。

なお、土取穴の埋土には、当該地周辺における平安時代に属する遺構や整地土層などの検出例に通有な褐色を呈する土層が大量に混入し、しかも上記遺物が包含されていることから、土取り作業を主体に、広範にわたる土層の採取ならびに移動が行われたことを示しているとともに、当該地に平安時代の遺跡の遺存していたことを示している。したがって、土取りの及ばない地域では遺跡の遺存している可能性は高いと考えられる。（辻 裕司・近藤知子）

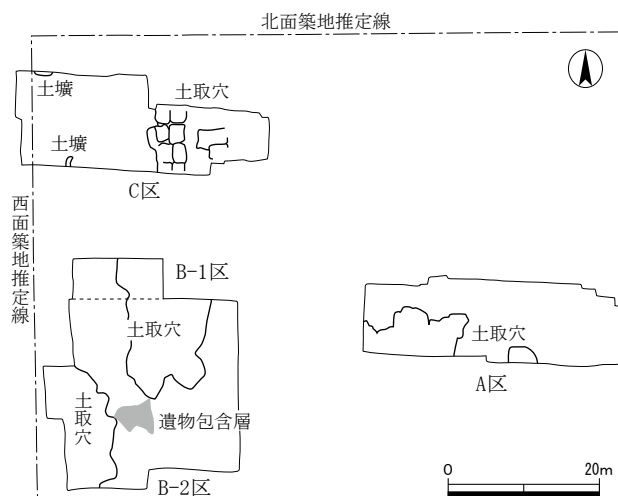


図4 調査区および遺構配置図(1:1,000)

4 平安京左京三条一・二・四坊 (図版1・5・6)

地下鉄東西線建設に伴う平安京関係の発掘調査は、平成元年（1989）1月から開始しており、今年度の調査は6次調査となる。工事に伴う遺跡調査の対象地は、主としてオープンカット工法で工事が行われる二条駅と堀川通間の押小路通と、御池烏丸以東の御池通の道路上であり、大きく東西の2ブロックに分かれる。工事工区では、西側ブロックが西から二条駅工区、押小路工区、堀川駅工区、東側ブロックが西から堺町工区、市役所前工区、鴨川工区の各3工区である。

1 西側ブロック史跡内の調査

経過 西側ブロックの調査は、押小路通道路上での主要調査はほぼ終了している。今年度の調査は、旧二条離宮史跡内の追跡・補足調査と、工事掘削への立会調査がその主なものである。史跡内の発掘調査は、二条城関連遺構、西限と西辺部および園池の北縁部や流路などの神泉苑関連遺構、また平安京左京三条二坊二町（木工町推定地）、同七町内の遺構など多数の遺構を検出する成果を得た。道路上では、諸々の事情から前回調査に組み込めなかった部分を対象として、工事工程内で主要遺構を中心に追跡調査を実施した。覆工板下調査、立会調査が主な方法となったが、可能な部分では簡略ではあるがトレンチ調査（No.32）も行った。覆工板下調査には調査区番号にFを付して、トレンチ調査とは別扱いしている（F-No.12～14）。今年度は、神泉苑の流路を含む園池北縁部（No.5～31調査区）と西築地付近（No.3調査区）をパイプルーフ工法により部分的であるが現状保存することが決定された。保存区域からはずされた調査区No.3東部、No.21・22トレンチ、No.31トレンチ西端部と東半部では、平安時代の遺構面の基層と地山を対象とした断ち割り調査も実施している。No.5トレンチの保存区域では、舟着遺構の足場板を取り上げて保存することとなり、その作業および足場板設置面の調査を行った。道路外でも駅舎出入口関係などの調査を史跡内で行っている（No.33～36）。

遺構・遺物

神泉苑西半部

F-No.14の調査 この調査では、神泉苑西築地基底部とその東側小溝および推定壬生大路東

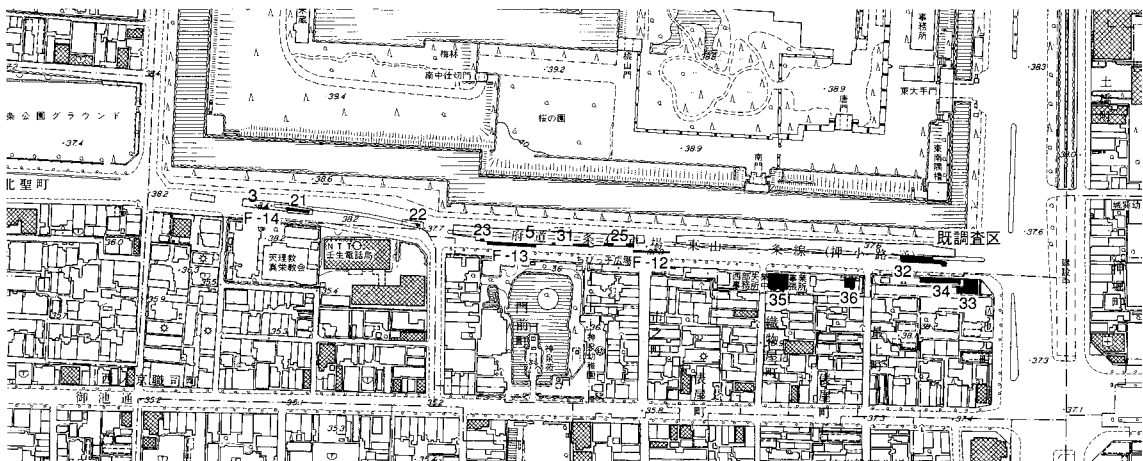


図5 調査位置図 (1:5,000)

側溝が、No.3の検出部分と同じ構造で、南側へ延びていることが明らかとなった。しかしその南側の門推定部分では、N T Tの埋管や防空壕の掘形が地山まで達しており、調査を断念した。築地の基底部には平瓦が敷かれており、これらにも「神泉苑」銘の刻印のあるものが数点含まれていた。築地基底部を形成する地山直上土層（地山類似土）からは、遺物は採取できなかった。

No.3 断ち割り調査 No.3 礫群遺構直下で同方向に延びる素掘り状態の溝を検出した。その溝内からは、緑釉瓦を含む多数の瓦類と平安京I期新(910年頃～940年頃に比定)に属する土師器・須恵器が出土している。平安時代初頭中に埋設され、礫群遺構に造りなおされたものとみられる。苑内でこの時期に確定できる遺構が検出された意義は大きい。また緑釉瓦が含まれていたことも重要である。この時期までには、苑内の建物にすでに緑釉瓦が使用されていたことの証左と考えてよいだろう。

No.21 断ち割り調査 No.3 東端部からNo.21にかけての礫群遺構は、地山上面の整地の際に使用した周辺の地山土に含まれている礫の大小を使いわけて形成された可能性も大きいですが、今回の断ち割り調査では明確にはできなかった。

No.22 断ち割り調査 約1m掘り下げた時点から湧水が激しくなり、それ以上の掘り下げは中止した。平安時代の遺構面形成土層は地山最上層と判断したが、汚れがあり、周辺地山を利用した整地土層の可能性もある。No.21からNo.22調査区間は、随時立会調査を行ったが、工区幅いっぱい埋設管掘形が切り合っており、残存堆積層の様相も把握できなかった。No.22とNo.4調査区間の神泉苑通交差点部も、暗渠およびその周辺からの湧水が激しく成果は得られなかった。

神泉苑園池北縁部

No.5 足場板の調査 No.5で検出した舟着遺構の足場板は仮保存し、遺構面には山砂を入れて保護し埋め戻した。足場板の取り上げに際しては、小規模な調査区を設けて作業を行った。足場板は2.5mの間隔で池側壁からつきだした自然木（流木）を利用し、板上面の水平を確保して設置されていた。側壁は人工的に造り出したとみられるので、枕木にされた自然木の北半を覆う土層は整地土であろう。板の直下面は若干掘り窪められたものとみられるが、保存区間でもあり、側壁部、直下面とも表面観察にとどめ、検出した面の記録作業後に遺構面に山砂を入れて埋め戻した。足場板は、取り上げた直後より保存処理を実施することになり、現在も「高級アルコール法」で処理中である。

F-No.13 調査 No.31 調査区とその南側のN T T埋設管掘形間が、幅2mが未攪乱で残存していることが立会調査で確認できた。このため、園池北縁部と流路河口部を含む範囲に調査区を設定し、No.31調査区から続く園池を検出した。西への広がりや予想より小さかったが、園池内堆積土は、さらに南へと延びている。堆積土中からの出土遺物はごく少ないが、池の底面からは縄文時代晩期の土器片も出土している。平安時代の園池北縁部から流路河口部分の下層は、縄文時代晩期に埋没した沼沢地の可能性が大きい。

No.31 断ち割り調査 本調査では、縄文時代から平安時代以降の池のベースが、砂礫を主体とする自然堆積層（地山）であることが明らかとなった。園池北縁部西側では、平安時代遺構面（こ

ここでは地山上面)から1.2mの深さの地層上面で、東へ下る窪地肩部を検出しているが、縄文時代後期から晩期よりもさらに古い流路もしくは池状の遺構の肩部の可能性もある。

大宮大路関係

F-No.12調査 No.25調査区では、平安時代の大宮大路西築地(神泉苑東築地)を検出しているが、犬行幅が規定より広い。西側溝とみられる遺構は、東壁沿いに南北に延びる東への落ちを検出(No.25では溝4としている)している。今回の断面調査によってNo.25の東壁沿いで検出した遺構は、南北方向に延びる溝1の西辺部であったことが理解できる。No.26から続く路面との関連から、平安時代中期後半(11世紀)代以前の遺構であるが、構内からの出土遺物がほとんどなく、こまかい時期比定はむずかしい。しかし平安時代前半代の大宮大路西側の犬行と側溝は、通常の大路の規格サイズと比べてより大きな規模の施設であった可能性を示す資料であり、溝1は大宮大路にあったとされる大宮川(耳敏川)の可能性が大きい。宮外周の犬行、隍との関連が注目される。

左京三条二坊二町(木工町推定地)

今年度は、押小路通と黒門通の交差点南東部宅地内にあたる堀川駅舎出入口建設予定地にNo.35、その東側の押小路通と猪熊通交差点南西部宅地内にあたる地下工事用の施設建設予定地にNo.36の、2箇所の調査区を設定して発掘調査を実施した。また押小路通の駅舎工事区では立会調査を行ったが、特筆すべき成果は得られなかった。

No.35・36の調査 両調査区ともに、中世から近世の土層は、北側道路の調査同様に比較的薄く、現表土下0.5～0.6mで地山面が検出される。地山は黄褐色系の色調をもつ泥砂・シルト層である。平安時代の遺構面は地山直上に展開している。平安時代では、地山の地形を平坦に整地した結果とみられる部分的な土層は確認されるが、全体として土層が積み上がった様子はない。遺構面に整地とみている土層が積み上がるのは、中世も後期に入ってからであり、近世層はその上に厚く(0.4m前後)堆積している。平安時代以前の遺構はNo.36の北西コーナーで検出した落込がある。砂・砂礫で埋没しており、北東から南西方へ延びる自然流路の一部とみている。出土遺物が少なく埋没期は確認できないが、平安京成立後も残存していた可能性もあり、北側のNo.9～29で検出している流路との関連を検討する必要がある。平安時代の遺構は、各期のものを多数検出しているが、両調査区ともに平安時代中期後半代に入ると大きく変化する。平安時代前半代は、遺構密度は低いが、前期の掘立柱建物(柱穴1～7、柱間心々3m、2間×3間以上南北棟)をNo.35で、No.36でも前期の大型建物の一部(柱間心々約3m)とみられる柱穴(土壌15・50・51)を検出している。No.35では大型建物の柱穴を切って成立している落込1から、木工寮との関連の深さをうかがわせる「木屋」と線刻された緑釉陶器皿などが出土している(平安京Ⅱ期古)。中期前半代では明確な建物は検出していない。中期後半代に入ると、Pit(小型の柱穴)が急増し様相は一変する。小型の掘立柱建物が稠密化するためとみられ、この様相は後期にも継続している。これは二町地の居住を含めた質的变化を反映したものとみられよう。調査区も狭小であり周辺調査の進展を待って検討を進めたい。鎌倉時代から室町時代では、平安時代後半代に比べ遺構が減

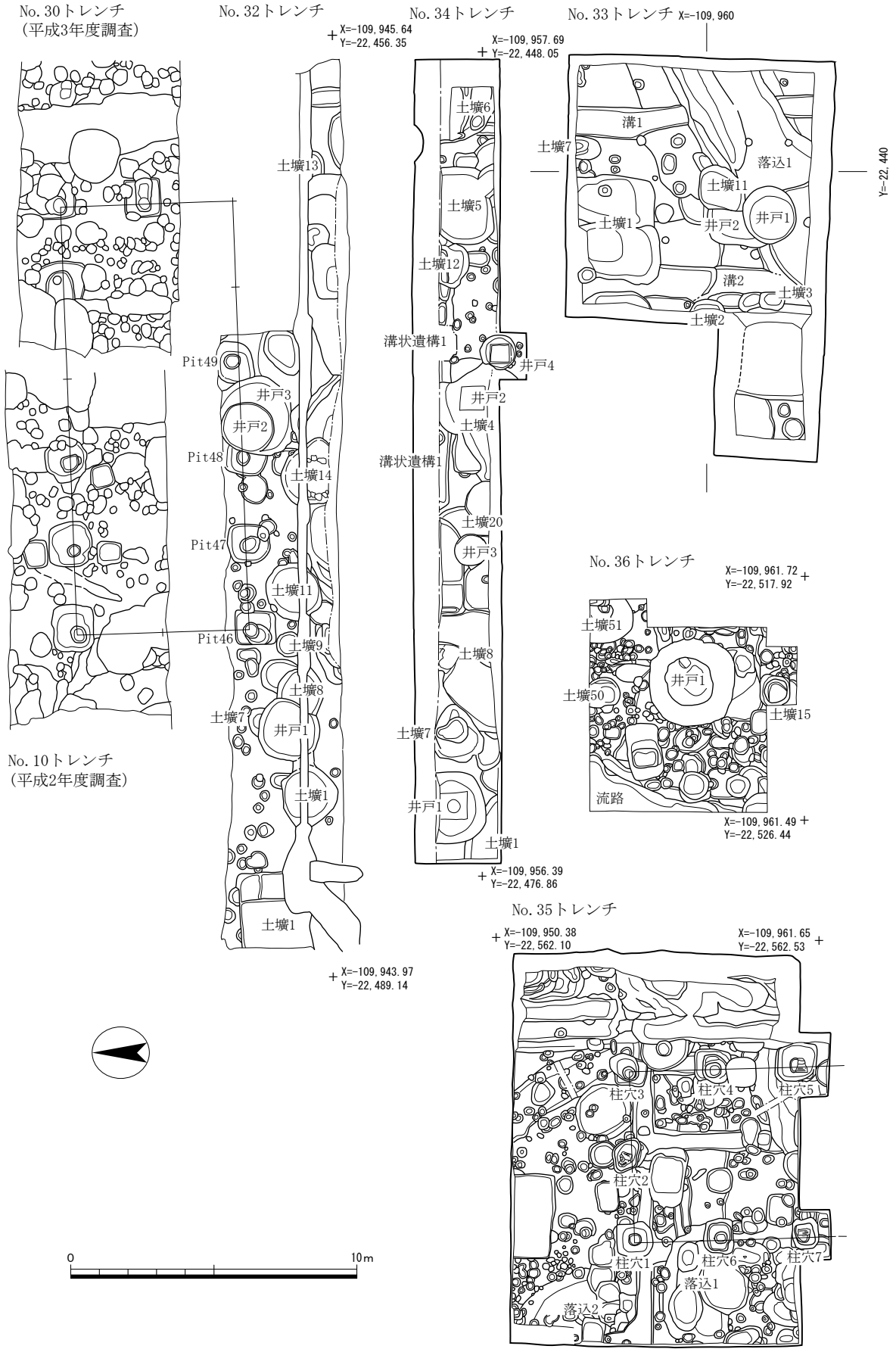


図6 遺構平面図 (1:200)

少する。No.35では、13世紀前半代まで平安時代後半代の様相が残るが、以後15世紀前半代までは空白の状況を呈する。No.36では、13世紀後半代から14世紀前半代には、一時期井戸を含む遺構が増え町的様相を呈するが、以後15世紀前半代までは再び減少し、空白期となる。室町時代後半代の15世紀末から16世紀代に入ると、再び両調査区ともに遺構は増加し、再都市化とみられる様相を呈する。道路上の同町内の調査区でも同様の傾向を示している。桃山時代から江戸時代には、継続して各種の遺構が検出されるようになる。二条城建設に伴う押小路通の移設後も、両調査地点は宅地側に位置している。宅地として当町の利用が続いた結果と理解され、明治以降から現代まで継続している。

左京三条二坊七町

道路上では、No.10・30調査区で検出した大型建物の追跡を主目的として、建物南辺部分を中心にNo.32調査区を設定し、道路南側の宅地内では、堀川駅出入口建設予定地にNo.33・34の2箇所調査区を設けて発掘調査を実施している。道路上の工区では立会調査なども実施した。

No.32の調査 No.32では、大型建物の身舎南辺の柱穴4基（Pit46～49）を検出、またその東延長部では立会調査によって、柱穴の痕跡を2基確認している。柱穴掘形や柱の推定径はNo.10・30で検出したものと同規模である。Pit46の抜取穴からは、平安時代初頭の軒丸瓦が出土しており、同建物の解体推定年代は先の検出部分とも矛盾しない。この結果、建物身舎部分に関しては、想定どおり南北2間×東西5間の東西棟であることが確定できた。また東側と西側に関しては、庇がつかないことはすでに明らかとなっていた。しかし南側庇の推定ラインは新しい時代の遺構に攪乱されており、確認することはできなかった。北側に関しては調査対象地外のため未確認である。調査区内では、上述の建物が解体された後の平安時代前期から中期前半代には、遺構は少なくなる。Pit（柱穴）を主とする遺構は、中期後半代（11世紀）に増加し、稠密な宅地化が進み、この様相は後期まで継続する。鎌倉時代から室町時代初頭（14世紀半頃）までは、井戸も加わり宅地としての利用は続いているが、室町時代前半代の14世紀後半頃からは遺構が激減し、15世紀後半代まで空白状態となる。室町後半代の15世紀後葉頃から16世紀代には、再び土壌、Pitなど各種の遺構が増加し、桃山時代には井戸も検出されている。江戸時代には押小路通となるためか、江戸時代の掘り込み形の遺構はほとんど検出されていない。

No.33・34の調査 両調査区では平安時代前期から中期の遺構は少ないが、No.33の南西半で北東から南西方へ延びる自然流路の一部とみられる遺構（落込1）を検出している。この遺構は、黒色のシルトが堆積し、滞流期間が長かったとみられる。出土遺物からみて初頭には機能していたが、平安時代前期中頃にはほぼ埋没する。平安時代中期後半代の整地土層がこの遺構埋土に直接かぶる。平安時代中期後半にはNo.33で整地土層が検出されており、柱穴を主とするPitが増加し、井戸、溝状遺構、土壌などもみられるようになる。中期前半代までの様相とは異なり、宅地化が進む。この様相は平安時代後期以降、室町時代前半代の15世紀始めまで続く。以降15世紀代は比較的遺構の少ない期間があるが、15世紀後葉以降は再び遺構の増加がみられる。当町も、西側の二町同様空閑地の多い地域となったとみられる。桃山時代には、整地土層もみられ土壌な

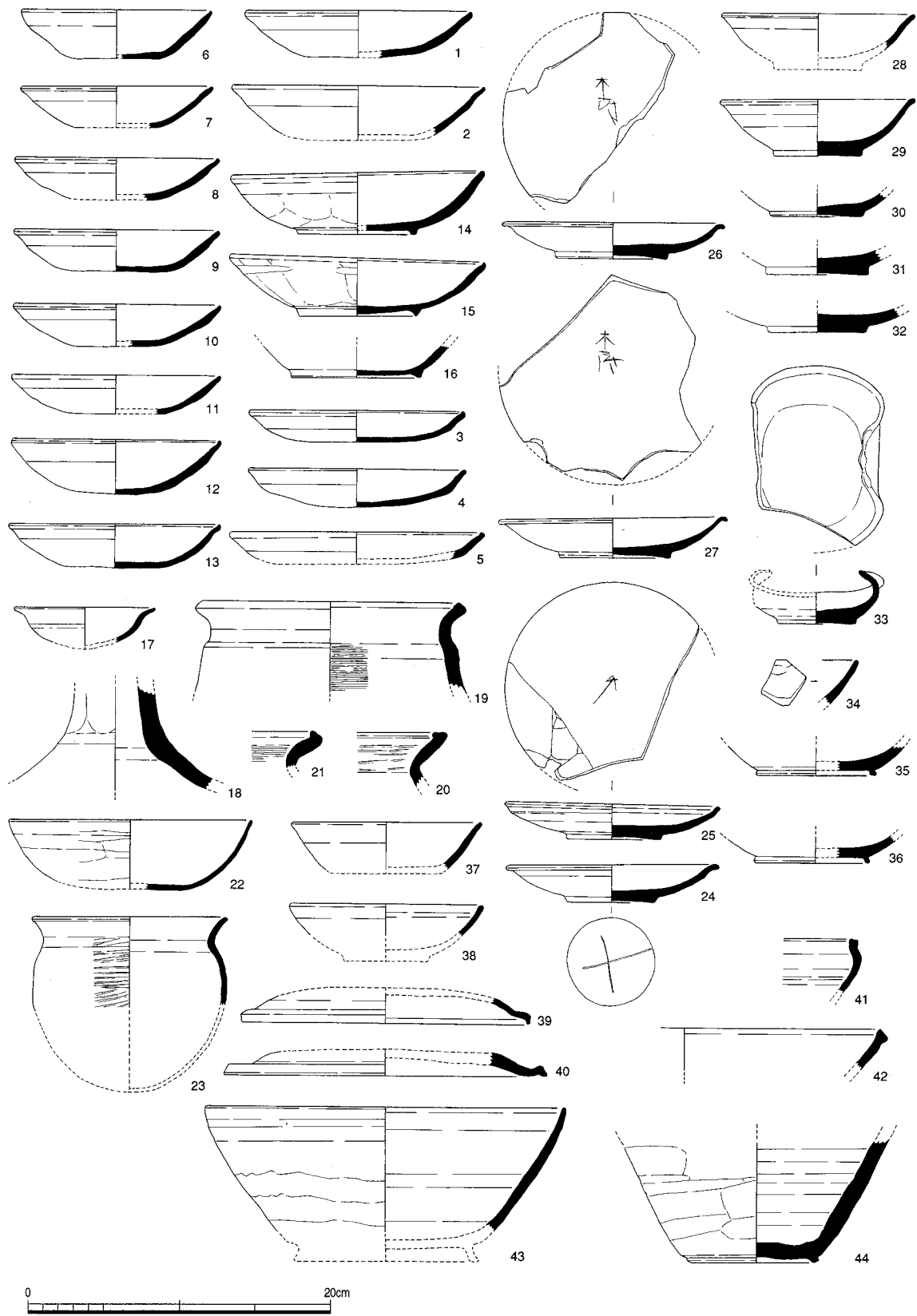


図7 No.35 トレンチ落込1 出土土器実測図 (1~21:土師器 22・23:黒色土器
24~35:緑釉土器 36:灰釉土器 37~44:須恵器) (1:4)

どの遺構が多くなり、江戸時代に入っても、各期の遺構が継続する。

小結 発掘調査は、平成4年度分の調査完了をもって、ほぼすべて終了したことになる。3年間にわたる神泉苑やその東側の左京三条二坊二町・七町、壬生大路、大宮大路、猪熊小路など個々の遺跡に関する調査成果は非常に大きいものといえる。

2 東側ブロックの覆工板下調査と立会調査

経過 東側のブロックとなる御池烏丸以东に関しては、御幸町通までは、本調査にあたる工事前段階の御池通道路上でのトレンチ調査は完了している。工事進行の関連で今年度には立会調査とともに覆工板下調査を実施した。堺町工区と市役所前工区で予定した覆工板下の調査は、平安時代から近世の街路を中心に条坊・町の変遷を把握することを主な目的としたものである。当初10箇所を選定したが、採光・工事の進行条件などを勘案し、実施したのはF-No.1・3・4・6・7-1・7-2の6箇所で、左京三条四坊および平安京隣接地にあたる。

遺構・遺物

F-No.1の調査 桃山時代から近世前期の遺構は、溝・土壇・柱穴などを検出した。溝は、南北方向で幅0.8mを測る。両岸は杭が密に打たれ、板で護岸される。堆積土は灰褐色泥砂層であった。溝の西部には灰色砂泥層の路面が5層、0.4mの厚さで堆積していた。溝の底と最下層の路面の標高はほぼ等しく、路面の成立が溝よりやや古い。溝と路面は検出した位置関係から桃山時代に施工した堺町通の東側溝と路面にあたる。この溝に対応する西側溝は攪乱で検出できなかった。この溝の東には1.6m間隔で、径15cmの柱穴がある。柱穴列の東部では宅地内の溝を検出した。室町時代の遺構は路面の下層で幅2.2m、深さ0.9mの南北方向の堀を検出した。桃山時代の溝などからは、土師器皿・小壺、瓦器鉢、瀬戸美濃系の鉄釉茶入・天目茶椀・志野皿、唐津椀、備前、丹波、信楽などの焼締陶器播鉢、輸入の明染付椀、瓦類など、室町時代後半の堀からは土師器皿、瓦器鍋・羽釜・火鉢、焼締陶器甕、瀬戸灰釉鉢・鉄釉天目茶椀、輸入陶器青磁椀、瓦類などの多数の遺物が出土している。平安時代の遺構は、トレンチ全域で小規模な柱穴を多数検出した。

F-No.3の調査 鎌倉時代の遺構は、方形の土壇3などを検出した。平安時代の遺構は、池

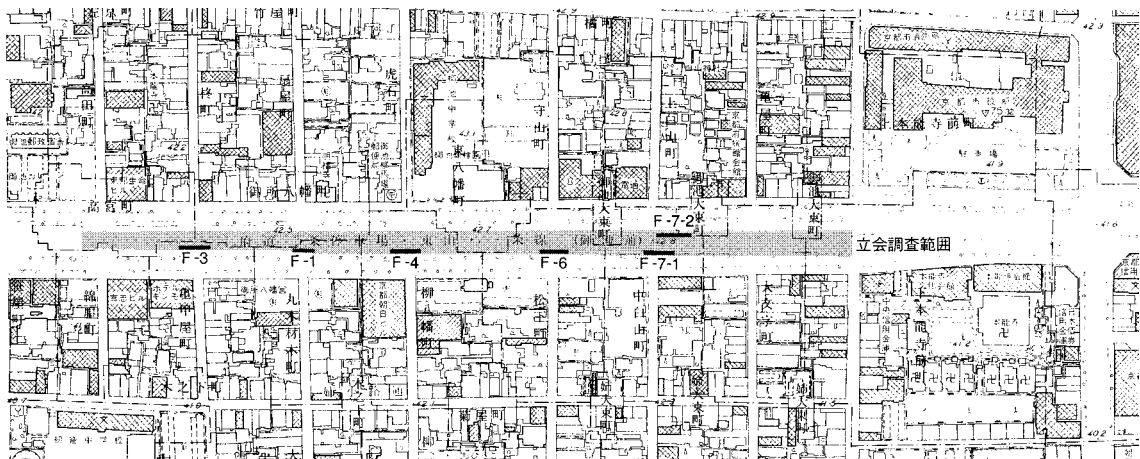


図8 調査位置図 (1:5,000)

に注ぐ遣水の遺構（溝）を検出した。遣水は近世の井戸で中央部が破壊されているが、幅は1.6m前後、深さは0.5mである。堆積土層は大きく2層に分かれ、上層は灰色砂泥層で、径5cm前後の川原石が混じり、下層はオリーブ灰色砂泥層で川原石を敷き詰めている。溝の北肩部には整地層があり、この上面から溝を掘り込んでいる。整地層からは土師器皿、緑釉陶器碗など10世紀代の遺物が少量出土した。条坊と検出位置の関係から、高倉小路の西側溝から水を引き込んだ遣水の遺構と考えられる。弥生時代から古墳時代の遺構は、トレンチの中央部で流路を検出した。下水管の攪乱で正確な規模は不明であるが、幅3.4m以上で、深さ0.9mである。埋土は暗灰色泥砂層と、灰色砂礫・粗砂層で小破片の弥生時代後期の壺・甕などの土器が出土した。

F-No.4の調査 鎌倉時代から室町時代の遺構は、土壙・柱穴を数基検出した。平安時代の遺構は、後期の井戸を東壁付近で検出したが、南部は近代の井戸1で破壊されている。方形の井戸枠と円形の曲物痕跡が認められ、土師器皿、須恵器鉢・甕、輸入陶磁器白磁碗など各種の遺物がまとまって出土した。弥生時代の遺構は、楕円形の土壙2基と流路を検出した。土壙は小規模で浅く、後期の壺・甕・器台などの土器片が少量出土した。流路は東肩を検出し、埋土は灰褐色砂礫層で、弥生土器が1点出土している。

F-No.6の調査 富小路通御池の交差点内のトレンチで、完全に覆工板下である。また、中間杭の北側を地山面まで掘削したので、断面観察を行い、南側にトレンチを広げる計画をたてた。その結果、近世の井戸が4基密集し、古代・中世の遺構が検出できなかったため、断面観察のみで調査を終了した。

F-No.7の調査 前年度の北側連壁の事前掘削時に石垣状の遺構が確認されたので、再確認するために麩屋町の交差点に南北2箇所トレンチ（F-No.7-1・7-2）を設定した。調査は石垣状の遺構が検出されたNo.7-2から開始したが、堀に伴う石垣は検出できず、F-No.7-1トレンチも断面観察で調査を終了した。遺構は、室町時代の円形の土壙を上層で数基検出し、下層では鎌倉時代の土壙などを検出した。

立会調査 立会調査は、覆工板の架設に伴う掘削、ガス管・上水道・下水道など埋管の切り廻しに伴う掘削が中心であった。堺町工区（東洞院通～寺町通）では、室町時代の土壙、近世の土壙などを検出したが、数は少ない。市役所前駅工区（寺町通～木屋町通）では、平安京の東限の遺構確認と御土居の検出を主とした目的で実施したが、検出にはいたらなかった。その他、室町時代の包含層（耕作面）を市役所前で確認し、現地表下2.5m前後の流路堆積層から中世の遺物を少量発見したが、流路の肩口など遺構の確認はできなかった。

小結 弥生時代の遺構は、F-No.3、F-No.4などのトレンチで検出した。御池通の標高は烏丸御池の交差点部がもっとも高く、そこから西と東に下がる地形である。当該期の遺構の検出地点は黄褐色粘質土層がベースになる柳馬場通から富小路通間までで、富小路通から東の鴨川にかけて平安時代の遺構は砂礫層上に形成されている。

平安時代の遺構は、各トレンチで検出したが、鴨川に近づくほど密度は下がる。F-No.3調査地点は左京三条四坊三町にあたり、平安時代の歌人在原業平の邸宅推定地にあたる。三町の北

部は過去のホテル建設に伴う発掘調査で池が検出されている。今回の調査で検出した遺水は、高倉小路の西側溝から水を引き込み、池に導入する遺構と考えられ、ホテル建設時の調査で検出された池との関係が問題になるが、直接的な関連の解明は今後の調査を待ちたい。

鎌倉時代から近世の遺構を、各トレンチで検出しているが、F-No.1 トレンチでは幅2.2mと規模の大きな南北方向の堀が認められた。その埋土上面に豊臣秀吉の天正地割りにもとづく堺町通の路面と道路側溝が形成され、天正地割りに先行して大規模な堀が掘られていることは、条坊地割りを南北に2分する町割りが室町時代には明確にあり、それを天正年間に道路として固定したとも考えられ、他地区での検証が求められる。

なお、昭和63年度から実施している東西線建設に伴う発掘調査は、今年度で4年を経過した。個々の調査成果は、その概要を先の年度報告でしており、今年度分についてもブロックごとに記した。ここでは成果の全体像をまとめて記すべきと考えるが、整理作業が進んでいない状況であり、詳細を含めて今後の本報告書において明らかにしたい。

(小森俊寛)

5 平安京左京三条二坊（図版1・7）

経過 本調査は、堀川押小路通の交差点から押小路通北辺を西へ延びる上水道本管の一部を、北隣の二条城生垣内へ移設する工事に伴う発掘調査である。生垣内の調査対象地は南側押小路路面より40～50cmほど高いが、土留用の万能板を打ち込む重機（水平保持が必要とのこと）を入れるため、調査に先立ち現押小路路面と同じ高さまで機械掘削しなければならなかった。調査区が濠南側石垣にはほぼ接しており、土留めと水対策上万能板の設置は調査実施の必要条件であった。しかし、このため江戸時代前期の押小路路面は、ほとんど削られてしまう結果となった。路面と生垣内盛土や濠石垣掘形の関係解明を目的に調査区西隣に小トレンチを設けて路面までの調査を実施した。

調査対象地は、史跡旧二条離宮内に位置しており、平安京では左京三条二坊七町の北西角近くに位置すると推定される。南側の押小路通では地下鉄東西線建設工事に伴う発掘調査を一連で実施している。これらの調査では、同二町内において平安時代前期から後期の建物や井戸、溝、鎌倉時代から室町時代の建物、井戸、土壇、江戸時代の押小路通路面や北側溝、柵列など各時代の遺構を多数検出している。調査面積は狭小とはいえ各時代の関連遺構の検出が期待された。

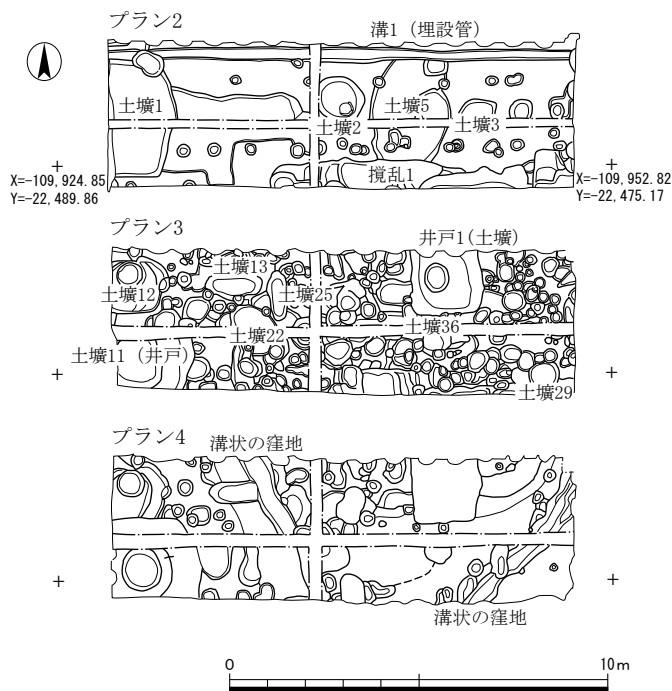


図10 遺構平面図 (1:200)

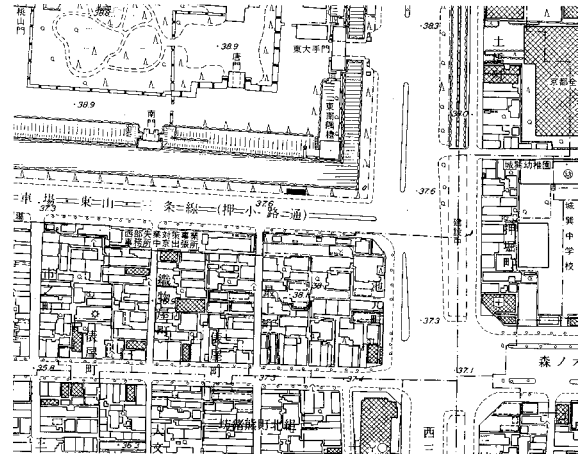


図9 調査位置図 (1:5,000)

遺構 現表土から地山直上の平安時代遺構面までは比較的浅く、平安時代以後の堆積土層は平均約80cmの厚さである。半円状にめぐる地山の溝状窪地内に堆積していた土層からの出土遺物は平安時代中期後半代に比定できるものが主である。溝状の窪地は平安時代中期の遺構の可能性もあるが、窪地を均した整地土層の一部と理解しておく。この土層の上面から地山直上面には、室町時代後期の整地とみている土層が調査区全面に20cm弱の厚さで水平に堆積している。さらにこの土層の上面に5～10cmの厚さで堆積する薄い土層が2

層あり、室町時代末期から江戸時代初頭に比定できる。両層は、江戸時代前期の押小路通路面下の基礎整地土層の可能性が高い。これらの土層上に押小路通路面が形成されていることは、西側の小調査区で確認した。押小路通の路面は、江戸時代初頭の一時期に限られたもので、二条城濠の南石垣掘形に接した所まで造られている。路面は泥砂土や粘質土と小礫によって形成されており、踏みしめられたように非常に堅く、現押小路通中央部の調査で検出された路面に通じるものである。この路面の上に盛土が行われ二条城の南辺敷地が南へ拡張されたとみられる。

平安時代前半期の遺構は、少数検出したにとどまる。平安時代中期後半代は遺構数も増加し、密度も高い状況を呈している。柱穴と判断できる Pit も多数存在しており、建物が密集する町となったとみられる。遺構数は徐々に減少する傾向を示すが、ほぼ同様の状況が室町時代の初頭頃まで継続している。

室町時代中期の遺構は、検出できなかった。同期の出土遺物も少ない。現押小路通道路上の調査地でも、同期の遺構検出数は少なく、限られた地点でしか確認されていない。室町時代後期には、遺構数が再び増加し、人々が集住する地域となる。隣接する調査地でも、この時期には井戸や建物の検出数は多い。

二条城が築造される江戸時代初頭には、当調査地は新設された押小路通に含まれている。寛永期の絵図では同城南辺の柵列は石垣のすぐ脇に位置しており、検出した路面はその時代のものと考えてよいだろう。しかし江戸時代の比較的早い段階で柵列が南へ移設される。現押小路通道路上の調査地では路面と北側側溝・並走する柵列を検出している。同城の南辺が現在の生垣の位置となるのは、近代以降であろう。

遺物 縄文土器、弥生土器を混入遺物として少量検出している。平安時代以降では、各時代の遺物が多数出土した。平安時代前期から中期前半の遺物は、新しい時期の層、遺構へ混入して出土した例のほうが多い。出土遺物は、左京地域の遺跡から出土する遺物の様相に通じるものがあるが、室町時代中期頃に比定できる遺物は皆無に近い。室町時代後期には出土量が増加するが、江戸時代には出土遺物は激減している。これは江戸時代初頭以降、調査地が二条城南辺から押小路通北辺付近に位置し、遺物などが廃棄され埋没することがほとんどない地域であったものと理解される。

小結 調査開始当初に期待していた平安時代前期の大型建物に関連する遺構に関しては明確な成果は得られなかった。しかし、平安時代前期以降の各時代の遺構、遺物を多数検出し、平安京左京三条二坊七町北西付近の遺跡の様相を把握できた成果は貴重である。調査地も狭小で、この調査成果のみで当町の歴史を推しはかることはむずかしいが、南側に隣接する現押小路道路上で実施した地下鉄東西線関連の調査成果と総合することによってより深められるだろう。

(小森俊寛)

6 平安京左京三条三坊（図版1・8）

経過 調査地は平安京左京三条三坊十四町の中心部付近に該当する。当該地にビルが建設されることになり、試掘調査が行われた結果、遺構の遺存状況が良好なことが判明し、発掘調査を実施することとなった。

調査地周辺地域では、東隣の調査で室町時代の東西方向の濠が検出され、また南へ120 mの位置にあたる十三町の調査でも室町時代の南北方向の濠が検出されている。

遺構 調査区の基本的な層序は、盛土層と江戸時代中期以降の整地層が厚さ約1.5mあり、整地層下約20cmのにおい黄色砂礫層（2.5Y6/3）が堆積する。砂礫層下にはオリーブ黒色泥砂層（7.5Y3/2）、褐色泥砂層（10YR4/3）が堆積し、オリーブ黄色砂泥層（5Y6/4）の無遺物層となる。

遺構面1～4の各面で総数221基の遺構を検出した。内訳は、井戸19基、溝4条、濠2条、ピット67基、土壙123基、落込6基である。

遺構面1では、江戸時代中期以降の井戸13基、土壙、土取穴などを24基検出した。

遺構面2は、褐色砂泥層をベースとして成立する遺構面で、江戸時代前期から中期の井戸4基、建物、土壙などを検出した。S E 25は廃棄時には塵芥投棄穴となり、土師器・陶器・漆器・魚骨・貝殻など多量の遺物が出土した。当時の生活を復原する貴重な資料の一つである。建物は近代から近世の遺構により一部削平されているが、1.85 m間隔で3間×4間以上の建物が想定できる。各柱穴には25cm前後の根石をもつ。

遺構面3は、におい黄褐色泥砂層をベースとして成立している室町時代から鎌倉時代の遺構面で、井戸・濠・溝・土壙などを検出した。室町時代の遺構としては、井戸・濠・土壙などがある。井戸は2基（S E 56・117）検出したが、いずれも石組みで円筒形を呈し、水溜部には木枠の痕跡が認められる。井戸底の標高はS E 56が35.4 m、S E 117が36.8 mである。S D 212は西拡張区で検出した南北方向の濠と考えられる遺構である。東肩部を検出したのみで規模などは不明であるが、深さは検出面から1.8 m以上ある。

鎌倉時代の遺構としては、溝（S D 109）・濠（S D 211）・土壙・柱穴などがある。S D 211は、北拡張区で検出した幅7.4 m、深さ1.5 mの東西方向の濠と考えられる遺構である。狭い調査地であるが、鎌倉時代中頃の遺物が多量に出土した。

平安時代の遺構は、東西方向の溝と南北方向の溝があり、平安時代中期の遺物が出土した。

遺物 遺物は整理箱で200箱出土したが、大半が土器類であり瓦類はほとんど出土していない。江戸時代の遺物は、日常雑器が中心で中でも土師器・陶器・染付などが大部分を占める。金箔

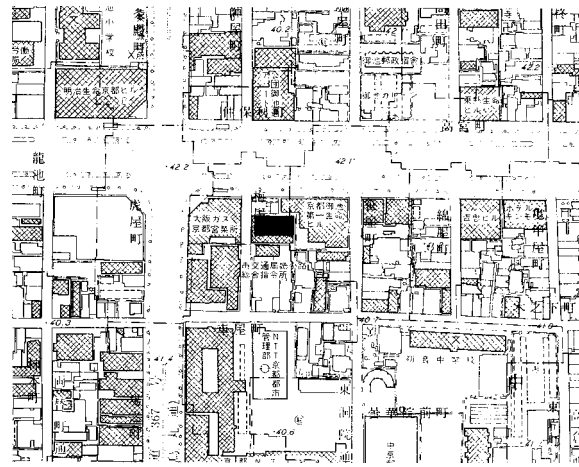


図11 調査位置図（1：5,000）

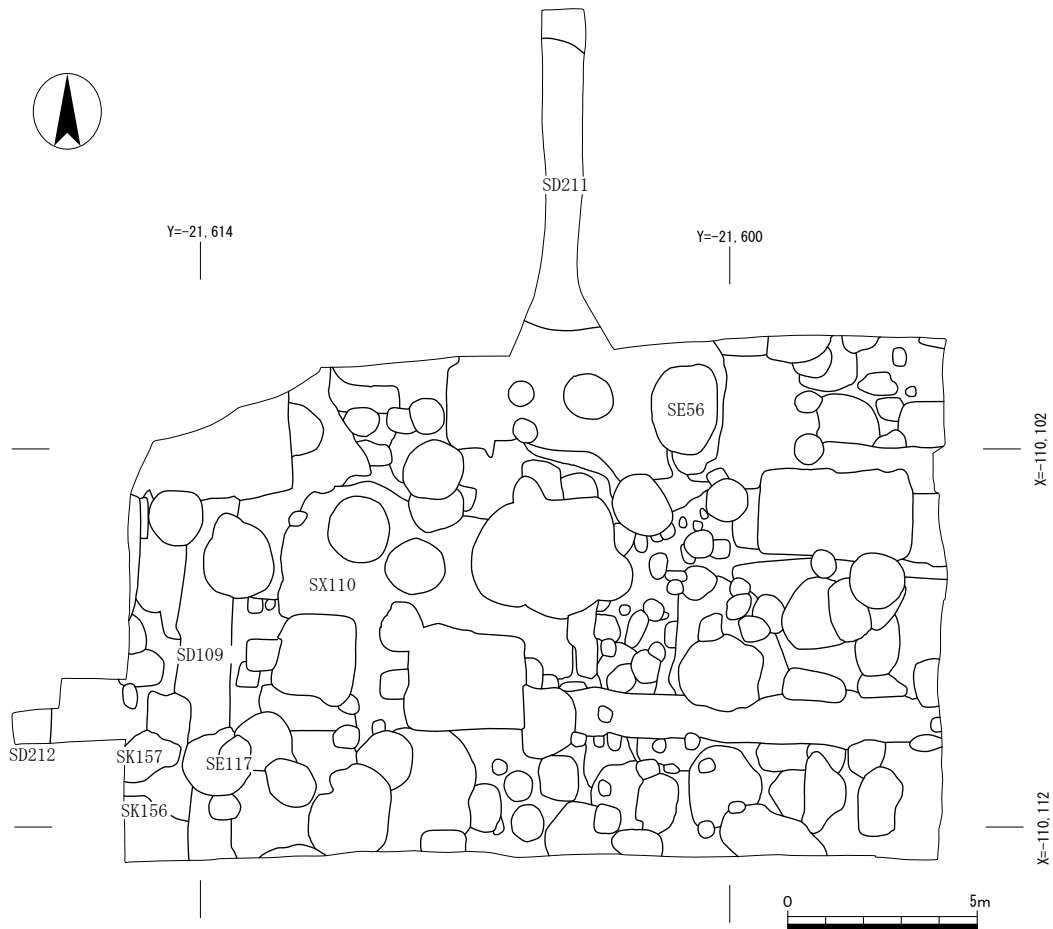


図12 遺構面3平面図(1:200)

を貼った土師器皿(SK49)や、織部向付、沓茶碗なども少量出土している。SE25から「天下一」銘をもつ銅製容器蓋が出土している。室町時代の遺物は、SX110、SK156から一定量出土しているが、大半が土師器皿である。鎌倉時代の遺物はSD109・211、SK157から多量に出土したが、ほとんどが土師器皿である。平安時代の遺物は、SD174・208から土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土している。

小結 調査地は平安京左京三条三坊十四町内のほぼ中央部付近に位置するため、町割りに関連する遺構の検出が調査目的の一つであった。西拡張区で検出したSD212は、町内の東西中央に位置する。この濠は、十三町の調査で検出された堀833の延長上にあり、形状、出土遺物からみても同濠につながるものと思われる。また、北拡張区においても、濠と考えられる遺構(SD211)を検出した。SD211は東隣接地の調査で検出している濠SD1の延長と考えられる。

(伊藤 潔)

註1 辻 純一・平尾政幸「左京三条三坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984

註2 辻 裕司・鈴木廣司「平安京左京三条三坊」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995

7 平安京左京四条一坊 (図版1・9～11)

経過 本調査は、京都市立朱雀第一小学校の校舎建て替え工事を契機として行われた。当地は左京四条一坊一町にあたり、校内では過去に3度調査が行われた。平安時代の池の一部や条坊関係の遺構が確認されており、今回の調査でもこれらに関する成果が期待された。なお、設定した4つのトレンチは工事との関係上、順次調査を行った。

遺構 基本層序は、小学校の盛土層、旧耕作土層、平安時代整地層、砂礫層の地山となる。

平安時代の遺構面までは、盛土を除けばきわめて浅い。遺構は、平安時代前期・後期以外はほとんど認められなかった。平安時代前期の遺構は、大きく二時期に分かれる。

9世紀前半 この時期の主な遺構は六角小路に関連する溝、一町内を北東から南西に流れる流路などがある。1トレンチのSD90は六角小路北側溝と想定される。護岸の杭などは検出されなかった。SD70はこの内溝と考えられ、一町の東西中心付近で北に曲がるため、この時期町内は二分されていたことが分かる。なおSD70は4トレンチでも一部確認されている。SD96

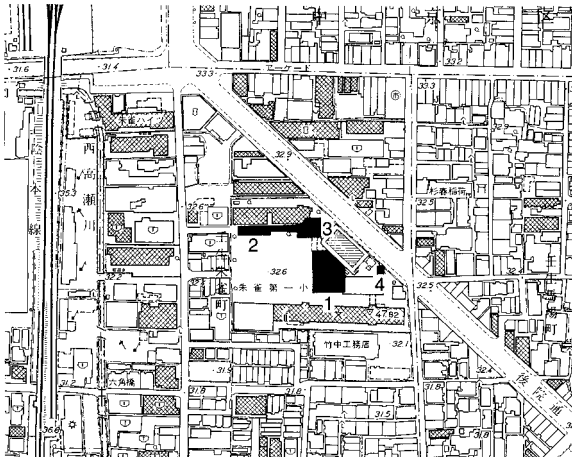


図13 調査位置図 (1:5,000)

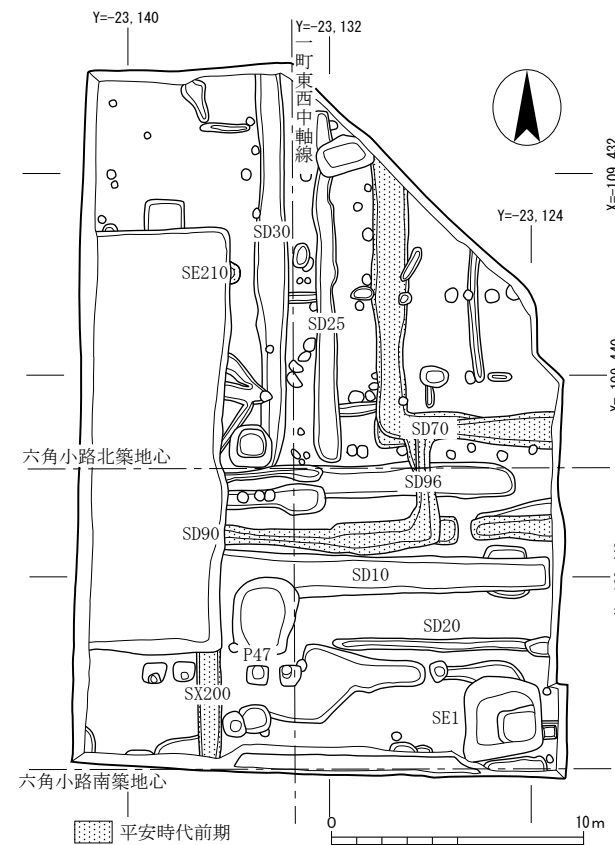


図14 1トレンチ平面図 (1:300)

はこの側溝と内溝を繋ぎ、宅地内の排水を行う溝である。SX200は、六角小路路面を南北に横切る溝で、杭と板で護岸されており北からの排水を南の町へ流すための暗渠と考えられる。SX200は六角小路南築地想定線で一段深くなり、長さ1.8m、幅0.3mの板で護岸されている。2・3ト

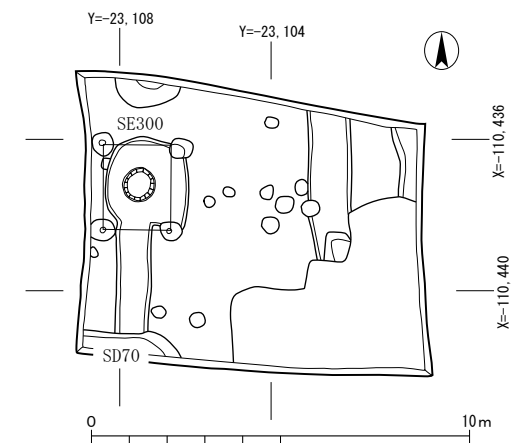


図15 4トレンチ平面図 (1:200)

レンチ中央で検出したS D 24・37・35は、古墳時代の河川の窪み地形に流れていた流路である。これらの流路は流れていた状況がほとんど認められず、平安京造営とともに急速に埋まったものと思われる。

9世紀中頃 この時期は、一町の南西部に洲浜を伴う園池が造られ、六角小路は側溝が埋まっている。池は古墳時代の河川の地形を利用して造られている。池の東岸は、10～30cmの石を多量に敷き洲浜を造っている。石を固定するための粘土などはない。洲浜の傾斜はきわめて緩やかである。池の西岸は洲浜を成す石がほとんどなく、傾斜も急である。池の深さは30～40cm、東西幅は38mを測る。池の東岸には、導水施設であるS X 36がある。幅1.0m、深さ0.5m、長さは調査区外へ延びるため不明であるが、洲浜近くで池の方向にカーブしながら急に浅くなる。さらに池への注ぎ口には板状の木製品を据えている。杭と板で護岸した柵状の施設を作る。

10世紀 園池廃絶後のこの時期の遺構はほとんど存在せず、4トレンチの井戸屋形を伴うS E 300があるのみである。井戸枠は直径90cmの円形縦板組みで、16枚の部材を柄によって組み合わせている。組み合わされた部材は現存長1m、厚さ5cmを測り、部材の一部には「大山」と読める刻印がある。

12世紀中頃 各トレンチでは全面に整地され、六角小路が再び造られる。S D 20と10はそれぞれ六角小路北側溝と内溝にあたるが、その間の部分には、小石を敷き詰めた上に精良な粘土を敷いた築地の痕跡も認められた。六角小路南側溝は、トレンチの南壁際で認められ、六角小路の路面幅は4mに狭くなっている。路面には多量の土器と炭が含まれた土が積まれており、方形縦板横棧組みの井戸がある。一町の東西中央には、S D 25、30があり一町域は少なくとも東西に二分されていたようである。溝の心々間は2.4mを測る。3トレンチでは、多量の瓦と焼土が撒かれたような状況で出土している。また、9世紀の池が埋没した上には再び池状の堆積がみられるが、洲浜などは存在せず、庭園に伴うものかどうか断定できない。

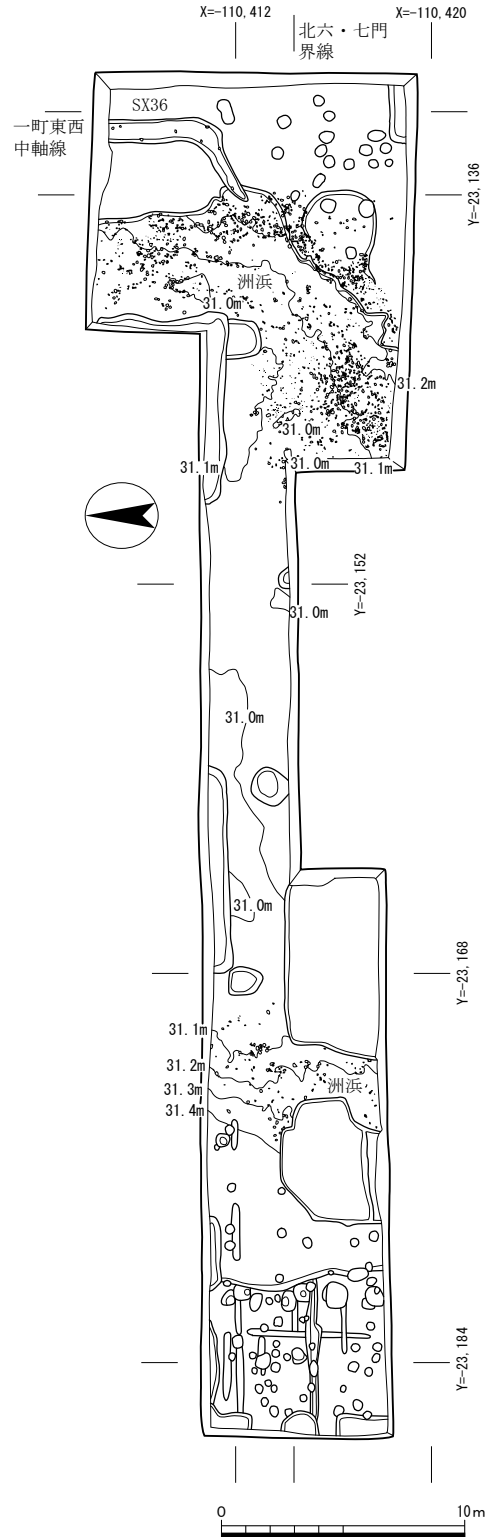


図16 2・3トレンチ平面図(1:300)

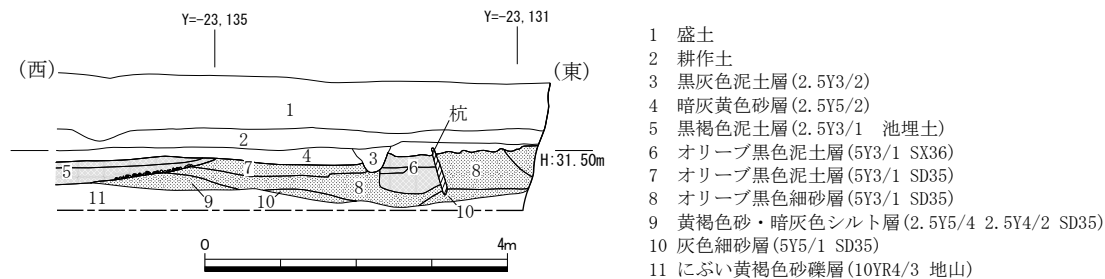


図 17 3 トレンチ北壁断面図 (1:100)

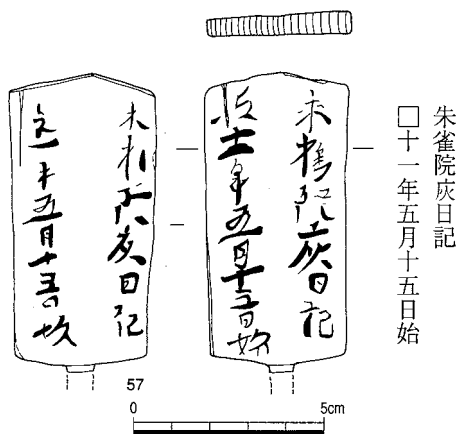


図 18 池出土題箋実測図 (1:2)

遺物 平安時代前期・後期のものがそのほとんどである。前期の六角小路北側溝、区画溝、SD35などから出土する土師器皿のほとんどは、外面の調整をc手法によっている。また池から出土する土師器皿はe手法のものが過半数を占める。SD35からは、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、木器などがまとまって出土する。木器は多種にわたり、漆塗りの刷毛(50)、下駄、人形、齋申などのほかに多量のへら状木製品(籌木か)などがある。池からも土器、木器などが出土するが細

片が多い。その中には灰釉の水鳥形の水差、「朱雀院」と記された題箋がある。題箋は縦7.8cm、横3.8cm、厚さ0.5cmを測り、題箋としては大型である。第4字の読みは、「灰」のほかに「炭」、「夏」の諸説ある。第7字を年号とすれば、供伴する土器から「承和十一年」(844)が考えられる。輸入陶磁器では、越州窯青磁椀、白磁椀などがある。また、平安時代後期の層からではあるが、内面に漆の付着した須恵器の鉢(34)が出土しており、SD35出土の漆塗り用の刷毛の存在とあわせて、9世紀前半に当地で漆製品の生産が行われたものと考えられる。

平安時代後期では、3トレンチの焼土層からは土器、瓦、壁土が出土する。瓦はほとんどが京都産で、軒丸瓦には人面文軒丸瓦がある。輸入陶器には吉州窯産の陶枕がある。また、東海系の山茶椀がまとまって出土している。

小結 今回の調査地は、朱雀大路に面した坊城の地であり、9世紀中頃の園池の存在はこの地の性格を反映したものといえよう。土地利用は、平安時代前期と後期に顕著に認められる。9世紀の前半の一町域は、東西に二分されて利用されていた。9世紀中頃には一町の南西に園池が造られる。この時期には、六角小路側溝は埋没しており、南北2町の敷地を有したものと考えられる。池から出土した題箋から、朱雀院に関する公的な施設の存在が推測されるが、なお検討を要する。この施設の存続期間は、9世紀の中頃を中心とする短いものであったようである。

12世紀には、大規模な整地を行い土地の再利用が行われる。平安時代後期の当地は、京の西端に近いところであったが、人面文軒丸瓦、吉州窯産陶枕など注目すべき遺物も出土している。調査地周辺の成果と併せて今後検討すべき課題は多い。(南 孝雄・鈴木久男・清藤玲子)

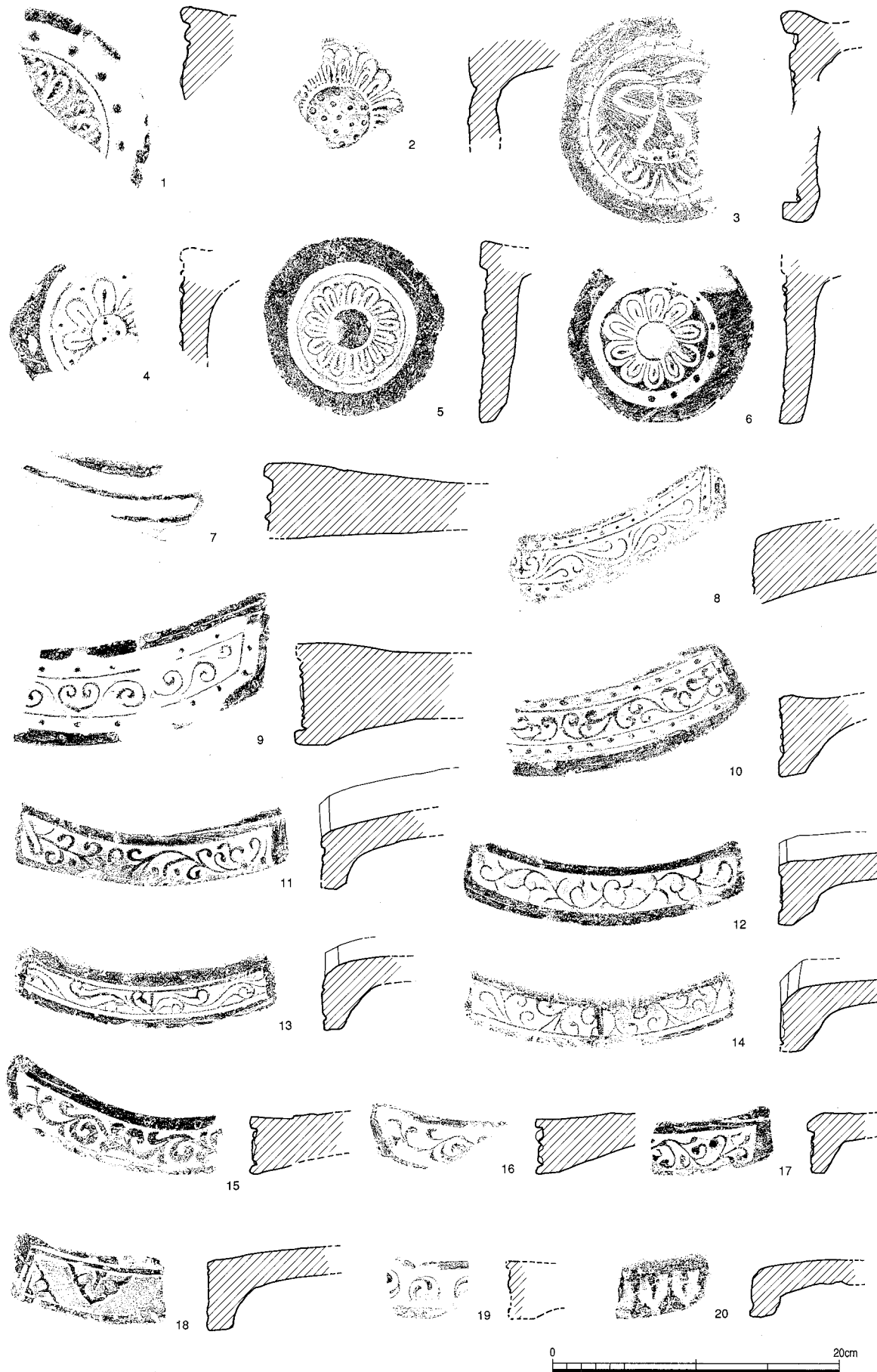


図19 出土軒瓦実測図 (P 47:1 包含層:2 3トレンチ焼土層:3~6・10~20
洲浜整地層:7 SE 300:8 SD 10:9) (1:4)

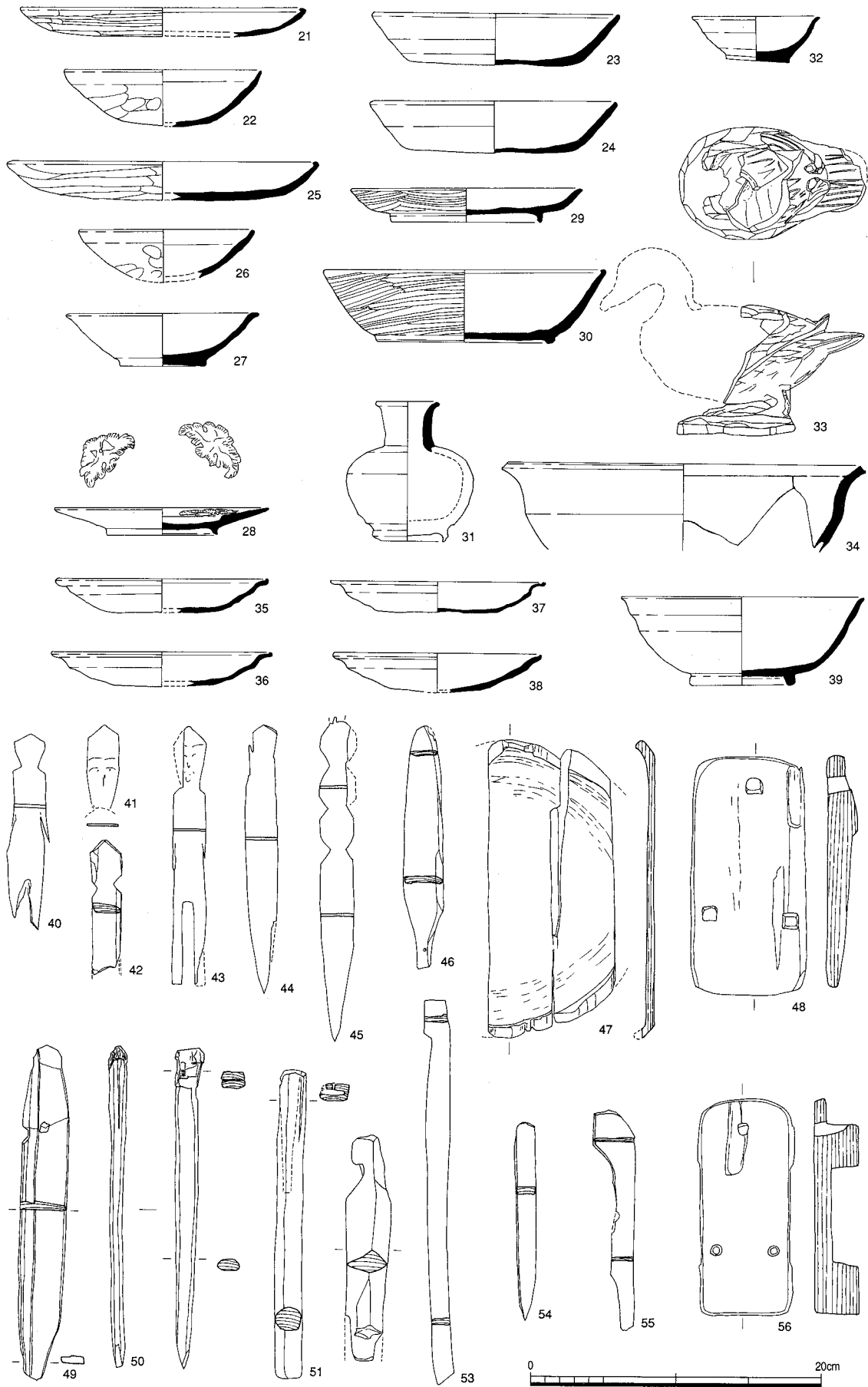


图20 出土遺物実測図 (S D 70 : 21・22 S X 200 : 23・24 S D 35 : 25 ~ 31・40 ~ 48
池 : 32・33・49 ~ 56 平安時代後期整地層 : 34 S E 300 : 35 ~ 39) (1 : 4)

8 平安京左京五条四坊 (図版1・12・13)

経過 京都市立小学校の統廃合の関連から下京区仏光寺通東洞院東入北側の旧豊園小学校の跡地に新たに洛央小学校が建設されることとなった。そのため平成3年(1991)8月に試掘調査が行われ、良好な遺構の残存と共に堀状の堆積土が確認された。これを受けて平成4年(1992)7月から翌年1月まで発掘調査を実施した。調査区は東西26.5m、南北48.0mの規模で設定した。この地点は平安京左京五条四坊二町に位置しており、調査区内の北東部は二町の中心部分にあたる。

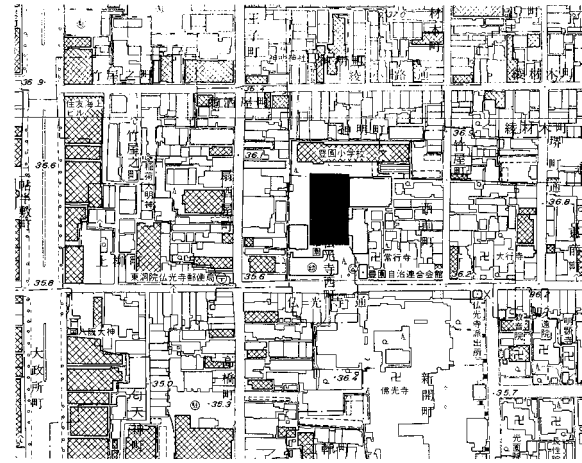


図21 調査位置図(1:5,000)

当地点の歴史的な概略を記す。弥生時代前期から古墳時代後期にかけては烏丸綾小路遺跡の東側に属している。以後、平安時代に至るまでの様子は明らかでない。平安時代後期、二町は高階泰仲の邸宅地として知られるようになる。泰仲は鳥羽離宮造営に財力を誇った富裕な貴族であり、邸宅は1町四方の規模だったことなどが文献から推察されている。^{註1}室町時代の中期以降は下京の町として発展し、二町の東洞院通沿いは下京の異組に属していたことが史料からうかがえる。^{註2}桃山時代、当地点の南側に秀吉の別邸である竜臥城があったといわれ、^{註3}方広寺大仏殿を築くため秀吉は別邸を代替地として東山にあった仏光寺を現在の場所に移した。江戸時代前期、仏光寺門前町とよばれるようになり、江戸時代中期には清聚庵検校会所があったとされている。

遺構 調査区全体として基本的に4面の調査を行った。第1-2面、第2面、第3-1面、第4面がこれにあたる。部分的には2面の調査(第1-1面、第3-2面)を実施した。遺構総数は1217を数える。

第1-1面(江戸時代)の溝1-2は、中央付近から南壁外にかけて北西から南東に斜めに延びる江戸時代中期以降の石組みを伴う溝である。この溝は宅地割りのラインには沿わず、おそらく規模の大きな屋敷地内の一空間を画するためにつくられた溝であろうと推測される。

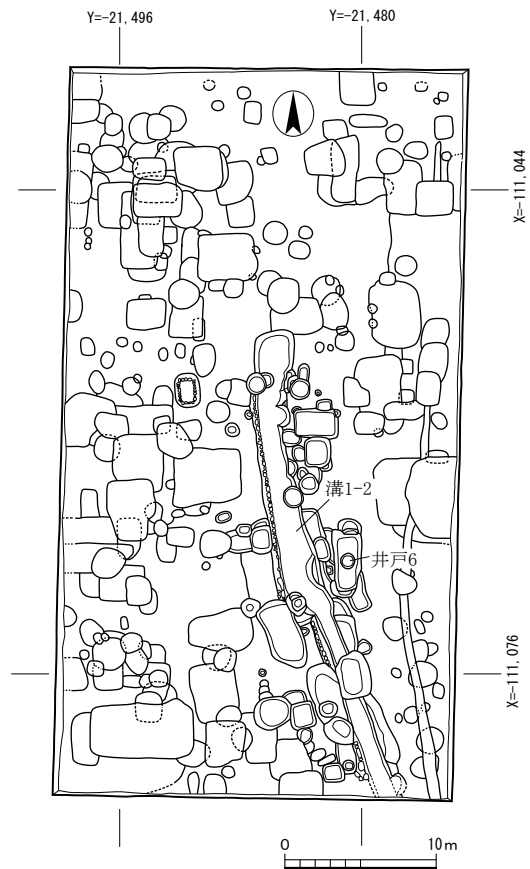


図22 第1-1面遺構平面図(1:500)

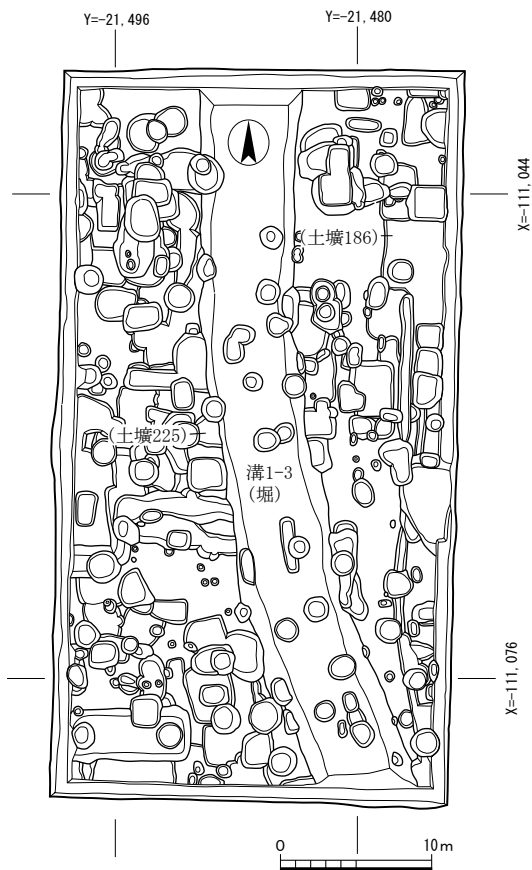
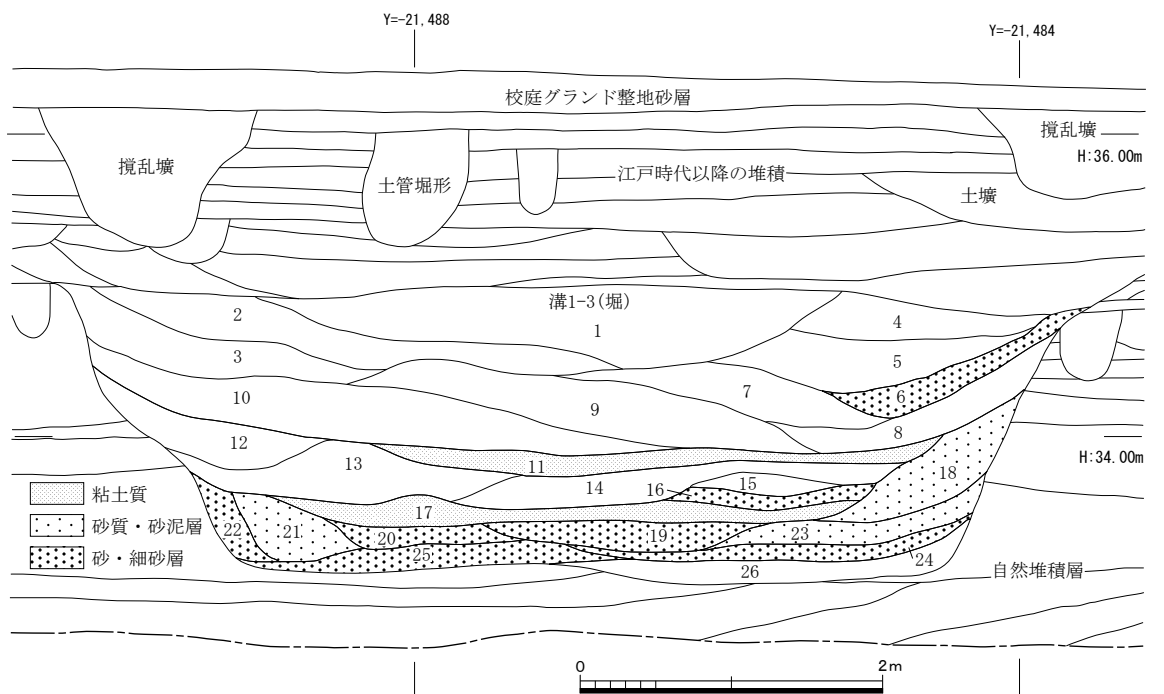


図23 第1-2面遺構平面図(1:500)

第1-2面(室町時代後期)で検出した溝1-3は、堀と考えられる(図版12-1)。北壁中央から南東方向に向かって調査区を弓なりの形で縦断しており、断面が逆台形状を呈している。肩幅約6.9m(推定約8.0m)、底幅約4.6m、深さ2.0m以上を測り、検出延長は約48mで南北共に調査区外に延びる。埋土を含む堆積土は大きく7層に分けられ、第1層の南半では第1-1面で検出した溝1-1・1-2がこれに相当する。第2~3層は泥砂主体の江戸時代の埋土である(図24、1~10)。第4層では北半に底部とも考えられる褐灰色粘土が堆積していたことや、南半の暗灰色砂泥から桃山時代の陶器類が比較的多く出土したことなどから、この時期、溝が補修された可能性がある(図24、11~16)。第5層の褐灰色粘土も一時期の底部の可能性があり、20~60cmの厚みで南北全体につながる安定した堆積状況を示す(図24、17~



溝1-3(堀)堆積土

- | | | | |
|--------------------|---------------------|------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色泥砂層6(10YR3/3) | 8 鈍黄褐色泥砂層1(10YR4/3) | 15 暗褐色砂礫層1(10YR3/3) | 22 黒褐色砂層(10YR3/1) |
| 2 黒褐色泥砂層3(10YR2/2) | 9 鈍黄褐色砂泥層2(10YR4/3) | 16 黒褐色砂層1(10YR3/1) | 23 黒褐色粘質・砂泥層(2.5Y3/2) |
| 3 暗褐色泥砂層2(10YR3/4) | 10 暗褐色泥砂層7(10YR3/3) | 17 褐灰色粘土層2(10YR4/1) | 24 灰黄褐色砂層(10YR5/3) |
| 4 黒褐色泥砂層2(10YR2/3) | 11 褐灰色粘土層1(10YR4/1) | 18 黄灰色粘質・砂泥層3(2.5Y4/1) | 25 黒褐色砂層3(10YR3/1) |
| 5 黒褐色泥砂層5(10YR3/2) | 12 黒褐色泥砂層3(10YR2/3) | 19 鈍黄褐色砂層(10YR5/3) | 26 黄褐色砂礫層(10YR5/6) |
| 6 暗褐色砂層(10YR3/3) | 13 黒褐色泥砂層6(10YR3/2) | 20 黒褐色細砂層(10YR3/2) | |
| 7 暗褐色泥砂層3(10YR3/4) | 14 黒褐色泥砂層(10YR3/1) | 21 灰黄褐色粘質・砂泥層(10YR4/2) | |

図24 溝1-3断面図(調査区北壁)(1:50)

18)。遺物が少なく特定は難しいが、近世初頭のある時期に本格的な補修が行われていたと考えられる。第6層には最底部に黒褐色や黄褐色の砂が10～30cmの厚さで堆積し、室町時代後期から末期の遺物が出土した。この層は砂・細砂・砂泥の互層堆積からなっており、一定量の水流通があったといえる(図24、19～26)。第7層は最底部の直上で全体的に点在している黄灰色粘質土である。ごく薄く部分的に堆積しており、遺物もほとんどみられないので時期は定かでない。このような堆積状況から溝1-3(堀)の開削時期は明らかでないが、室町時代後期から末期には機能していたと理解され、その後は完全な浚渫を伴わない底部の補修が少なくとも2回以上にわたり施され、江戸時代には埋め戻されていたことがわかった。

第2面(室町時代前期から鎌倉時代)の主要な遺構として井戸、土壙があげられる。井戸10・26・43は底部に方形の板枠を伴う室町時代前期の石組井戸である。土壙186は1町内の中心部で検出した遺構で、一見地業の痕跡かと思わせる礫敷が遺構全体に施されている(図版13-2)。土壙432は土壙186の下層で検出し、整理箱17箱以上の鎌倉時代の土師皿などが出土した。これは後述する平安時代後期の落込5に伴う一連の埋土である可能性が高い。

第3-1面(平安時代後期)では井戸、溝、土壙、ピット、瓦溜、落込があげられる。井戸44は横棧と縦板で構成された方形木枠を伴う。最下段の木枠は、大・中・小の3つの横棧枠を入子状に組み入れていた。井戸45も横棧・縦板の方形木枠を伴う。いずれも12世紀の井戸である。溝7は幅約2.0m、深さ約0.9mの東西方向の溝である。溝8は幅約0.6m、深さ約0.5mの小溝であり、北東から南西方向に延びる。溝7は12世紀、溝8は11世紀の遺構である。土壙494では整理箱10箱以上

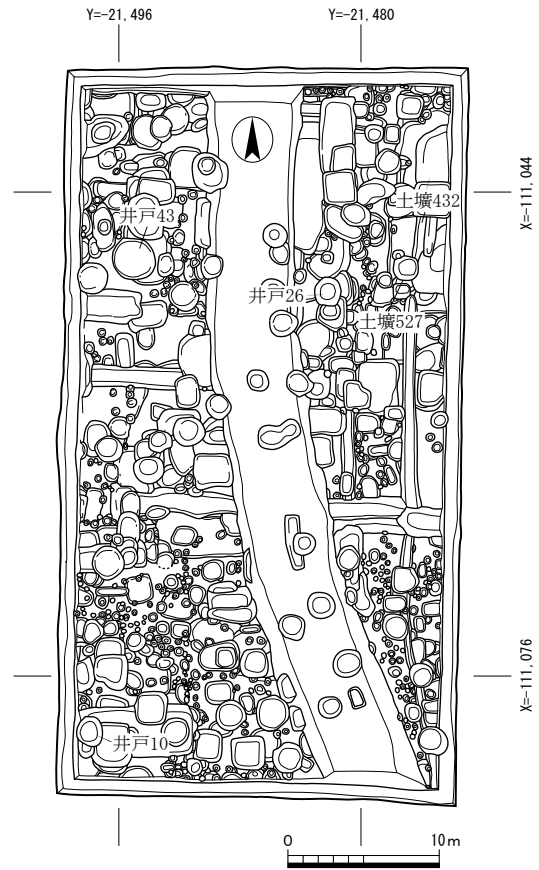


図25 第2面遺構平面図(1:500)

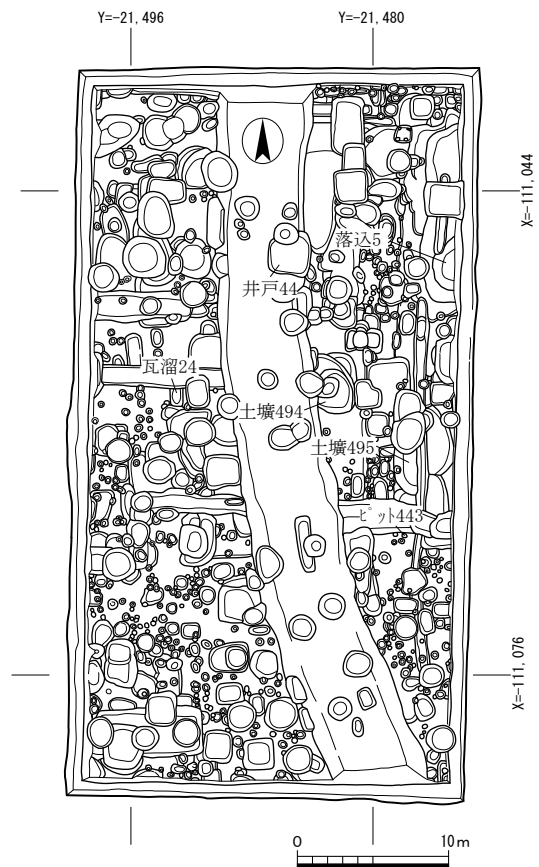


図26 第3-1面遺構平面図(1:500)

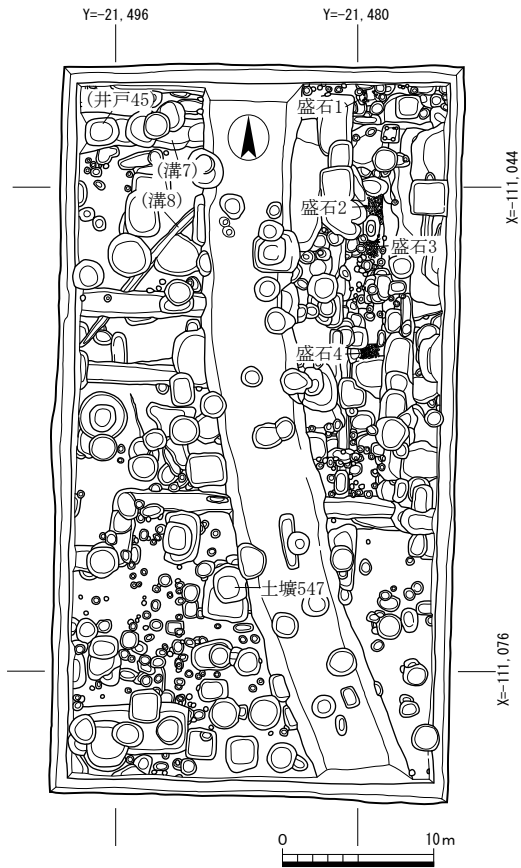


図27 第3-2面遺構平面図(1:500)

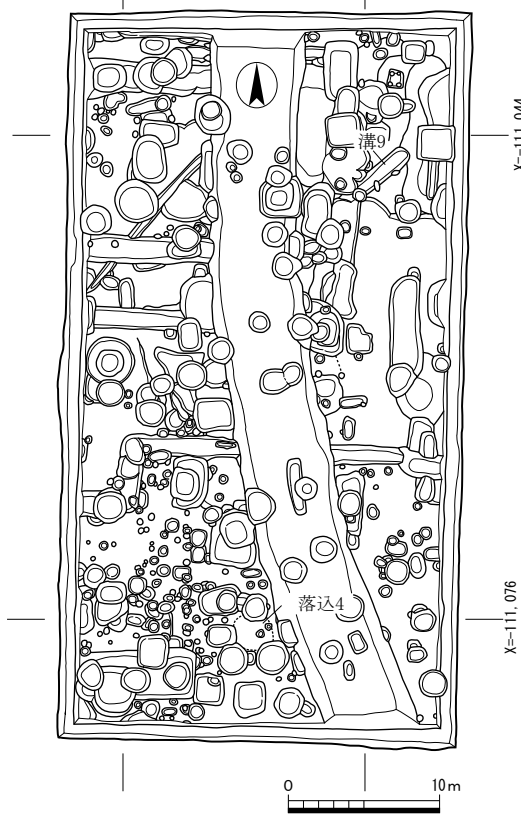


図28 第4面遺構平面図(1:500)

の土師皿などが出土した。ピット443の土師皿数枚が積み重なった状態は、土器を埋納した可能性がある。瓦溜24は丸・平瓦が詰まった状態であり、軒平瓦が数点含まれていた。落込は11世紀末から12世紀初頭の遺構であり、底部に拳大の礫が溜まった状態であった(図版13-3)。この遺構は先述した土壌186・432の下層で検出しており、相互の堆積状況や遺構形状からこれら全体を一つの遺構としてみることも可能である。

第3-2面(平安時代中期~前期)の主なものに土壌、根石状の礫群、整地層があげられる。10世紀前半の土壌547では40~60cm大の石を検出した。石の規模や形状、底部の礫群の状況などから礎石の痕跡と考えられるが、これに対応する遺構は検出していない。9世紀の遺構として二町の中心付近で根石状の礫群4基(盛石1~4)を検出した(図版13-1)。各々径0.7~0.8mの規模で南北方向に並び、遺構の基底部の可能性もあるが、明瞭な掘形も未確認であり、その性格を特定するのはむずかしい。整地層の一部であろうと考えられる黄褐色粘質土層は、この礫群のベースである。60cm以上の厚みをもつ非常に均質な粘質土であり、9世紀中頃から後半にかけての残存良好な遺物を比較的多く包含する。同様の堆積状況は五条四坊九町の調査においても確認されている^{註4}。

第4面(飛鳥時代から弥生時代)では飛鳥時代の遺物包含層、落込、溝があげられる。飛鳥時代の遺物包含層は10~40cmの厚さで調査区全域に堆積し、7世紀の遺物が少なからず出土した。落込4は固く締まった平坦面に焼土塊を検出したこと、ほぼ完形の須恵器高杯などをその平坦面直上で検出したことから、竪穴住居の床面を部分的ながら検出した可能性が高く、飛鳥時代の住居の一部と考えられる。溝9は幅約1.2m、深さ約0.3mで北東から南西方向に延びていた。弥生時代終末期か

ら古墳時代にかけての遺構である。

落込4の焼土塊について、笹嶋貞雄氏（花園大学教授）にサンプリング測定をしていただいた。その結果、小片ではあるが焼土のもつ熱残留磁気の方位と強度の測定値から判定すると、炉あるいは竈を想定することも可能なぐらいの温度を受けている。しかし、一部では急激に温度が低くなる部分の測定結果も出ているので、この焼土は火床本体の周辺部の可能性がある、ということが判明している。^{註5}

遺物 弥生時代から江戸時代までの出土遺物が整理箱にして930箱出土している。弥生時代の遺物は少なく、溝9から高杯、自然堆積の褐色砂礫層から畿内第V様式に属する壺などが少量出土した。古墳時代の遺物は堆積層に混入して土師器壺・甕・高杯、須恵器杯蓋・杯身・壺・甕などが出土した。その中には5世紀後半の残存良好な大型片も含まれていた。飛鳥時代の遺物は落込4の須恵器高杯・杯身が出土したほか、調査区全域に堆積する遺物包含層から一定量が出土した。奈良時代の遺物は土師器杯などが若干出土した。平安時代の遺物は前期から後期を通じて各時代の遺物が出土した。それらは出土量の多少はあるものの連続して遺存している状況と認められた。特に整地層と考えている黄褐色粘質土層から9世紀中頃から後半の遺物が一括して出土したことが注目された。この層の検出範囲は調査区北東部のごく一部に限られていたにもかかわらず整理箱にして約4箱以上と多く、質量ともに比較的豊富であった。そのほか土壙494から12世紀後半の遺物が10箱以上出土した。鎌倉時代の遺物は土壙432で整理箱17箱分と多量な一括出土がみられ、土壙495でも4箱分の出土量があった。室町時代の遺物は主要な土器類、瓦類などが各土壙から3～8箱一括して出土した。金属製品にはほぼ完形の把手付片口鍋や水差がある。桃山時代から江戸時代前期にかけての遺物は比較的少ないように思われ、溝1-3（堀）から出土した桃山時代の陶器類が目立つ程度である。江戸時代中期以降では土器類のほか、土製品、石製品、骨製品、精錬遺物、金属製品、銭貨、瓦類など各種多様な遺物が出土した。文字史料として、井戸6出土の「婉室妙慈信女」（表）「寛政六寅年／□□□□如／二十三才志す」（裏）と記された墨書の木札、土壙225出土の「□聚」文の軒丸瓦などがある。

特筆すべき遺物として高麗青磁（土壙527他出土）、絞胎陶器（土壙432出土）があげられる。高麗青磁は口径約20cmの青磁象嵌菊花宝相華唐草文鉢であり、12世紀後半のものである。外面に文様はなく、内面の口縁部近くに白象嵌唐草文帯、その下に象嵌唐草文、底部と体部の四方に白象嵌で二重の円圏を描き、その中に菊花文をあらわす。その他、白黒象嵌鶴文の一部が残る青磁象嵌瓶も出土した。絞胎陶器は約6cmの小片であり、灰白色と暗赤褐色の絞胎素地に褐釉が施されている。壺の可能性があり、晩唐のものであろうと考えている。

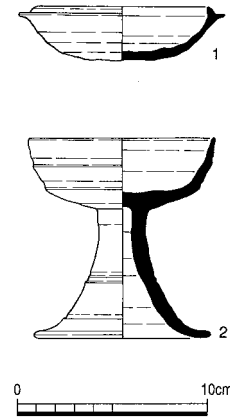


図29 落込4出土須恵器実測図（1：4）



図30 土壙527他出土高麗青磁

小結 烏丸綾小路遺跡について、弥生時代から古墳時代に至る遺跡の東側の堆積状況を一定の面的な規模をもって検出したこと、それと同時に飛鳥時代の遺物包含層と竪穴住居の可能性をもつ遺構を検出したことの意義は大きい。これによって時代の経過とともに遺跡の空間的な広がりも変化していたこと、遺跡は弥生時代から飛鳥時代まで存続していることなどが明らかとなった。

平安時代前期の五条四坊二町について、安定した厚みをもつ整地層を検出したことは予想外の成果となった。その規模や遺物の質量からみて当時の有力な貴族の手になる土木工事の一端がうかがわれ、周辺に前期の遺構が残存することは確実といえる。

平安時代後期の高階泰仲邸について、この時期に該当する11世紀末から12世紀前半の遺構・遺物は認められるが、明瞭に関連するものはない。ただし落込5（土壌186・432を含む）はその規模や遺構形状、検出位置などから邸宅の園池の一部とも考えられる。

室町時代の堀について、文献や絵画史料の復原による下京の町並みの外郭線と今回検出した堀（溝1-3）の弓なりの形状が合致するとみてよく、堀は町並みの外郭に沿うように構築されたと考えることができる。このような位置関係の状況や遺構の規模およびその時期などから、この堀（溝1-3）は下京の町全体を囲む惣構の遺構と考えられる。また、これだけ良好な状態でもこのように広い面積を検出した例はほかになく、今後とも「構」を調査する上で欠かすことのできない貴重な資料を得たといえる。

江戸時代中期の溝1-2について、大きな屋敷地内の溝と推測されることや「□聚」文の軒丸瓦の出土などから、清聚庵検校会所の関連遺構とみてよいであろう。この溝の位置と方向は、室町時代の堀の位置と方向に重なる。つまり、町全体の防御を目的とした室町時代の構の堀は、江戸時代中期にはまったく姿をかえて敷地内の空間を画する細い溝の機能を果たして生き残っていたということになる。

以上、弥生時代から江戸時代に至る各時代の様相は多種多彩で、二千数百年に及ぶ営みを繰り返すこの地域の歴史のごく一部を明らかにしたに過ぎない。五条四坊に限っても本格的な調査は今回で3例目を数えるようになったばかりであり、文献史学、地質学などの自然科学とも協力してこの地域の歴史の全体像を解き明かしていくためには、なお一層の発掘資料の増加が望まれる。

なお、調査中には笹嶋貞雄、高橋康夫、中井均、金巴望の各氏に数々の御教示をいただいた。記して御礼申し上げる次第である。 （長戸満男・山本雅和・近藤知子・鈴木廣司）

註1 佐々木英夫「平安京左京五条三坊十五町の邸宅名について」『平安京跡研究調査報告』第5輯（財）古代学協会 1981

註2 高橋康夫「戦国期京都都市図」『京都中世都市史研究』思文閣出版 1983

註3 山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭」『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号 京都大学人文科学研究所 1986

註4 小森俊寛・上村憲章「平安京左京五条四坊」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

註5 笹嶋貞雄、前中一晃両氏（花園大学自然科学研究室）の御協力による残留磁気測定の結果を報告を得ている。

9 平安京左京九条二坊1 (図版1・14)

経過 平成2年度より継続して実施している駐車場・テニスコートの発掘調査である。本年度の調査区は、昨年調査を実施した御土居堀の調査区(4次調査)の東側、一昨年実施した2次調査3区の南に位置し、針小路および左京九条二坊十六町にあたる。

2次調査3区では平安時代後期、鎌倉時代、室町時代にわたる井戸、土壇、溝、柱穴、柵列などを検出している。

遺構 基本的に約1.2mの盛土層下に0.1～0.2mの層厚で耕作土層が堆積し、その下層に遺構ベース層になる砂礫層が堆積する。調査区の中央から北側にかけて、砂礫層の上に緑灰色微砂層が部分的に堆積する。この層は少量であるが9世紀後半から10世紀初頭の遺物を包含している。また、東側では黒褐色泥砂層が堆積し、東に向けて厚くなる。この層からは鎌倉時代以降の遺物が出土する。

測量データによる針小路北築地心から南に約4mでSD 350、7mにSD 343、南築地心想定線上でSD 344の東西方向の溝を検出している。また、1町の中心、二行と三行の境を画すと推定できる溝(SD 329・354・355)を検出した。これらの溝からは平安時代後期から鎌倉時代の遺物が出土している。

調査区中央北側で掘立柱建物SB 422を検出した。柱穴の掘形は一辺約0.8mの方形または隅丸方形を呈する。柱間は不揃いで、1.8～2.4mの柱間を測る。南に庇が付くと考えられるが、庇の柱穴掘形は母屋部分の掘形に比べ小さく、径約0.3mの円形を呈する。この建物の柱穴は緑灰色微砂層を

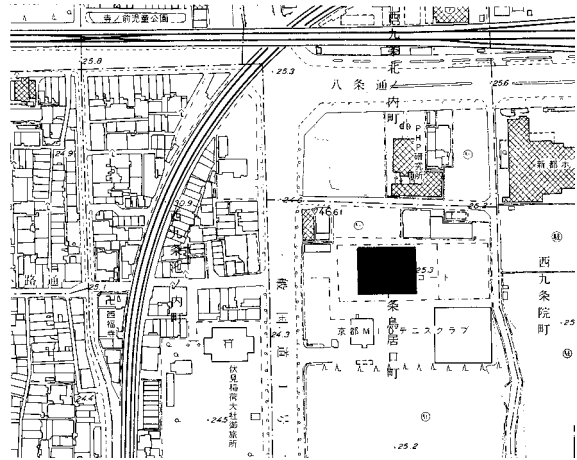


図34 調査位置図(1:5,000)

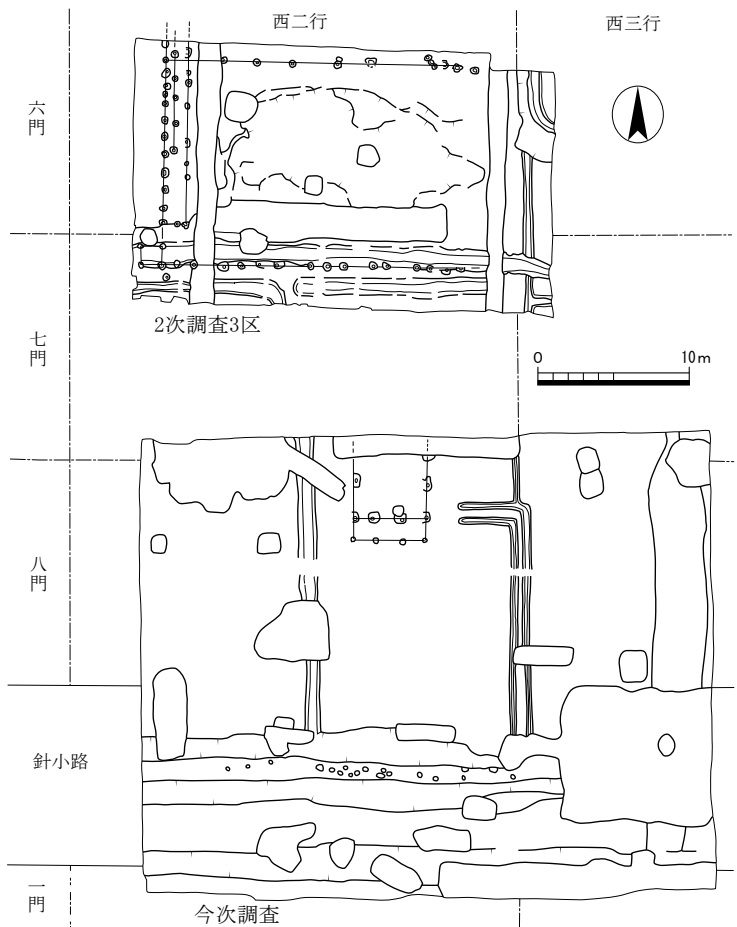


図32 調査区配置図(1:500)

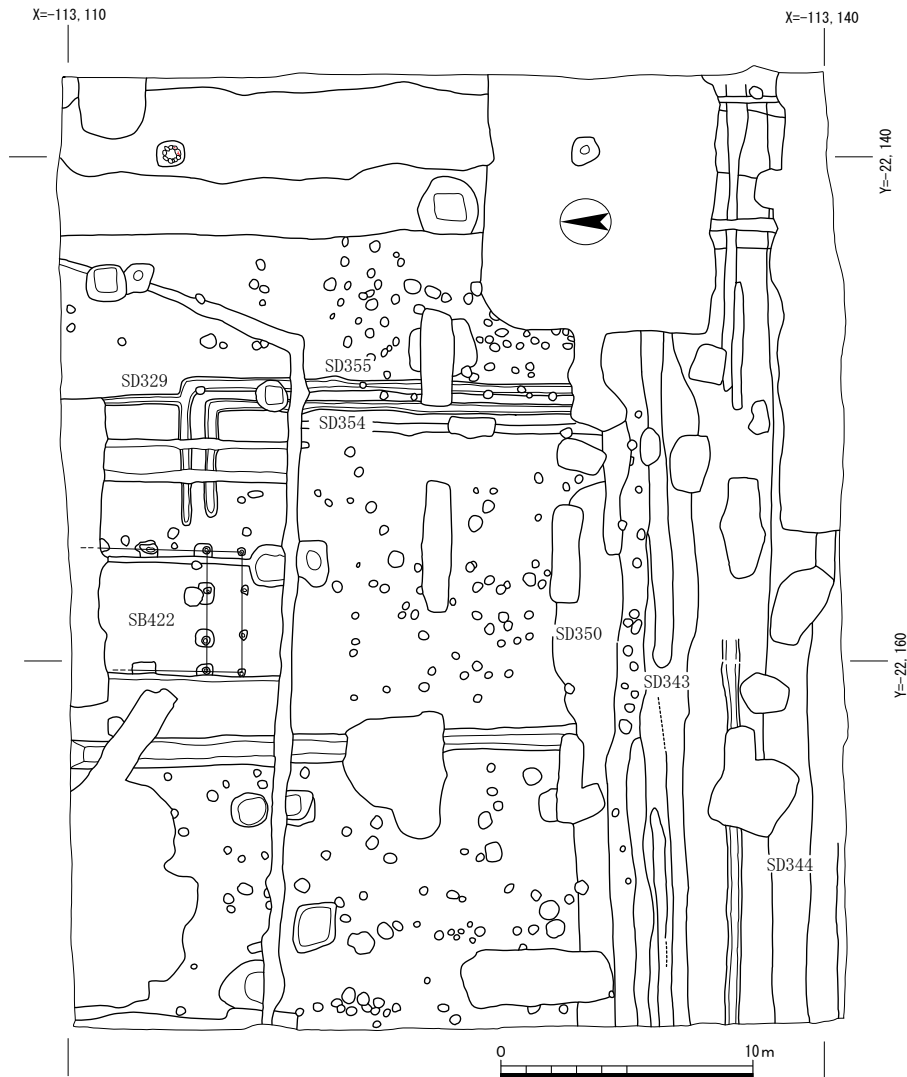


図 33 遺構平面図 (1:300)

除去した段階で検出した。また柱穴掘形からは平安時代前期の土師器が出土している。

人頭大の川原石を根石に有する柱穴を多数検出している。しかし、建物としての並びは確認することはできなかった。これらの柱穴掘形からは、鎌倉時代の遺物が出土している。また、井戸は13基以上検出した。すべて鎌倉時代から室町時代の時期にあたり、方形木枠組み、円形石組みで曲物底の

井戸などである。曲物および木枠部材は腐食が進み、取り上げることが不可能なものが多かった。

遺物 平安時代から室町時代の遺物を中心に出土した。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、銭貨、滑石製品などがある。今次調査区の北、2次調査3区では多量の軒丸瓦・軒平瓦などが廃棄された土壌を検出しているが、瓦類の出土量は極端に少ない。

平安時代前期の遺物は、緑灰色微砂層、建物S B 422の柱穴掘形から出土している。土師器杯・椀・甕、須恵器杯・鉢・壺・甕、黒色土器椀・甕、緑釉陶器などがあるが出土量はわずかである。

小結 今次調査は、調査区の南側に針小路が想定された。明らかな路面と思われる層の確認はできなかったが、側溝と考えられる東西方向の溝を確認することができた。また、1町の中心、西二行と西三行を区画すると推定できる溝を検出している。これらの条坊にかかわる遺構は、出土遺物から平安時代後期以降に埋没しており、当該地域において平安京造営時の条坊施行の有無は今後の調査によるところが大きい。しかし、本調査において平安前期の掘立柱建物を検出しており、近隣の調査が待たれる。

(菅田 薫)

10 平安京左京九条二坊2 (図版1・15)

経過 本調査地は、八条通と西洞院通の交差点南西角に位置する元駐車場であり、平安京左京九条二坊十六町にあたる。試掘調査の結果、平安時代後期の土器を出土する土壌などが確認されたため調査を実施する運びとなった。

調査地の敷地北端に八条大路南築地心、東端に西洞院大路西築地心が想定される。調査区は、開発基礎掘削予定部分に682 m²を設定、調査を実施した。

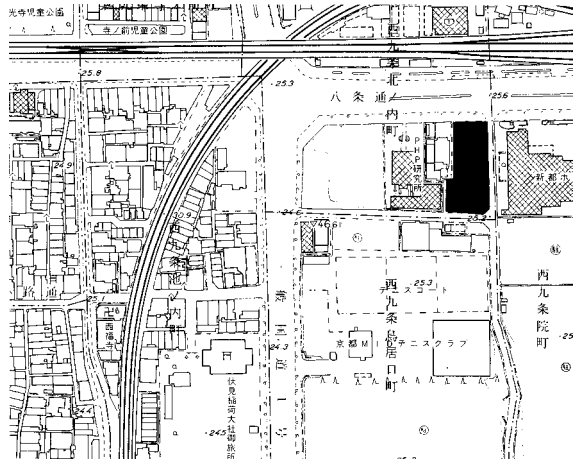


図34 調査位置図 (1:5,000)

遺構 基本層序は、約1.2mの整地層下に耕作土層の褐灰色泥砂層 (10YR6/1)・褐灰色泥砂層 (5YR4/1)、中世の包含層である灰黄褐色砂泥層 (10YR4/2)、磨滅した弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器が出土する砂礫層の順で堆積している。灰黄褐色砂泥層・砂礫層上面で遺構を検出した。灰黄褐色砂泥層上面で検出した遺構には、近世の耕作に伴う溝、暗渠、土壌がある。砂礫層上面で検出した遺構は、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代の柱穴、土壌、井戸、および池状遺構がある。

池状遺構 S X 185 は、全体的に浅く検出面からの深さ20～30cmを測り、東西座標軸にほぼ平行に掘られる南肩はきつい傾斜で立ち上がり、北肩は不定形で傾斜も緩やかに立ち上がり洲浜状を呈している。池の東端は約3mに狭まり、水の導入または流出部と考えられる状況を呈している。この北側立ち上がり部底面に景石とも考えられるチャート材の石が2箇所据えられていた。

遺物 出土遺物は、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代後期から鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・瓦、室町時代の土師器・陶器・輸入陶磁器・瓦などが出土している。このうち弥生土器、古墳時代の土器類は遺構のベースとなる砂礫層からの出土で、大半が磨滅している。土壌 S X 121 出土遺物を図示した。土壌 S X 121 からは、土師器・須恵器・瓦器が出土しており、その大半を土師器で占める。土師器は、皿・杯・碗類が大半を占めるが、高台の付いた碗が2個体ある。5は口径15.3cm、器高5.5cm、高台部径6.8cm、6は口径14.8cm、器高5.3cm、高台部径6.2cmを測る。兩個体ともにほぼ完形で、高台部は断面三角形を呈し、丁寧にナデている。5の内面は丁寧にナデられ、6内面にはミガキが認められる。胎土および器面は灰白色ないし乳白色を呈し、焼成は堅く良好である。

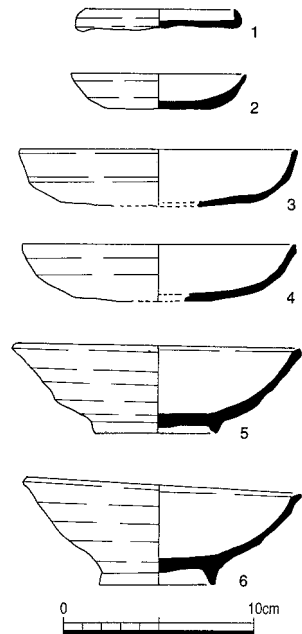


図35 S X 121 出土土器実測図 (1:4)

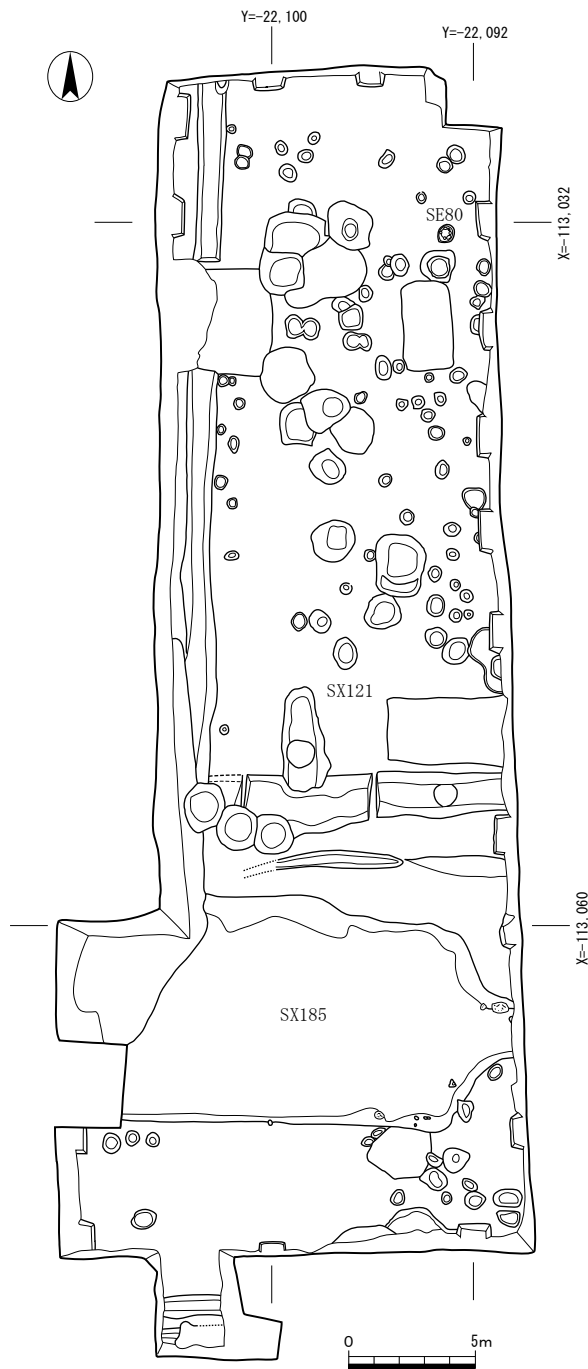


図 36 遺構平面図 (1:300)

小結 今回の調査で最も注目できるのは、土壌 S X 121 出土の土器であろう。図示した 2 個体の土器はいわゆる「吉備系土師器碗」と呼称されるものに近似している。この S X 121 は他の供伴遺物から 12 世紀末の時期に比定することができる。吉備系土師器碗とするならば橋本久和氏の編年によるⅢ-1 期にあてられ矛盾しないと思われる。^{註1}平安京とその周辺での「吉備系土師器碗」の出土は、木津川河床遺跡で各時期にわたる遺物が出土しているほか、京都大学構内遺跡、^{註2}平安京左京六条三坊の調査で出土している。^{註3}この 2 例はともに 14 世紀に入る時期の遺構に伴い出土しており、12 世紀にさかのぼる出土例は平安京内では初めての例となった。

なお吉備系土師器碗に関しては、岡山大学構内遺跡調査団山本悦世氏、岡山県埋蔵文化財センター伊藤晃氏から教示を得た。

(菅田 薫)

- 註 1 橋本久和「瀬戸内の中世土器」
『中世土器研究序論』所収 1992
- 註 2 浜崎一志「京都大学病院西構内 A F 15 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和 57 年度
京都大学埋蔵文化財研究センター 1984
- 註 3 菅田 薫「左京六条三坊」
『平安京跡発掘調査概報』昭和 57 年度
京都市文化観光局 1983

11 平安京左京九条四坊 (図版1・16)

経過 当地は旧郵政省用地で、後に京都市に移管され、広場として長く使用されてきた。ここに(仮称)東九条団地シルバーハウジング・プロジェクト事業が実施されることとなり、地下遺構が全面的に破壊される工法であることが判明した。そこで遺構の深さ、広がりをお確かめるため試掘調査を行い、遺構が敷地の西半部に遺存していることを確かめた後、発掘調査を実施した。

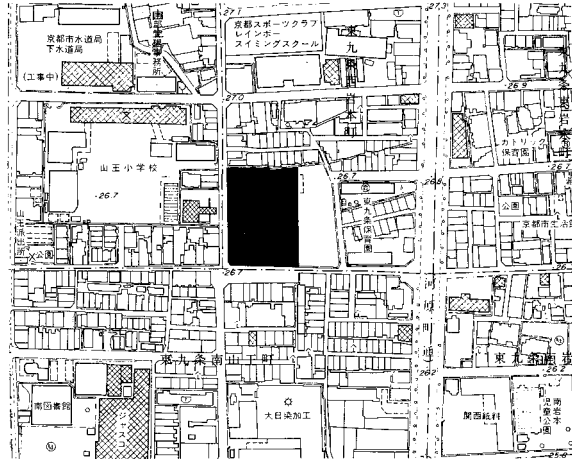


図37 調査位置図 (1:5,000)

遺構 条坊に関連した遺構は、江戸時代から近代にかけての土取土壌が全面に分布しているために確認できなかった。土取土壌は、粘土を取ることを主眼としたらしく、砂礫層にいたって掘るのをやめていた。そのため、砂礫層部分と井戸などの深い遺構だけが残る結果となった。

調査地を4区に分けた内のA区、B区の西辺に沿ってSD 62(古墳時代)の流れが確認できた。灰色粗砂層(5Y4/1)を主体として埋まっており、最上層にのみ泥土層がみられた。遺物の量は、上層に多く、下層では少なかった。遺物は、布留式土器のみであり、土器群が特に集中しているところが2箇所確認できた。

A区北端部では噴砂状になった土層が確認でき、水が自噴していたことを示しており、泉のような場所であったと思われる。ここは平安時代前期の遺物を伴い、これ以降の遺物は含んでいなかった。

平安時代末期から鎌倉時代中葉の遺構には井戸がある。D区のSE 55は素掘井戸で、12世紀のものである。SE 43と44は、切り合い関係が明瞭で、SE 44 B(方形)→SE 44 A(方形)→SE 44 C(方形)→SE 43(円形)の順で、方形縦板組井戸から円形桶組井戸に移行する関係を明らかにできた。方形縦板組井戸はSE 64・81・109・13・56・36で、円形桶組井戸はSE 46である。SE 14だけは方形横板組みで、より古い形式である。

中世から近世にかけての遺構は、A区、C区で流路を検出した。流路は、SD 76 Aと76 Bの二時期あってSD 76 Bは、SE 109(12~13世紀)を切っており、井戸よりも新しい時代と考えられ13世紀から16世紀にかけて存続していたとみられる。

遺物 時代別に整理してみると、布留式土器のいわゆる2式(新相期)と考えられる一群がSD 62より出土した。図39に示したものが主なものである。他にも砥石が1点出土している。11基の井戸から出土した遺物は、瓦器椀、土師器皿、漆器椀、須恵器片、曲物、箸が多く、特にSE 56からは多数の箸が出土した。時代は、12世紀から13世紀と考えている。全体に広がっていた近世の土取土壌からは、中世から近世の雑多な遺物が整理箱に100箱程度出土したが、

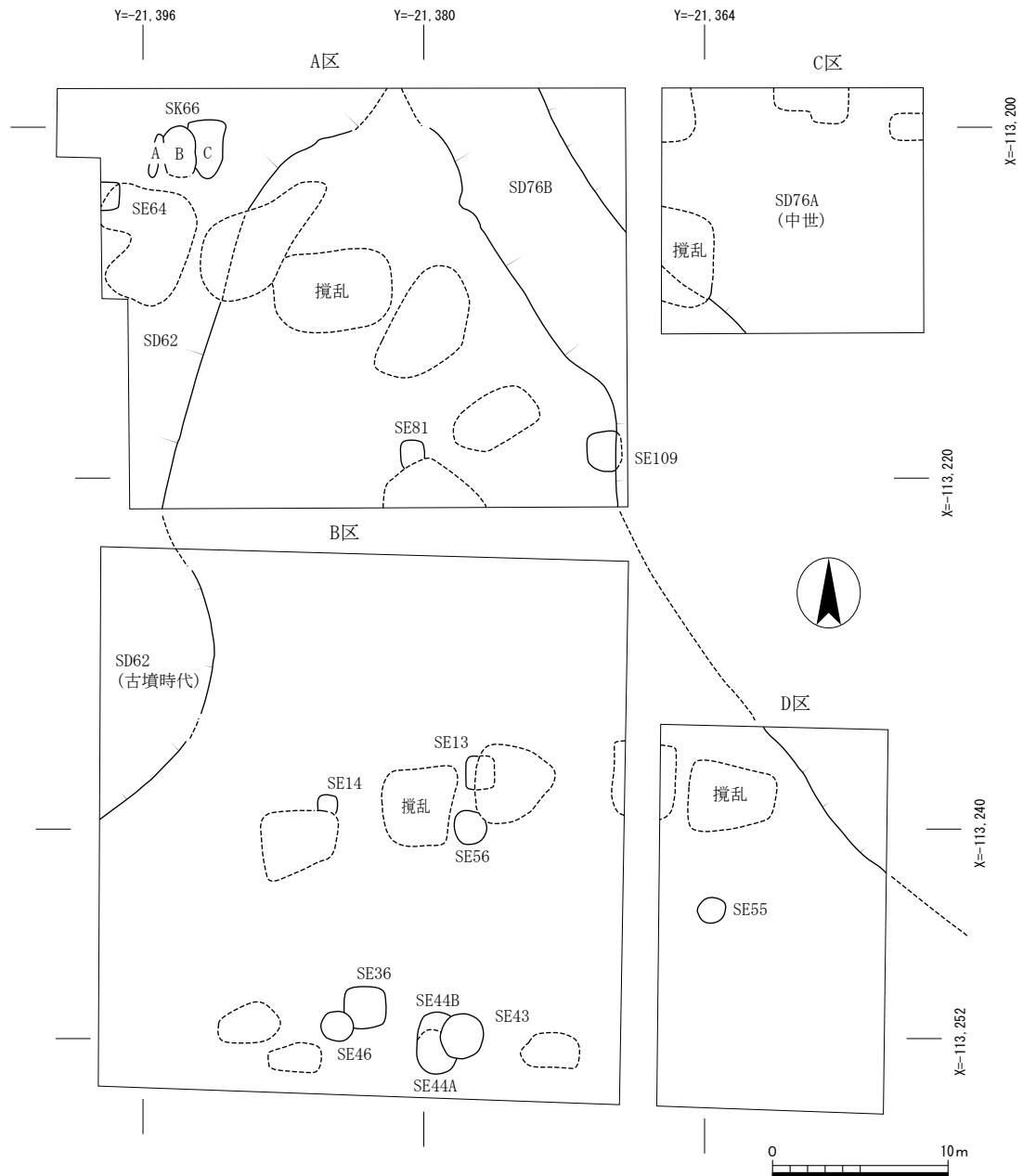


図 38 主要遺構配置図 (1:400)

中でも 12 世紀代と考えられる軒瓦類が多くみられることは、付近に瓦類を使用した建物が建てられていたことを示したものとみられる。

小結 古墳時代前期から埋没しつつあった S D 62 は、本来豊かな湧水を伴う河川であった。これは平安時代前期まで続いていたもので、水が濁れた平安時代後期になって井戸が掘られ居住環境が整えられるが、13 世紀には流路 S D 76 が東よりせまり、洪水などの危険のために人々が住まなくなったものとみられる。これは江戸時代前期頃まで続き、江戸時代中期以降は水田化している。
(吉村正親)

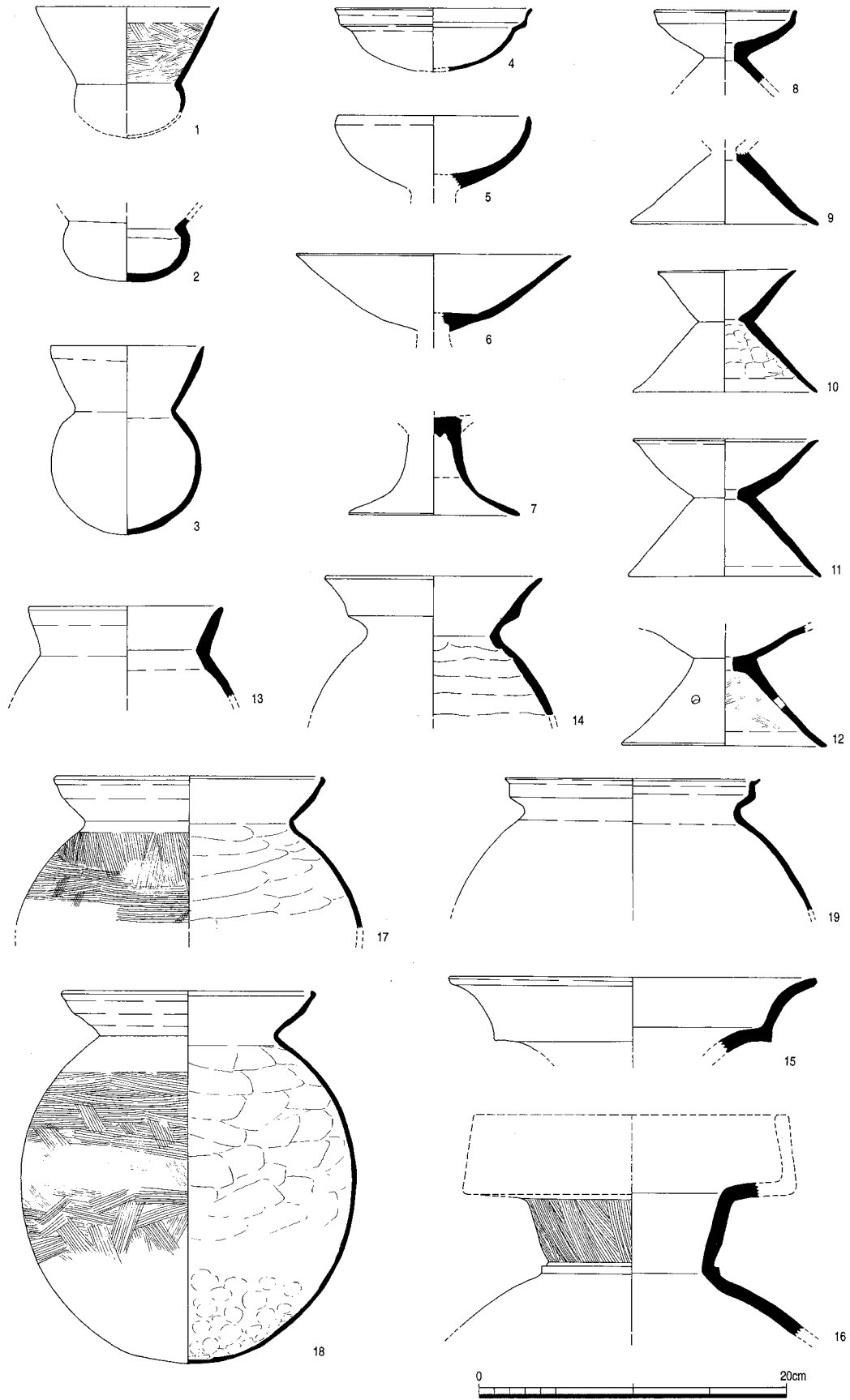


図39 S D 62 出土土器実測図 (1~3: 小型丸底壺 4: 鉢 5~7: 高杯
8~12: 器台 13~16: 壺 17~19: 甕) (1:4)

12 平安京右京一条四坊（図版1・17）

経過 右京区花園車道町に所在する京都市立花園小学校で屋内運動場が改築されることになった。改築予定地は平安京右京一条四坊五町・中御門大路に比定され、五町宅地内施設、中御門大路北側道路施設の検出が予測された。このため平成4年（1992）10月6日から10月19日にかけて改築予定地内の遺構を確認する試掘調査を実施し、中御門大路北側道路施設、築地基礎、井戸、柱穴などを検出した。遺構の遺存度はきわめて良好であることが判明し、本格的な発掘調査の必要が生じた。調査は面的に拡大することによって試掘調査の課題を解決する方向で実施した。調査面積は約510㎡を測った。

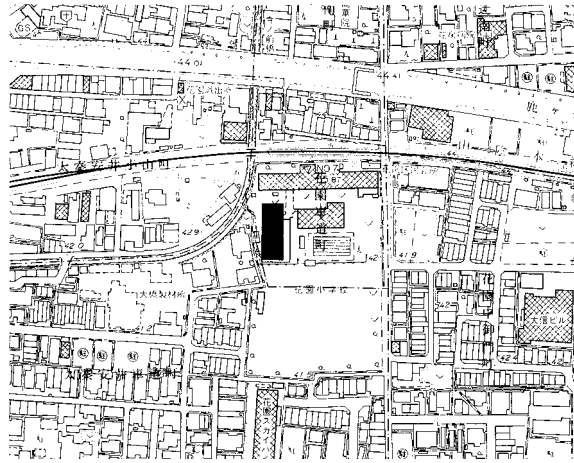


図40 調査位置図（1：5,000）

遺構 調査で検出した遺構は平安時代前期、平安時代後期に属するものがある。

平安時代前期の遺構には溝（SD6）1条がある。調査区北東辺に検出したもので、やや蛇行しつつ南北方向から東西方向に転じる15m分を確認した。幅1.5～2.0m、深さ0.3～0.6mを測る。4～5m間隔の深浅の繰り返しがあり、滞水機能を持たせたものと考えられる。

平安時代後期に属する遺構の年代は、12世紀前半と後半のものに分けられる。12世紀前半の遺構は溝（SD1・2）、築地基礎（SA4）、井戸（SE3）、柵（SA103）、建物（SB104・105）、柱穴多数がある。SD1は中御門大路北側道路施設に伴う内溝で幅1m、深さ0.6mを測る。逆台形の断面形を呈し、レンズ状の堆積が観察される。SD2は同じく中御門大路北側道路施設に付属する側溝で、幅2.0m、深さ0.9mを測る。逆台形の断面形、レンズ状の堆積が認められる。溝底部には漏水防止の粘土を貼りつけた箇所が部分的に確認できる。SA4はSD1・2の間に検出した築地塀の基礎部分で、粘土と砂礫を混合した土層が20cmの厚みで確認できる。SE3は東西3.0m、南北3.5m、深さ2.5mの規模を持ち、側壁が袋状に挟れる。内部施設は認められないが、豊富な湧水がある。出土木片中に井戸枿材とみられるものがあり、木枿を持つ井戸であった可能性がある。SB104・105はともに東西棟で南北2間、東西2間以上を測る。建物としては小規模なもので、数次の建て替えが確認できる。SA103は建物の西側で南北方向に検出した。その他の柱穴は約90箇所を検出した。径0.3～0.4mのものが大半を占め、建物周辺に集中する。12世紀後半の遺構には溝（SD99・100）がある。SD2のさらに南側、推定中御門大路路面内で検出した。SD99は幅0.9m、深さ0.4mを測り、調査区西端で南方向に屈曲する。南北方向部分では幅1.5m以上、深さ0.6mに規模を拡大する。SD100は幅0.8m、深さ0.2mを測り、SD99南北方向部分と合流する。

遺物 出土した遺物には古墳時代後期、平安時代前期、平安時代後期、室町時代、近代以降に

属するものがある。古墳時代後期の遺物は須恵器甕片が平安時代後期の遺構に混入して出土した。平安時代前期の遺物はSD6から土師器皿が出土したが少量である。他に須恵器杯、黒色土器碗、緑釉陶器碗があるが、後世の遺構に混入出土したものである。平安時代後期の遺物はSD2、SE3を中心にまとまって出土した。土師器皿・釜・高杯・甕、須恵器甕・碗、瓦器碗、白磁碗・皿・壺、軒瓦、丸・平瓦、木製品曲物・板材・塗漆板材・箸・木球、植物種実などがあり、12世紀前半に属する。同じく12世紀後半に属した土師器皿、須恵器甕、瓦器碗、平瓦はSD99・100からの出土である。その他室町時代に属する土師器皿が耕作土層から出土している。近代に属する陶磁器類は、旧体育館の攪乱土層から少量の出土があった。

小結 調査地は右京一条四坊五町東三行北八門の東半、東三行北七門の南辺の一部を占地する。調査では中御門大路北側溝および内溝(SD2・1)、築地塀(SA4)を始め、宅地側の柱穴群、井戸(SE3)、溝(SD6)道路内に設置された溝(SD99・100)などの遺構が検出された。SD6は9世紀後半の時期に埋没しており、調査区内では最古期の遺構に属する。不自然に蛇行することや規則的な深浅を繰り返すことなど、人為的な開削溝としての痕跡が認められる。五町北西地区の調査^{註1}で9世紀前半の遺構の検出があり、五町北半の当該期の遺構群との関係が考慮できるなら、園池に関係した溝の可能性が高まる。

平安時代後期、12世紀には中御門大路北側築地塀、北側溝、内溝の埋没が始まり、宅地内の井戸、建物などの廃棄が進行する。一時期、道路敷き内へ溝を開削するなど敷地が道路敷き内へ拡張される時期を経て、以後遺構の展開はな

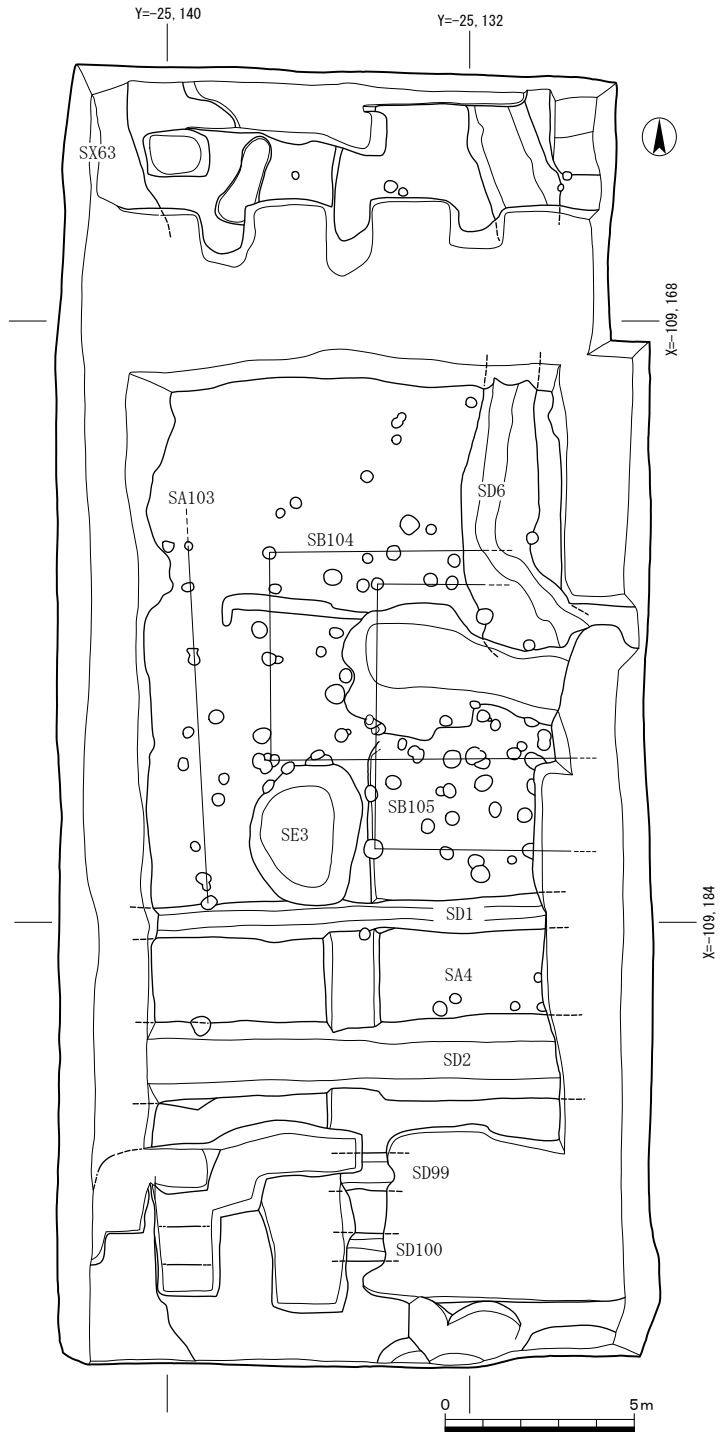


図41 遺構平面図(1:200)

く、宅地としての土地利用の痕跡は絶える。築地や側溝の成立時期に関しては、9世紀および10世紀に属する遺物の出土は希少であり、築地基礎の堆積土から11世紀末に属する遺物が出土することなどから、該期を大きくさかのぼらない時期に上限を設定すべきであろう。五町地内に本貫を有する人物名は明らかではない。調査で検出した建物も小規模な雑舎の2ないし3時期の建て替えと考えられるものであり、中心的な建物とは判断できない。しかし築地塀や深い側溝の維持管理に必要とされる経済力や、建物の棟に使用されたと考えられる瓦類、壺などの高価な白磁類の豊富な出土、鞆の羽口などの鍛冶施設に係る遺物の出土は、中堅クラスの貴族層を宅地主として想定できる。

五町宅地全体の様相については、S D 99が東三行の中央付近で南方向に屈曲すること、同位置の調査区北西端で西方向へ下がるS X 63が検出されること、山陰線高架工事に伴う右京一条四坊四町の調査^{註2}の結果などから五町西半以西における低湿地と宇多川の旧流路の存在が予察できよう。

(平田 泰)

註1 平田 泰「平安宮・平安京右京一条三・四坊・二条二・三坊・三条一坊」
『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995

註2 平田 泰「平安京右京一条三・四坊」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

13 平安京右京四条一坊（図版1）

経過 調査地は、京都市中京区壬生天池町JR軌道敷内にあり、平安京右京四条一坊一・二町、朱雀院跡に比定され、弥生時代から古墳時代の遺跡である壬生遺跡の範囲にも重なる。

調査地南側はすでに基礎杭が打たれて調査不能のため、調査区を北半に限定した。調査面積は東西2m、南北60m、約120㎡を測った。

遺構 平安時代後期、桃山時代、江戸時代、近代以降に属する遺構を検出した。平安時代後期の遺構には土壌SK6がある。径1.5mを測

り、湿地最下層の溜まりと考えられる。11世紀後半の土師器皿が完形で出土した。この時期に属した遺物包含層は、地山である黄灰色砂礫層上に薄く堆積する。桃山時代に属する遺構には溝SD1・4・5がある。南北方向2条、東西方向1条があり、いずれも幅20cm、深さ10cmを測る。南北方向溝は約1mを離して平行し、中央部分が耕作地に伴う畦畔と考えられる。江戸時代および近代に伴う遺構は遺物包含層で、南側の落ちの上層堆積土である。

遺物 出土遺物は、平安時代前期、平安時代後期、桃山時代、江戸時代、近代に属するものがある。平安時代前期の遺物は須恵器杯・甕、灰釉陶器碗などが出土したが、平安時代後期の遺構へ混入したものである。平安時代後期の遺物はSK6、遺物包含層などから出土したもので土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦器碗、瓦類がある。桃山時代の遺物はSD1・4・5から土師器皿、陶器皿、磁器皿、瓦などが出土した。江戸時代・近代に属する遺物は陶器皿・碗、磁器皿・碗、ガラス製品、瓦などがある。

小結 調査地点は、右京四条一坊一町の中心地区で、この坊の一町から八町は東西2町南北4町の宅地面積を持つ朱雀院に比定される。朱雀院は『続日本後記』承和三年（836）五月条に文献上の初見がある。院内には中央に南池と呼ばれる池、北側に寝殿など2群の建物、東に馬場殿、島町があったとされる。調査で検出した湿地堆積層と南端の西方向への落ちは、位置的にみて院内中央の池に注水した水路の肩口の可能性がある。湿地堆積層の最下層では、11世紀後半の遺物が出土していることや、北側で検出した桃山時代に属した畦畔は、直近の西側になんらかの区界が存在したため成立したものにとらえれば、上記の可能性が有力なものとなる。

（平田 泰）

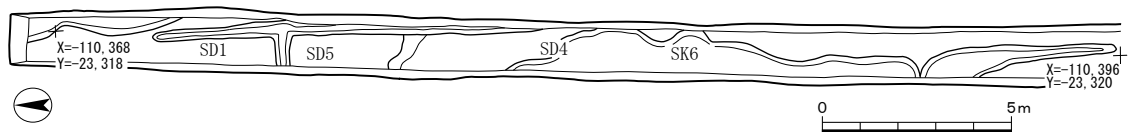


図43 遺構平面図（1:200）

14 平安京右京六条一坊（図版1・18・19）

経過 この調査はJ R丹波口周辺再開発事業に伴うもので、旧大阪ガス京都工場敷地内の発掘調査としては7次目に当たる。この周辺ではこれまでの6次にわたる調査で多数の平安時代の遺構、遺物を検出している。とくに五・六町域で実施した1・2次調査では五町の全域を占め、先駆的な寝殿造とでもいべき建物配置をとる邸宅跡を発見し、その成果はすでに報告している。五町とは皇嘉門大路を隔てた西側の

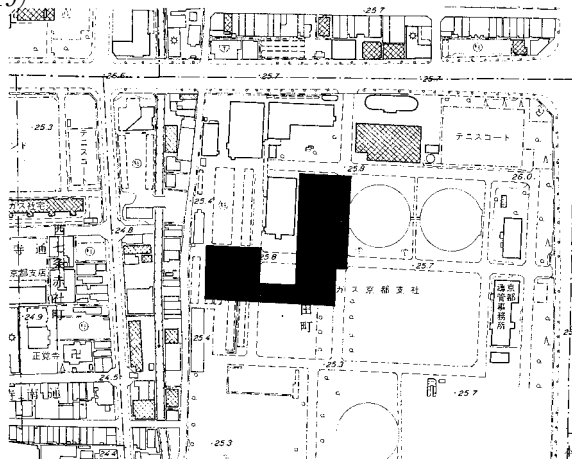


図44 調査位置図（1：5,000）

十一・十二町、さらにその西側の十三・十四町を対象にした3～6次調査でも掘立柱建物、柵、井戸、溝など、平安時代の遺構を多数検出している。これらの調査ではこの地域が五町とは異なり、町を溝や柵で区画した4分の1の占地をとる邸宅で構成されていたことなどが明らかになりつつある。今回の調査対象地は旧大阪ガス京都工場敷地の西部で5次調査地の西、6次調査地の北方に位置し、右京六条一坊十三町の北辺および十四町の南半部東側に該当する。楊梅小路や4・6次調査で検出した十三町の邸宅に属する遺構、5次調査で検出した十四町南東隅の井戸に関連する建物あるいは他の施設などの遺構が想定される地域である。調査は対象地を1～3区に分割して実施した。その結果、楊梅小路路面および南北両側溝、十三町では掘立柱建物、柵、土壌、溝、十四町でも掘立柱建物、柵、溝のほか2基の大きな柱穴で構成される性格不明の遺構など平安時代前期の遺構群やさらに下層では古墳時代および縄文時代から弥生時代の川を検出した。

遺構 平安時代の主要な遺構には、まず楊梅小路路面および南北両側溝がある。北側溝は2条検出しており（SD 12・13）、南側溝（SD 14）も少なくとも上下に2時期の堆積が認められた。楊梅小路より南側の十三町では掘立柱建物2棟（SB 1・2）、柵1条（SA 3）、溝（SD 15・16）を北側の十四町では掘立柱建物（SB 4～9）、柵（SA 19～24）、溝（SD 17・18）などのほか礎板をもつ2基の柱穴で構成される遺構（SX 10・11）を検出した。十三町側の遺構はいずれも4・6次調査で検出している遺構群に関連するものであるが、配置や時期的な変遷については今後の検討が必要である。十四町の建物や柵などは位置的に重複しており数時期にわたるものである。5次調査では十四町南東隅に井戸を検出しているが、今のところこれがいずれの建物と関連するものか結論は下せない。建物SB 5、あるいはSB 7と重なる柱穴2基からなる遺構は、破風材など建築部材を転用した礎板を持つ。構造的には門のようなものが想定できるが、その位置から他の遺構との関連が不明である。SD 17・18は東一行・二行界付近に位置しており、区画に関連することも考えられるが、これも他の建物などとの関連から敷地内の施設とみるほうが妥当であろう。全体に今回の調査では十三町に比べ、十四町の遺構密度が高い傾向がみられる。

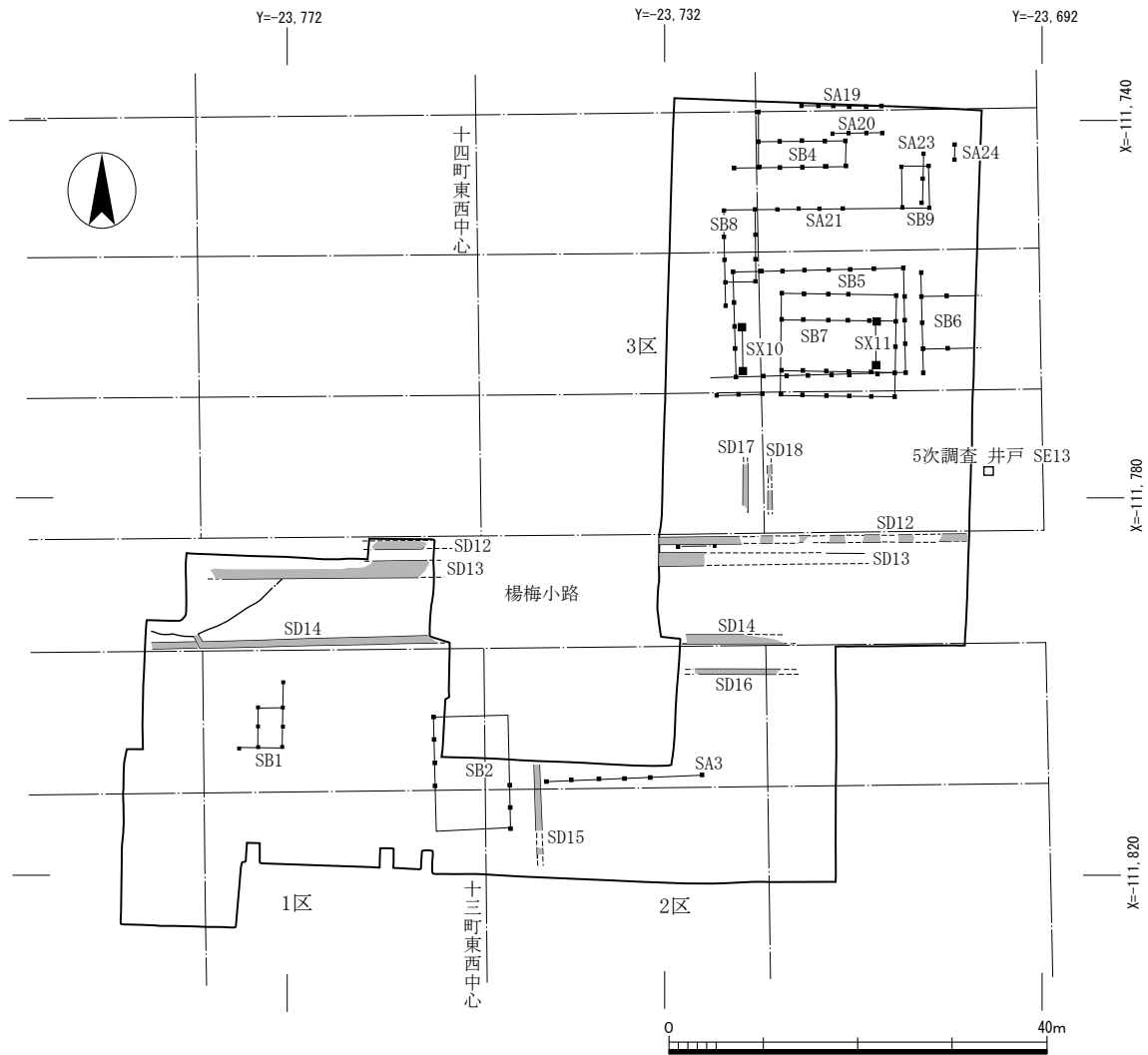


図45 遺構配置模式図 (1:800)

遺物 出土遺物の大半は平安時代のもので、他は非常に少ない。遺物はおもに土器類でそのほか破風、肘木などの建築部材がある。これらの遺物は現在整理中であるが、十三町内の南北溝SD15の土器類について概略を述べ一部を図示しておく。土器類はI期新に属し、総破片数は3,148片である。このうち土師器が最も多く全体の85.5%を占める。次いで須恵器が11.2%、黒色土器2.2%、緑釉陶器1.0%となる。機能別にみると供膳形態が80.7%、貯蔵形態4.8%、煮沸形態12.3%を示す。

多数を占める供膳形態土器類のうち90.5%が土師器である。土師器を除いた供膳形態での比率は須恵器69.0%、黒色土器19.0%、緑釉陶器12.0%で、I期新の資料としては灰釉陶器を全く含まない点がやや特異である。

小結 今回の調査によって得られた成果は、まず楊梅小路の検出をあげることができる。同小路に関する遺構は、1次調査において南側溝を検出していたが、皇嘉門大路を隔てた西側のこれまでの調査では未確認であった。今回は側溝だけではなく、路面も共に検出したことは重要である。また6次調査で検出していた十三町を東西に二分する南北溝がさらに北に延長することも確

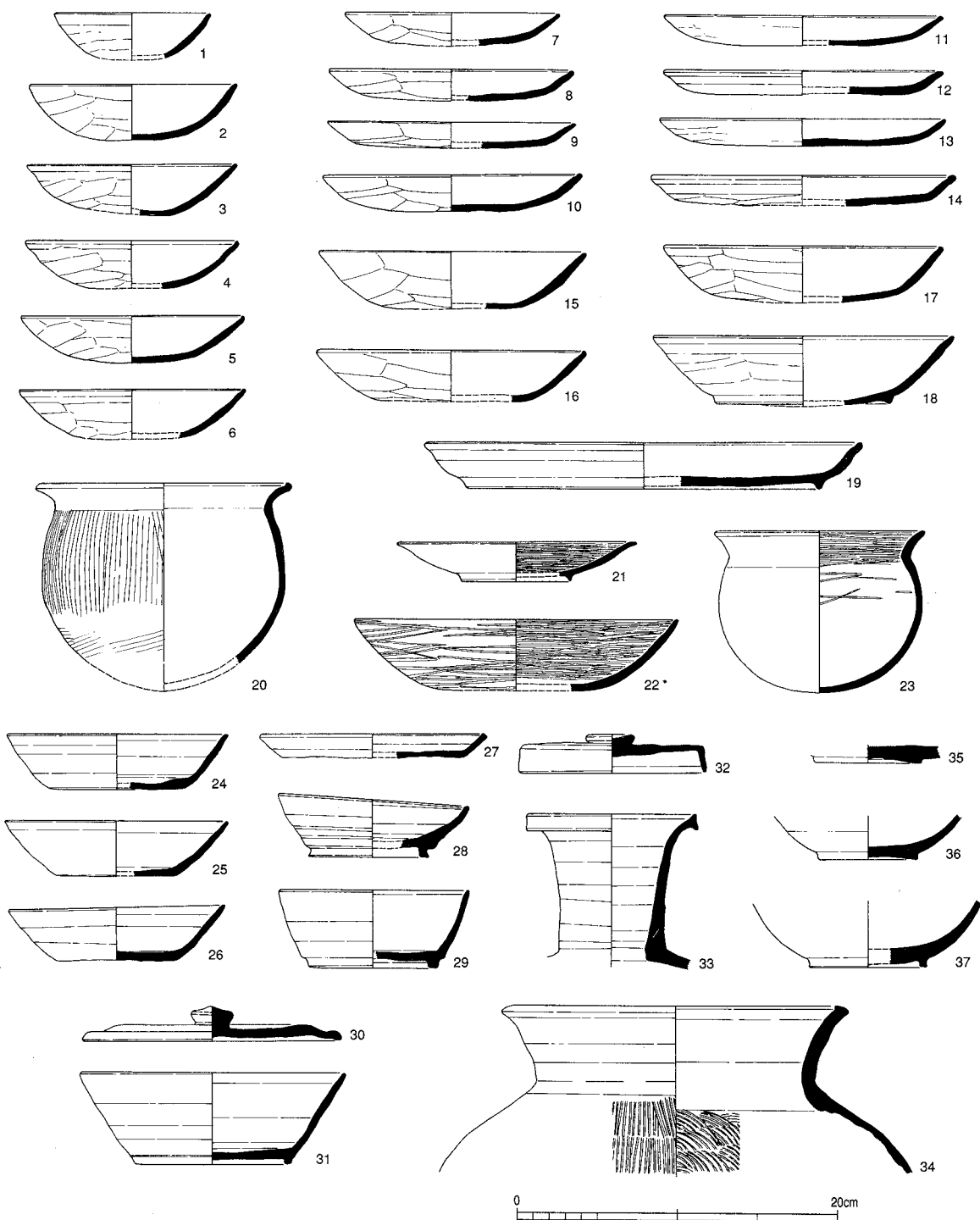


図46 S D 15 出土土器実測図 (1～20：土師器 21～23：黒色土器
24～34：須恵器 35～37：緑釉陶器) (1：4)

認できた。これによって十三町北西部も少なくとも4分の1町に分割された宅地であることがわかり、その北部域は建物などの密度が比較的低い状況であったことも合わせて判明した。一方、十四町では5次調査で検出した井戸と関連する建物群をとらえたが、その時期的変遷や、占地上について明確にできなかった。これらの点は未調査部分の今後の調査によって確認できるものと考えている。

(平尾政幸)

Ⅲ 白河街区跡

15 白河北殿跡 (図版1・20)

経過 当地は平安時代後期に造営された白河北殿の推定地にあたる。今回、消防署の新庁舎が建設されることになり、調査を実施する運びとなった。調査は、建物が建設される予定の敷地南東部を中心に調査区を設定して実施した。最終的には調査区の西および北側を一部拡張し、遺構の広がりを確認して終了した。

遺構 調査では、池を検出し、その汀線を調査区の南部と西側の拡張区で確認している。池の深さは検出面から約60cmで、底はほぼ水平である。汀は比較的緩やかで、護岸などの施設は認められなかった。池南側の汀には平安時代後期の土器が集中しているが、そのほかの埋土には室町時代の遺物を包含している。したがってこの池は、平安時代の後期には造られており、室町時代に埋没したと考えられる。

また、池の埋土の上面では南北方向の小溝群を多数検出している。これらの溝は江戸時代の耕作に関するものと考えられ、この時期には当地が耕地化したことを示している。

遺物 出土した遺物は平安時代から近世のものまであり、大半は土器や瓦類である。平安時代の遺物は後期のものが中心で土師器、瓦器などの土器類と瓦類が出土した。鎌倉時代から室町時代の遺物は土師器、瓦器、陶器、磁器などの土器類が多く出土しているが、いずれも小片である。江戸時代の遺物は土師器、陶器、磁器などの土器類と瓦類がわずかに出土している。

小結 今回の調査成果は池を検出したことである。この池には洲浜や景石などは認められなかったが、汀線の状態が比較的整っており、園池の一部である可能性がある。園池とすれば存在する時期が白河北殿の造営時期と一致することから、北殿内に築かれた園池であるとも推測できる。さらに、池およびその周辺から平安時代後期の瓦が多く出土しており、付近に建物も想定できよう。白河北殿については未だその実体がよくわからないが、今回の調査はその糸口を見出したものといえる。

(吉崎 伸)

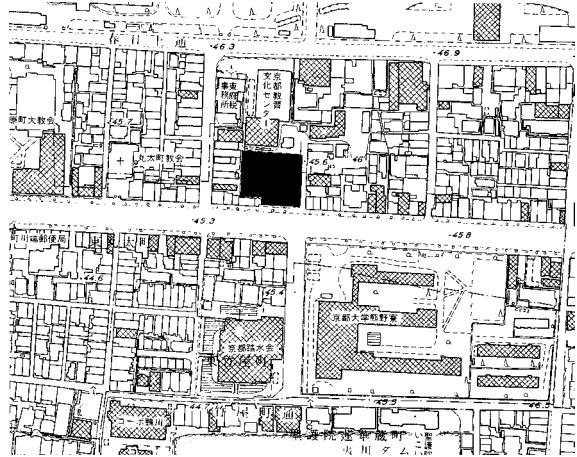


図47 調査位置図 (1:5,000)

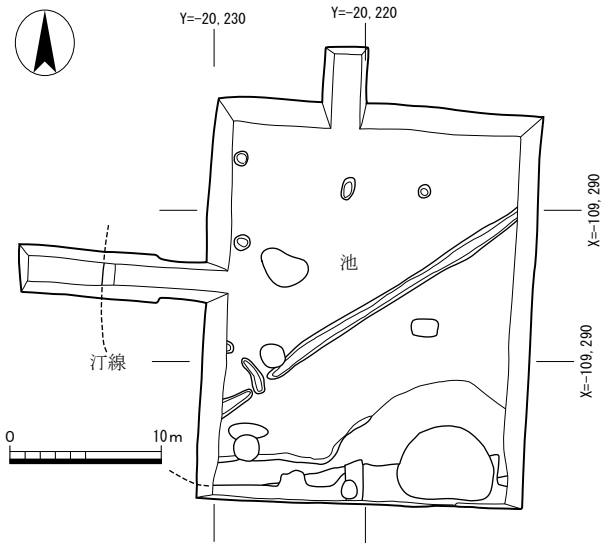


図48 遺構平面図 (1:500)

16 成勝寺跡 (図版1・21・22)

経過 勸業館敷地では、旧館建設時に多数の平安時代の瓦が採集されており、六勝寺のうちの成勝寺跡と推定されてきた。今回、勸業館および伝統産業館の建て替えに先立ち試掘調査を実施したところ、平安時代の整地層が良好に遺存していることが判明したため発掘調査を行うことになった。調査区は、旧勸業館敷地を本館部分をはさんで南区と北区に分け、旧伝統産業館敷地の北側を西区として調査を行った。

遺構 調査区の基本層序は現地表から約1～3mまでが勸業館あるいは琵琶湖疏水掘削時の盛土で、若干の近世耕作土を除けばすぐに遺構面となる。北区では地表から約1mで遺構面となるのに対し、南区では北側で2m、南側の深いところでは3mの深さで遺構面となっており、この高低差が自然地形によるものか意図的に段差を設けているのか検討する必要がある。とくに、西区では後述するように南北方向の西側に下がる段差を検出しており、白河街区の造成段階で段差が設けられた可能性が高い。以下に各調査区での主要な遺構を概説する。

南区では、平安時代後期の井戸を12基検出している。その分布状況は調査区の北西部(井戸群A)と南東部(井戸群B)に集中して検出している。すべて方形縦板組みの井戸で、そのうち1基には瓦積みの上部構造が一部残っていた(S E 130)。漆塗瓦製品が出土したS E 181は、調査区北東隅で検出した。木枠の一辺が1.2mで、幅0.3m強の縦板を4枚ならべ、内側に横木の棧を0.4m間隔で組んで支えていた。深さは遺構面から約2mである。他の井戸では底部に曲物を据えたものもあった。六勝寺にかかわる平安時代後期の井戸が、これだけまとまって発見されたのは初めてである。また、現在の成勝寺町と円勝寺町の町境で15世紀に埋まった幅8mを越える大規模な東西方向の堀(S D 90)を検出している。この堀の北肩部分では平安時代後期にさかのぼる東西溝を検出しており(S D 88)、白河街区復原の新たな資料となるだろう。

北区の調査では、白河街区の地割りに関係する遺構を検出した。この遺構は、幅2.5mの南北方向の堀(S D 206)とその東約30mの平行する溝(S D 217)で、埋まった土の中から12世紀の土器片や瓦が多数出土した。また、これらの地割り遺構の間には平瓦の小口をそろえて積み上げた方形井戸(S E 230)がある。埋まったのは14世紀頃だが、六勝寺の廃絶が15世紀頃と考えられており何らかの関係を持った井戸と推測できる。このほか、木組方形井戸と推定できる井戸2基(S E 232・254)と土器溜(S X 234)を検出している。とくに、S E 232とS X 234は白河街区が造営され始めた11世紀後半の遺構であり、S X 234は何らかの目的で使用された土師器皿が一括して廃棄されている。西区において、南北溝(S D 301)を検出した。本調

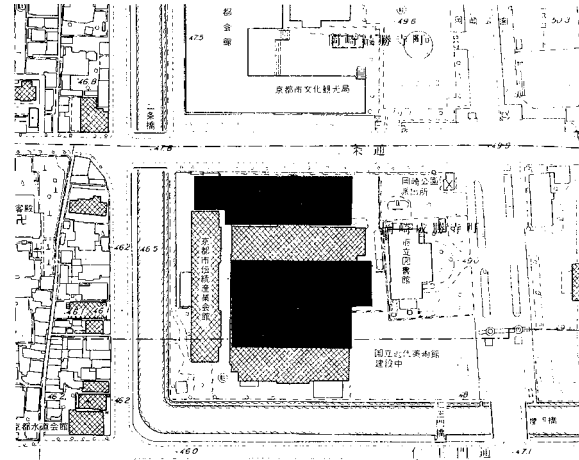


図49 調査位置図(1:5,000)

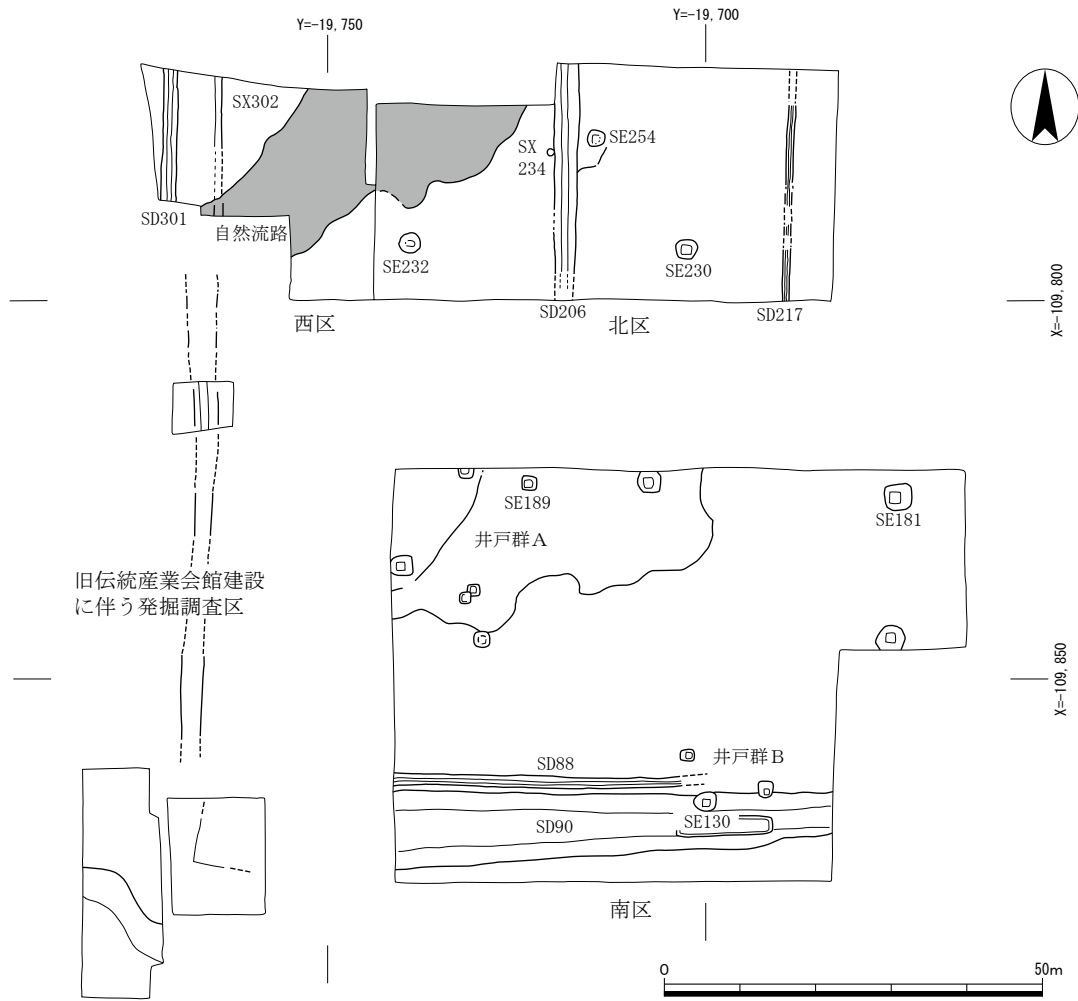


図50 調査地全体図 (1:1,000)

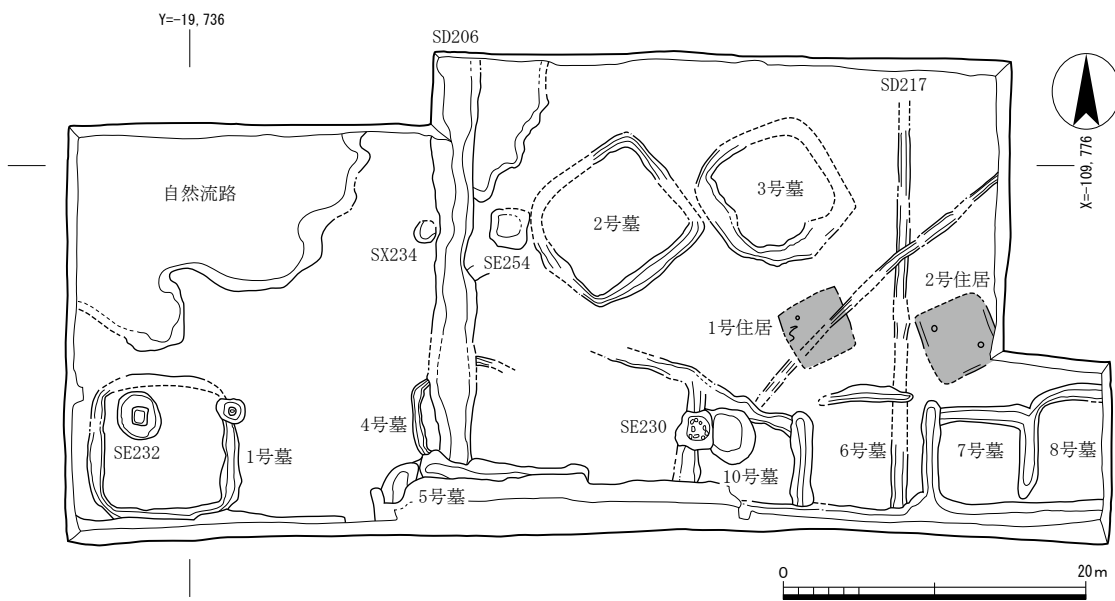


図51 北区遺構平面図 (1:500)

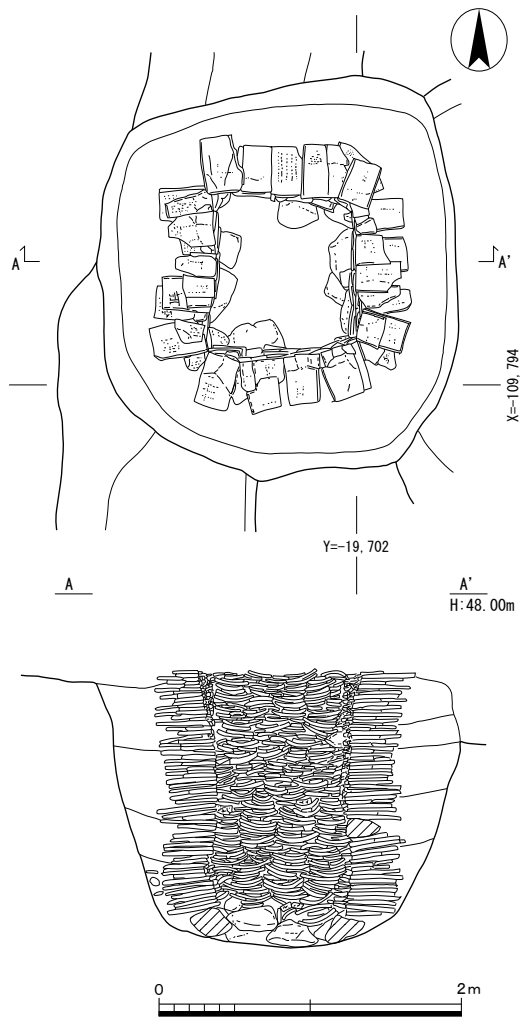


図 52 SE 230 実測図 (1:50)

査区の南隣における過去の発掘調査（旧伝統産業会館建設に伴う発掘調査）でも同様の南北溝が検出されているが、ややずれており同一の溝であるか不明である。さらに、この南北溝に平行して、東約7mの地点で盛土あるいは地山の削平による段差（SX 302）を検出した。この段差より東は、平安時代後期の整地と思われる盛土がなされている。さらに、この盛土の下層において、南西方向に流れる自然流路を検出した。11世紀後半の土師器を包含しており、白河街区の造営過程で埋められたものと考えられる。

白河街区関係以外の遺構としては、北区から西区にかけて下層で古墳時代後期の竪穴住居を2棟、弥生時代後期から古墳時代にかけての方形周溝墓を10基検出している。^{註1} 1号住居は床面がかすかに残る程度であるが、西辺で竈の痕跡を検出している。この竈の北脇に小ピットが穿たれており、中から土圧によって潰れた状態の土師器甕が出土した。2号住居は竈があったと考えられる北辺が攪乱によって壊されていたが、一辺4.5mで、壁際に周溝がめぐっていた。方形周溝墓は一辺ほぼ9mで、マウンドは

すべて削平されており、主体部の状況は不明である。2号・3号墓は方位をかなり西に傾けているが、他はほぼ真北にあっており、方位の違いから時期差を考慮することができる。周辺では、岡崎グラウンドの発掘調査で同時期の自然河川と6世紀の古墳（鶴塚）を検出しており、武徳殿の建設に伴う発掘調査でも弥生時代中期（紀元前後）の方形周溝墓を確認している。自然河川による微高地上に墳墓が形成されていた様子が明らかになりつつある。

また、南区と北区の両調査区で、平安神宮火山灰層の確認調査を行った。その結果、現地地表下4.5～6.0mの地点で始良Tn火山灰層を確認している。とくに南区では、偶蹄類に属する動物の足跡らしきピットの並びを検出しており、断面観察から火山灰層の上に薄く堆積したシルト質粘土層から踏み込んだものと考えられる。平成元年（1989）に行った岡崎遺跡での調査成果に^{註2}続き、平安神宮火山灰層上での旧石器時代の生活支持面が確認できたことになる。

遺物 遺物は整理箱にして1,217箱分が出土している。平安時代の遺物は、平安時代後期から鎌倉時代にかけての土師器皿・瓦器椀などの日常雑器が出土しており、とくに南区では特殊な用途で使用されたと考えられる白色土器や輸入陶磁器が出土している。輸入陶磁器は中国の長沙銅官窯で製作された黄釉褐彩壺で、平安時代前期に輸入し伝世されたと考えられる。また、北

区のS X 234 からは11世紀後半の土師器皿などが一括して出土しており、白河街区造営の時期を示唆している。寺院に関する遺物としては多くの瓦類が出土しているが、文様面に漆を塗った軒平瓦状の瓦製品が出土したことは注目できる。この瓦製品の文様は一般的な巴文のほか、羽を広げた鳳凰を並列させた優美な文様があり、前者は段頸、後者は曲線頸Ⅱの形状を示す。しかし、奥行きは10cmほどしかなく、用途は明らかでない。このほか、緑釉を施した土塔なども出土しており、六勝寺との深い関係が想定できる。



図53 長沙窯黄釉褐彩壺

下層の遺物としては、方形周溝墓群から出土した多数の弥生土器があげられる。供献された甕・鉢・壺・高杯などが周溝内から出土しており、とくに2号墓からは、ほぼ完形の小型壺・小型鉢・高杯などが周溝各辺に落ち込んだように規則的な間隔で出土している。古墳時代の竪穴住居からの遺物は、1号住居の竈脇の小ピットから出土した土師器甕があげられる。また、このピットの埋土から細かく割れた製塩土器片が多数出土しており、当時の生活状況を知るうえでの良好な資料となろう。この住居群を覆う包含層からは、少量であるが古墳時代の土師器や須恵器片が出土しており、集落とはいえないまでも何らかの生活空間が営まれていたと考えられる。

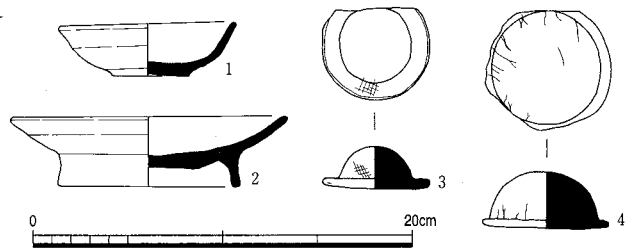


図54 白色土器・土塔実測図(1:4)

古墳時代の土師器や須恵器片が出土しており、集落とはいえないまでも何らかの生活空間が営まれていたと考えられる。

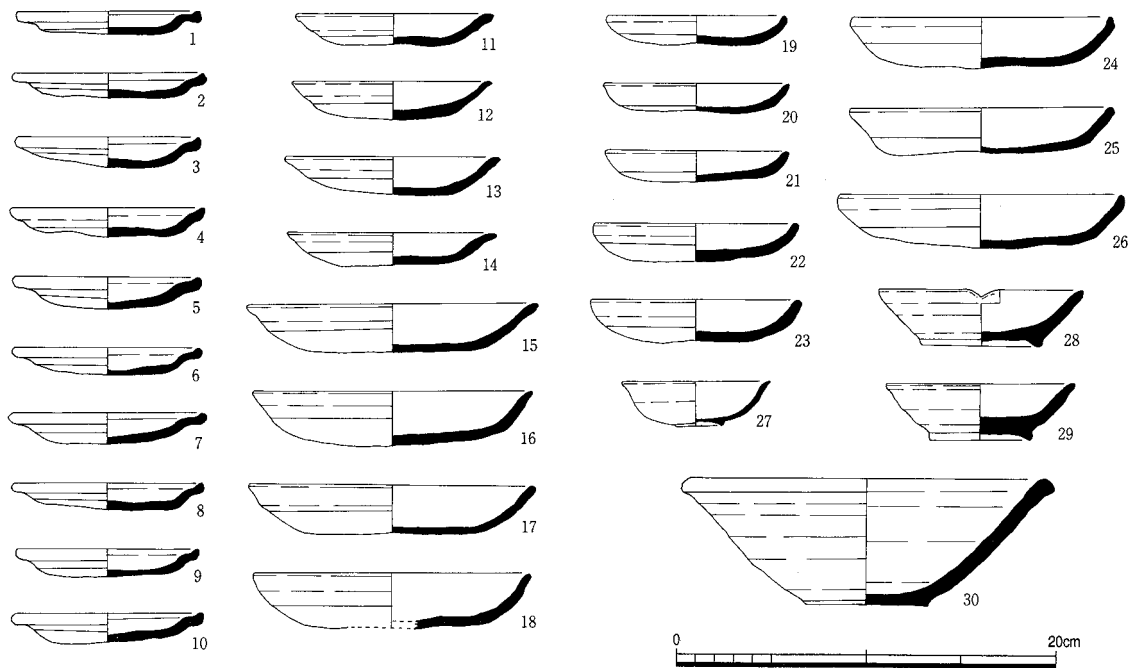


図55 出土土器実測図(S X 234:1~18 土師器 S D 206:19~26 土師器 27 瓦器 28~30 須恵器)(1:4)

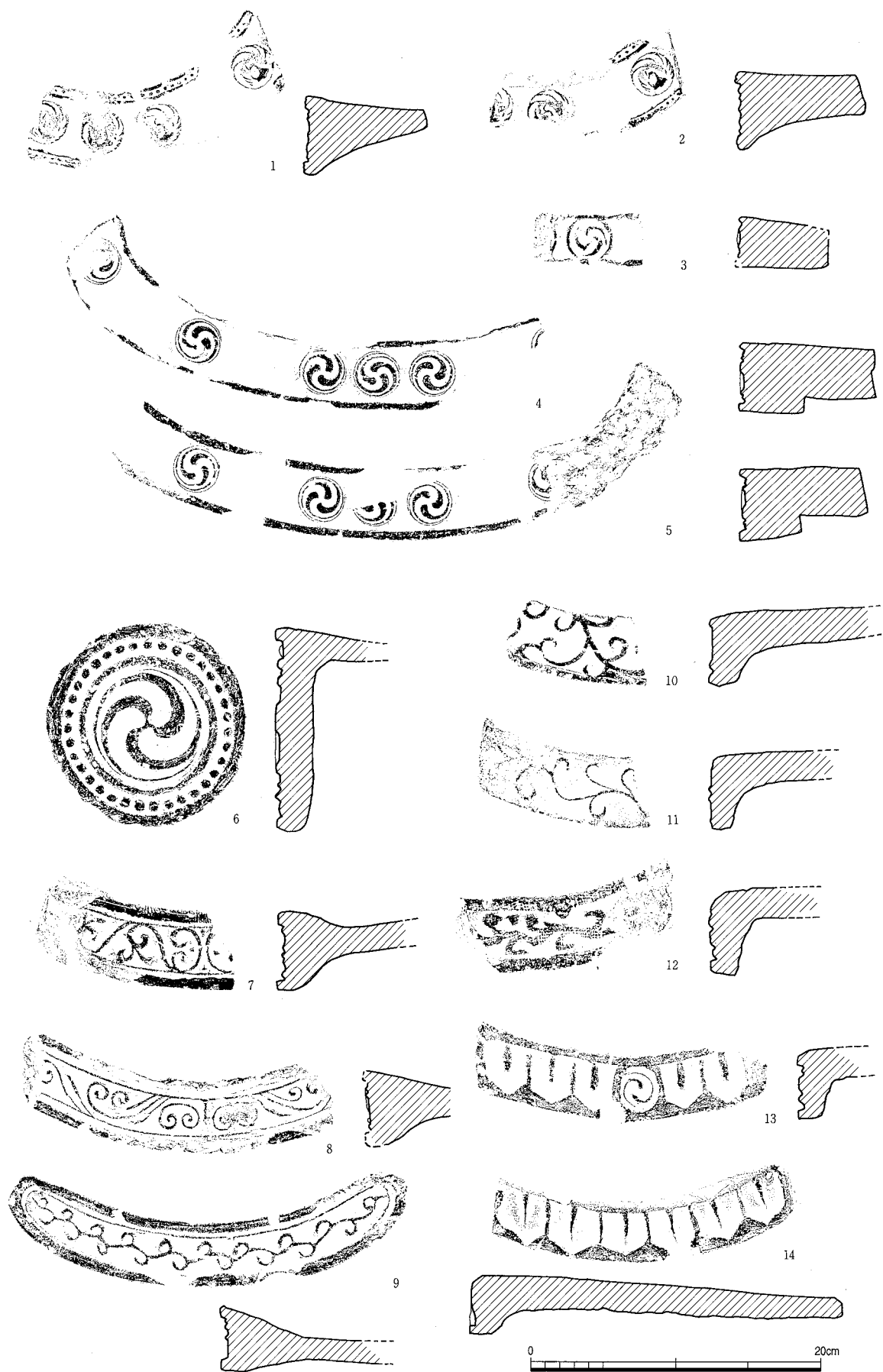


图 56 出土漆塗瓦製品・出土軒瓦実測図 (SE 181: 1~3 漆塗瓦製品
SE 181: 4·5 漆塗瓦製品 SE 230: 6~14 軒瓦) (1: 4)

なお、粟田焼関係の資料として、窯元の刻印が施された匣鉢やそれに伴う窯道具が南区で多数出土していることを付加しておく。刻印には、「いせ又」、「一忠」などの文字や、記号を印したものがあつた。このうち「いせ又」、「一忠」は、江戸時代後期に活躍した粟田焼の窯元である「伊勢屋又兵衛」、「一文字屋忠兵衛」との関連が想定できる。粟田焼の中で粟田口焼は、京焼では最初に開窯された重要な陶窯で、三条粟田口において寛永年間のはじめに瀬戸出身の三文字屋九右衛門が開窯したと伝えられ、狭義での粟田口焼は元禄頃まで続いたようである。現在では粟田の地に窯は途絶えており、粟田焼に関して不明な点が多い。今回の調査によって粟田焼関連の良好な資料が得られた。

小結 今回の調査では成勝寺に直接関係する遺構を確認できなかったが、同時期の井戸群と区画溝を検出したことによって、寺院の中心伽藍に比定するのは難しくなつた。六勝寺の中で発掘調査によってその位置が明らかとなつたのは法勝寺と尊勝寺だけであり、白河街区の復原を含め他の寺院の配置についても再検討する必要がある。また、西区で検出した南北溝 S D 301 とそれに平行して存在する段差 S X 302 が、平安時代後期において地割りの役割を担っていたことは確実で、尊勝寺の主軸ラインの東 15 m 付近に位置しているため、あるいは尊勝寺南大門から南へ延びる南北路の東側溝に相当する可能性がある。さらに、二条大路末に伴う東西方向の溝を検出するため北区と西区で拡張調査を行ったが、明確な側溝を検出することができなかった。西区の南北溝および段差が調査区の北側に続くことなどから、二条大路末の位置あるいは幅について再検討しなければならないであろう。

下層遺構では、方形周溝墓群とともに古墳時代の竪穴住居が検出できたことは大きな成果である。この地域は白川の氾濫原であり集落には適しておらず、実際に竪穴住居は今までの発掘調査では検出できなかった。2棟だけの検出であり、集落を考えるには資料不足であるが、古墳時代に周辺に生活空間が存在したことは間違いないであろう。また、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓群の検出は、墓域の形成過程の解明とともに鴨川左岸の土地利用の復原を試みるうえで重要な問題を提起したといえる。

(網 伸也・会下和宏・桜井みどり)

註1 会下和宏「岡崎遺跡の方形周溝墓について」『研究紀要』第1号

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995

註2 内田好昭「法勝寺跡・岡崎遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994

IV 鳥羽離宮跡

17 鳥羽離宮跡 138 次調査 (図版1・23)

経過 本調査地は、鳥羽離宮田中殿跡と推定され、調査地周辺は過去において継続的に調査が行われている。これらの過去の調査のうち、本調査区南側で行われた鳥羽離宮跡2次調査、および本調査区東側で行われた14次調査では、建物と建物基壇の地業を検出している。また試掘調査において、地鎮具も出土している。本調査地においても建物、および建物地業の検出が期待された。

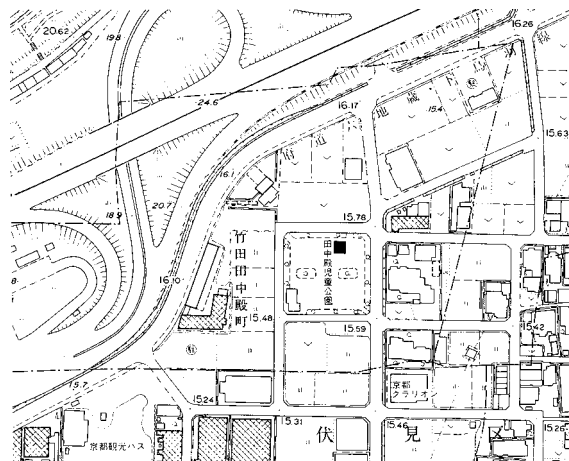


図57 調査位置図 (1:5,000)

調査区は、南北7.5m、東西7.5mの規模で、表土層・床土層・旧耕作土層を重機によって除去したところ、鳥羽離宮遺構面（建物地業上面）を検出した。写真と実測の後、掘り下げた結果、玉石を敷いた層を検出したので、再び写真・実測による記録作業を行った。こうした作業を下層においても繰り返し、最終的に無遺物層面まで掘り下げた。最後にサブトレンチを設け、下層遺構の有無を確認し、現場作業を終了した。

遺構 今回検出した遺構は建物地業である。調査区の基本的な層序は、上から第1層が盛土層、第2層が黒色泥砂層（床土・旧耕作土層）、第3層がオリーブ黒色泥砂層、第4層は鳥羽離宮廃絶期の層で暗灰黄色泥砂層（層厚20～30cm）。第5～8層は鳥羽離宮田中殿の建物地業（層厚75～90cm）。第9層は無遺物層で、基本的に暗オリーブ褐色粘土層であるが、調査区西側では、湿地帯にあったため変色しており、オリーブ黒色を呈している。

建物地業は調査区全域にわたって検出され、層厚75～90cmにも及ぶ。地業上面を検出した時点で、約1丈（約3m）×1丈を一単位として土層の色と質の違いが認められた。7.5×7.5m

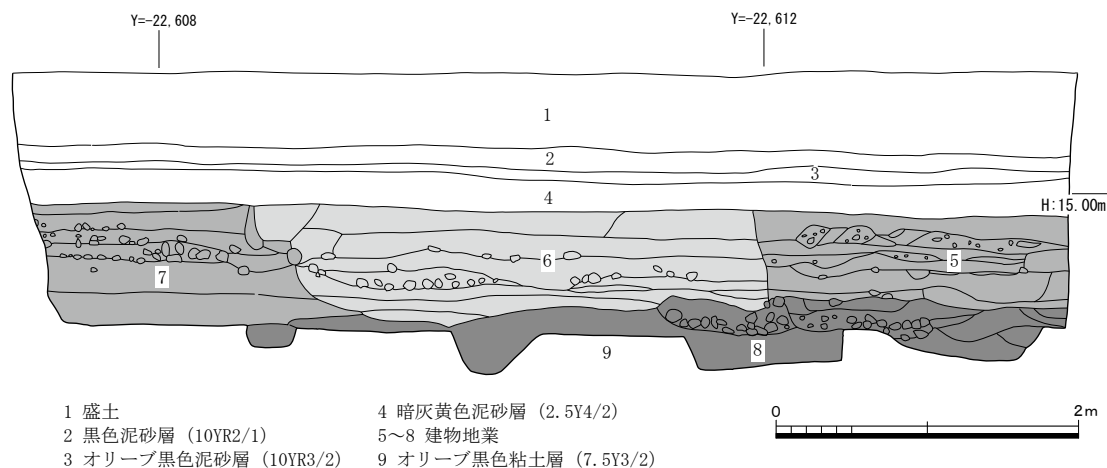


図58 南壁断面図 (1:50)

の調査区の中に、境界の不明瞭な部分もあるものの、地業の区画が9単位ほど認められた。こうした土の違いは、玉石層まで掘り下げた時点でさらに明らかとなった。また、区画によって玉石の密な部分と粗の部分のあることがわかった。地山面では整然とした溝や不定形の溝および地業の区画に使用したと思われる杭が打ち込まれた状態で出土した。

地業構築の順序について調査区南壁断面図をみると、まず始めに、地山に溝を掘りこむ。これは湿地帯にあって地業を構築する際、少しでも

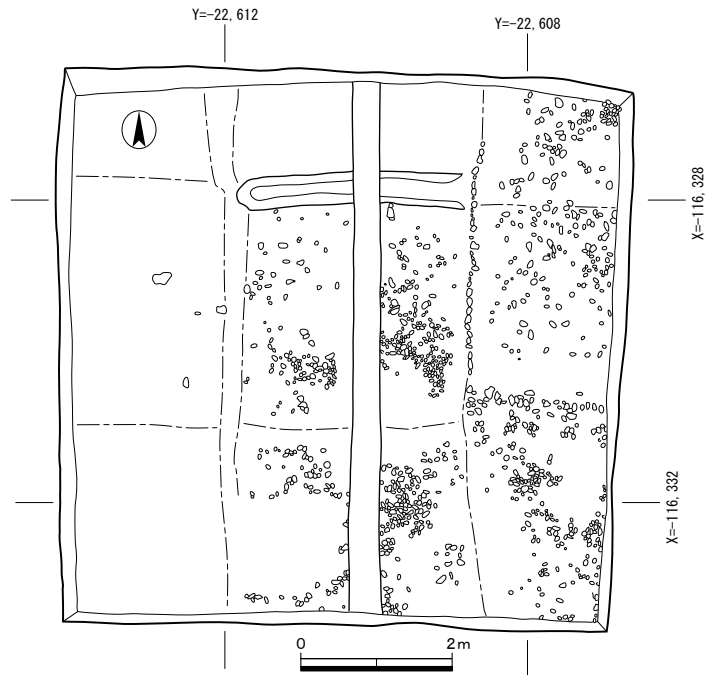


図 59 遺構平面図 (1:100)

地下水を排除しようという工夫であろう。特に調査区の西側では、地山の色がオリーブ黒色に変色しており、長く低湿地帯であったことを物語っている。次に地山上に粘土や礫を盛る（8層）。調査区西側のような湿潤の激しい箇所には玉石を多く盛っている。次に調査区東側の区画部分を粘土と玉石で互層に積んで版築する（7層）。次に調査区中央部の区画を砂泥と玉石の互層による版築で構築する（6層）。最後に西側の区画を粘土で版築し、ところにより砂礫との互層で構築する（5層）。6層と5層の境があまりにも垂直なため、版築を行う際、板で土留めをしたのであろうかと推測したが、杭の痕跡らしきものを検出することはできなかった。こうして、東から西に向けて、1丈ごとに粘土と玉石、あるいは砂泥と玉石の互層による版築で地業を構築したとみられる。また、区画によって玉石が密であったり、粗であったりするという状況は、その区画が作業時における工人一人当たりの担当範囲であったことの反映ではなかろうか。

遺物 遺物は整理箱にして4箱ほどで、土師器・瓦・木片・杭・木簡などが地業層中より出土している。土師器は少量の杯・皿で、小破片ばかりである。瓦は丸瓦・平瓦とも段瓦で焼けひずんでいる。木片は自然の木片に混じり、人工的に加工を施したものも出土しているが、用途は不明である。杭は2箇所で地山に打ち込まれた状態で検出され、丸杭と角杭が出土している。これらは地業を構築するにあたっての区画を表すのではないかと考えられる。

木簡は地業最下層の地山より10cm上において、文字の書かれた面が下になった状態で出土した。残存長(391 + 84) mm、幅44mm、厚さ6mmで上端部が圭頭形、下部の一部を欠損するが下端部は尖る。検出状況などから復原した長さは約56cmである。墨書の剥落がひどく、文字の細部については判然としないが、「讚□国五十 × 」と判読できた。^{註1}

前半の文字は「讚岐国」であろうか。文字の下部に付された「×」印は記号的なものと考えられるが意味は不明である。

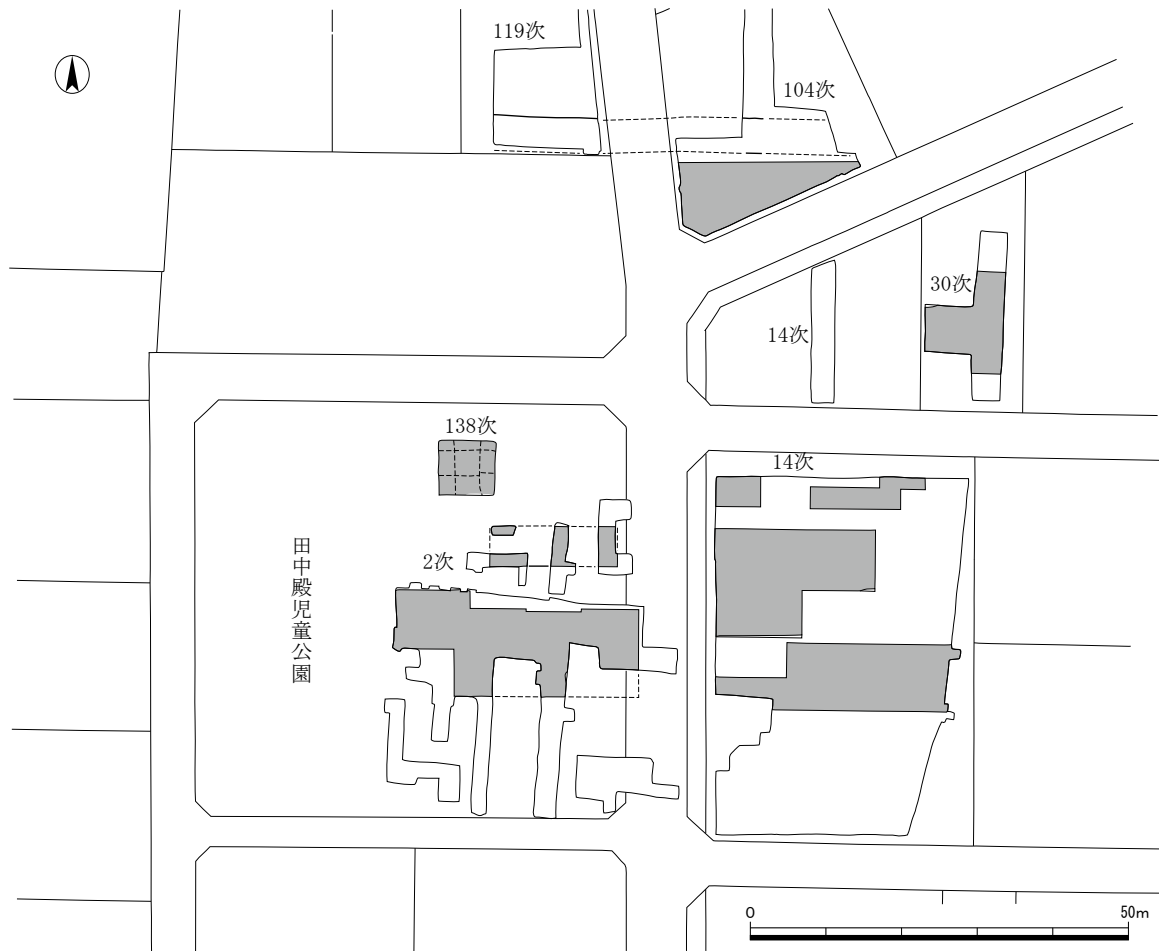


図60 調査区配置図 (1:1,000)

小結 今回の調査では、調査範囲が狭く、遺構を解明するには面積的に制約があったといえる。地業の構築方法についてもこれだけの限られた資料から考察できることは少ないが、「讃岐国」と書かれた木簡の出土は成果であった。出土地点から考察すると、この木簡が田中殿の地業に関連する意味を持ったものと考えられ、讃岐国が関与していたと解することもできる。

今調査で出土した焼けひずみのある瓦は、田中殿跡一帯の調査で認められる^{註2}。瓦窯本体は検出されていないが、溶着した瓦や焼土などから、近辺に瓦窯のあったことは間違いない。その瓦は段瓦と呼ばれる特異なもので、丸瓦と平瓦に段をつけ組み合うように考案された瓦であった。しかし、焼成後には必ずひずみが出ることは避けられず、したがって「遊び」のない瓦となり、屋根に葺くことが非常に困難な瓦となるため、段瓦が盛行することはなかったのである。

木簡の解釈も含めて、今後の周辺部の発掘調査による資料の増加を待ちたい。

(前田義明・会下和宏)

註1 会下和宏「京都・鳥羽離宮跡」『木簡研究』第15号 1993

註2 鈴木久男「鳥羽離宮の瓦」『古瓦図考』ミネルヴァ書房 1989

V 長岡京跡

18 長岡京左京六条三坊・水垂遺跡 (図版1・24～26)

経過 この調査は、平成2年度から継続して実施している京都市清掃局の埋立処分地拡張事業に伴うものである。今年度はE・Dブロックの調査を計画し、Eブロックには3箇所(E1～3区)、Dブロックには1箇所(D区)の調査区を配置した。このうちE1～3区は古墳時代、E1区とD区は長岡京期の遺構を対象として調査を実施した。

遺構 検出した遺構には大別して古墳時代と長岡京期のものがある。

古墳時代の遺構 前年に実施したG・Fブロックに引き続き、Eブロック(E1～3区)で水田を検出した。水田はEブロックのほぼ中央付近まで広がり、北部では畦に重複関係がみられる。北部に広がる細長い短冊型の畦をもつ水田が古く、南部の網の目状に広がる畦の水田が新しいと考えられる。新しい水田の畦は地形の等高線と直交して北西から南東方向の傾きを持つが、古い

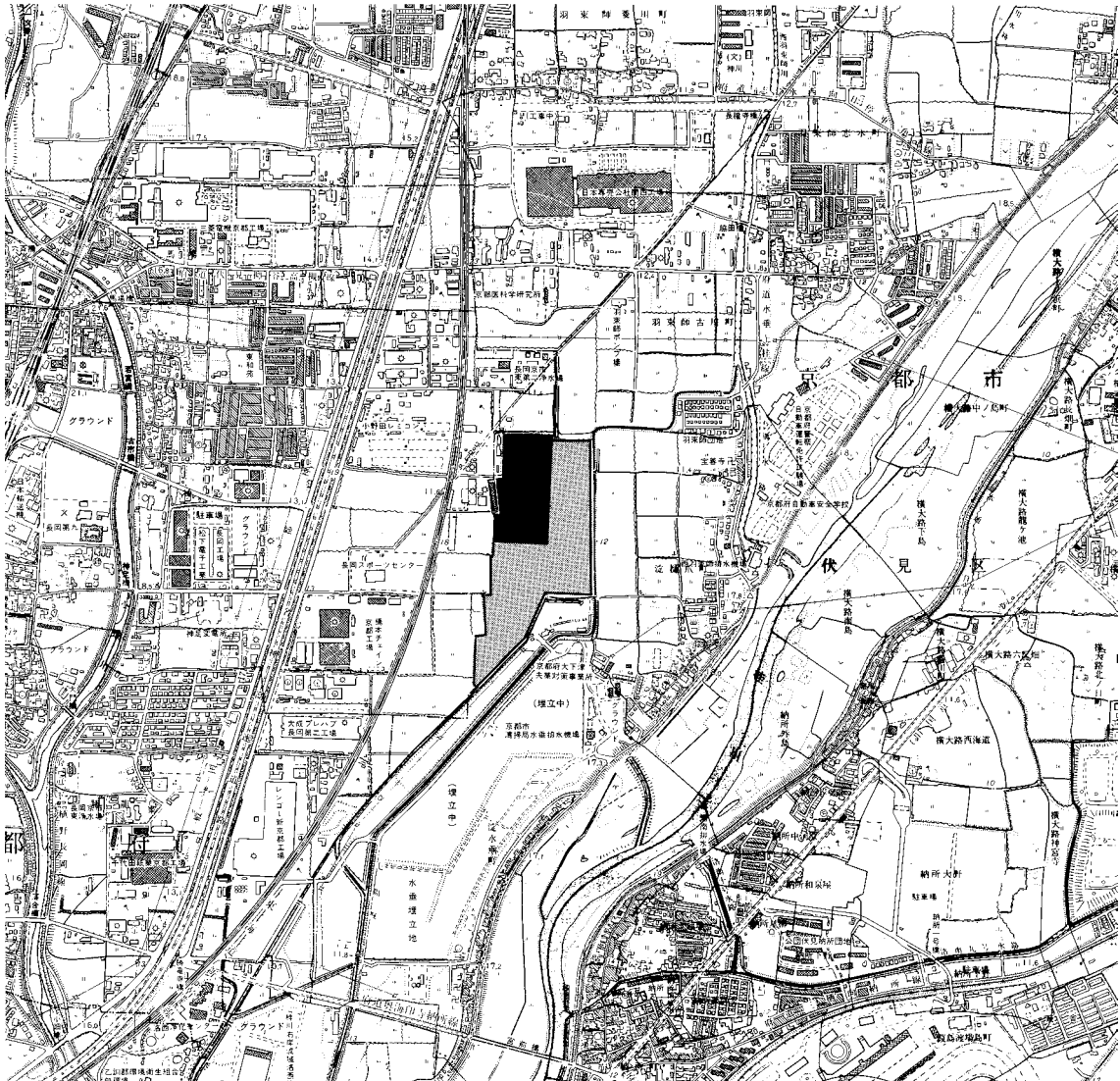


図 61 調査位置図 (1 : 20,000)

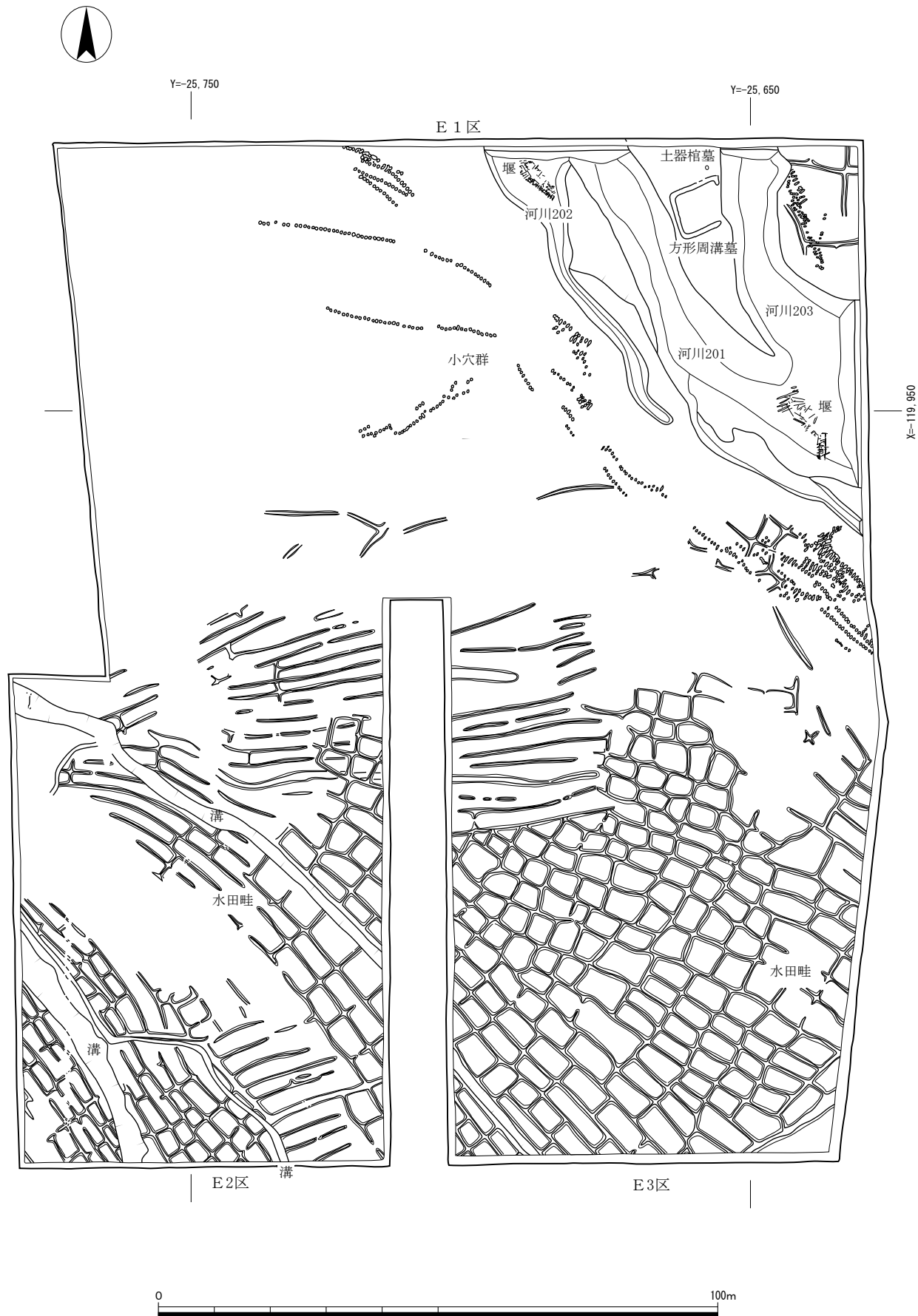


図 62 遺構平面図 (古墳時代) (1:1,000)

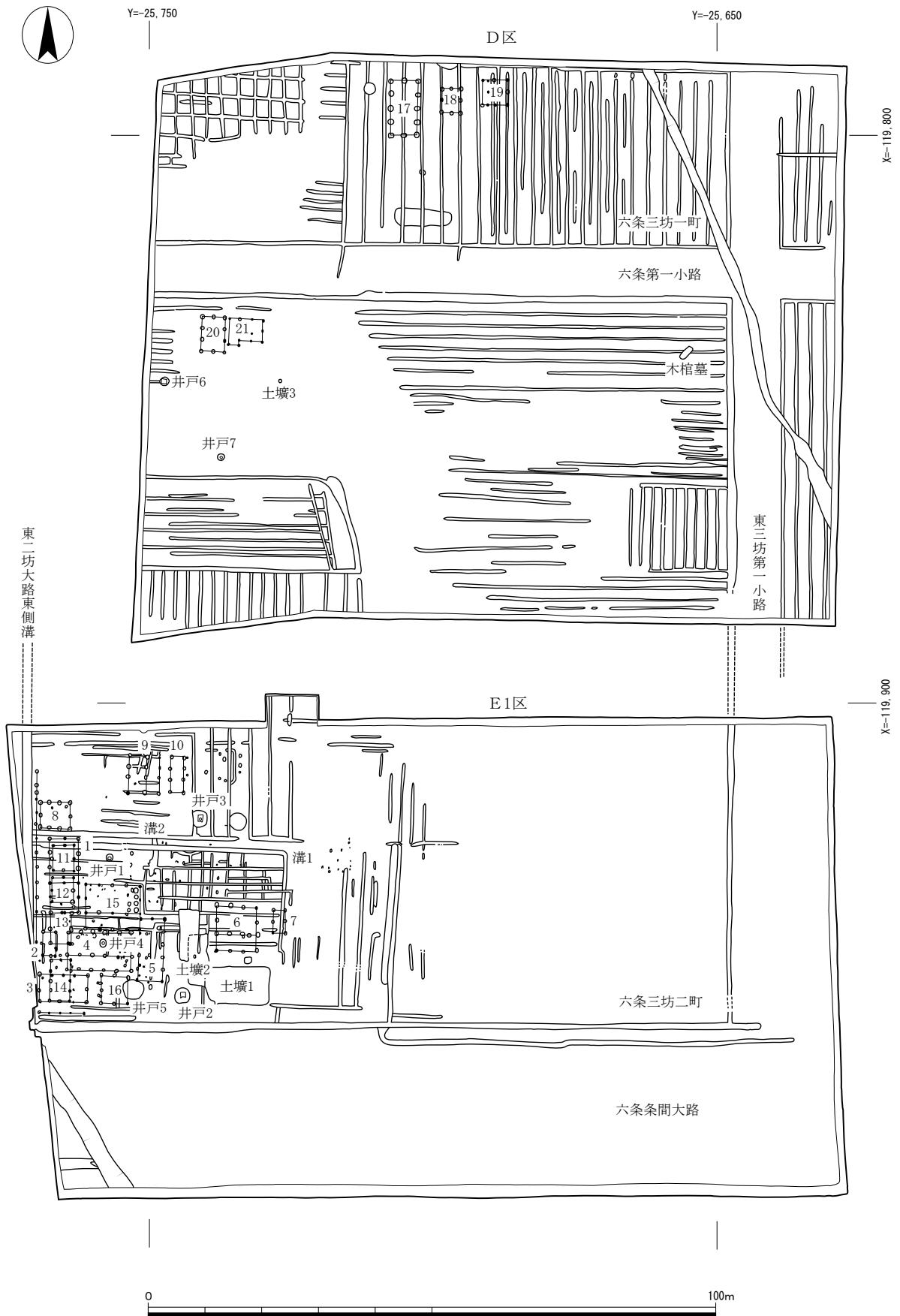


図63 遺構平面図(長岡京期)(1:1,000)

水田の畦はほぼ東西方向の傾きを持っている。水田の中では溝を3条検出しており、流れの方向は新しい時期の水田と同じである。これらの水田も調査区の北部には及ばない。これは地形の高度があがり、水田を営むのに適した湿地帯から離れるからだと思われる。代わって畦畔とほぼ同じ方向に並ぶ小穴群が検出される。この小穴群もなんらかの耕作作業にかかわるものと思われるが詳細は不明である。

調査区の北東部では自然流路3条を検出した。最も東側にある河川（河川203）は庄内式期のもので、ほぼその時期内に埋没している。中央の河川（河川201）は布留式期に形成され、6世紀前半に大規模な洪水によって一気に砂礫で埋められ、その上に6世紀後半の流路が形成されている。埋没した河川（河川203）と接する地点に建築廃材などを使用した木組遺構（堰）が設けられている。西側に位置する布留式期の河川（河川202）では、堰を設けて水流調節を行っている。

方形周溝墓、土器棺墓とも河川（河川201・203）の間の三角地帯で検出した。土器棺は上部を失うが二重口縁の壺を合わせたもので、掘形は長径62.5cm、短径50cmを測る楕円形を呈し、深さは19cmを測る。布留式土器併行期のものである。方形周溝墓は東辺を除く3方の溝を検出した。南北8.5m、東西9.2mの規模をもつ。溝の幅は1.1～1.4mで深さ0.08～0.32mを測る。

長岡京の遺構 E・Dブロック（E1区・D区）で検出した。ここは長岡京左京六条三坊一・二町にあたり、条坊関係の遺構として六条第一小路、東三坊第一小路、東二坊大路東側溝、六条条間大路を検出した。東三坊第一小路と六条第一小路では交差点を検出した。

六条三坊一町内では、一町の東西の中央にほぼ西の柱筋を揃えて2間×4間の南北棟（建物17）が建ち、その東側に2間×2間の建物（建物18・19）が東西に並んで建つ。東側の建物（建物19）は西側柱筋の中央の柱がなく、西と中央との柱間に南北の間仕切り柱列を設けている。

六条三坊二町の北西部では、六条第一小路に沿って2間×3間の南北棟と変則的な配列の建物（建物21）が東西に並んで建てられている。建物の南側には縦板横棧組みの井戸（井戸6）と曲物の井戸（井戸7）が配置され、南東には土壙（土壙3）がある。また、二町の北東部では木棺墓を1基検出している。

南西部では16棟の掘立柱建物を検出しており、全面的に建物の建て替えが行われたことが確認できた。造営時は、区画溝（溝1）によって画された東西45m、南北30m、面積1,350㎡（409坪）を宅地として利用した建物が配置されている。建物は7棟で、東と西のグループに分かれる。西のグループは、南に庇をもつ2間×5間の東西棟（建物4）を主屋として東と北にほぼ同じ柱配置の南北棟（建物5・1）があり、西には1間×2間の南北棟（建物2）、南には2間×3間の東西棟（建物3）がある。建物1・3・5は間仕切りされている。東のグループは、南に庇をもつ2間×3間の東西棟（建物6）とその東にある1間×2間の南北棟（建物7）からなる。宅地内には北に曲物の井戸（井戸1）、南に縦板横棧組みの井戸（井戸2）と土壙（土壙1）がある。

改築後は、宅地は面積そのものは変わらないが東西30m、南北45mとなり、造営時の東のグループは北に移動して、北と南のグループに分かれる。北のグループは1戸主分の面積をもち、2間×3間の東西棟（建物8）と柵を間に挟んで1間×3間の南北棟（建物9・10）が平行に建つ。

これには縦板横棧組みの井戸（井戸3）が付属する。南のグループは南に庇をもつ2間×4間の建物（建物15）が主屋で身舎の東辺には甕の据付け穴が南北に4箇所造られている。主屋の西には、2間×2間の南北棟3棟（建物11～13）と2間×4間の南北棟（建物14）が東と西の柱筋を通して南北に連なって建っている。主屋の南側には2間×3間の南北棟（建物16）が建つ。また、東二坊大路東側溝に沿って柵列が設けられている。素掘りの井戸（井戸4）と造営時の井戸（井戸2）も引き続き使用されている。

また、調査区のほぼ全域で東西あるいは南北方向の小溝群を検出している。これらの溝は建物群よりは新しいと考えられるが、包含される遺物は長岡京期のものに限られる。また条坊の宅地部分に限られ、しかも四行八門の地割りとよく一致するものがある。こうしたことから、一応長岡京期のものと考えておきたい。溝の性格も耕作に関するものと考えられるが不明である。そのほか、断ち割りでの断面観察にとどまったが、弥生時代前期の自然流路も確認している。

遺物 遺物は主に古墳時代と長岡京期のものが出土した。

古墳時代 遺物の大半は河川から出土したもので、庄内式・布留式期の土師器で、器形も比較的豊富である。生駒西麓、瀬戸内などからの搬入土器もみられるようである。木製品も河川から出土したもので、特記すべきものに堰に使用された柱・床材などの建築転用材がある。また、河川（S D 203）から出土した鉄鏝は長柳葉状と鑿頭状のもので、実用品ではなく、古墳などに副葬されたものが流されてきた可能性も考えられる。

長岡京期 遺物は土師器、須恵器などの土器類が大半で、これらの多くは六条三坊二町の建物群の周辺から出土した。このほかに井戸枠に使用された曲物、曲物の柄杓などの木製品もある。

小結 今年度の調査によって明らかになった成果を時代別にまとめる。

古墳時代 G・Fブロックに引き続いて水田を検出したが、今回初めて水田が重複していることを確認した。さらに北部では水田とは異なった耕作に関係すると考えられる小穴群を検出し、当地の農業生産の実体を知る上で重要な発見となった。また、今年度初めて土器棺墓・方形周溝墓の埋葬施設を検出した。

長岡京期 条坊関係の遺構ではG・E・F区に引き続き東二坊大路の東側溝と東三坊第一小路、六条第一小路とその交差点を検出した。しかし、六条条間大路の北側溝は調査区全域で確認したが、南側溝は西端部でわずかに6m分検出しただけである。また、東三坊第一小路も北側のD区では東西両側溝が検出されているが、南側のE1区では西側溝しか検出できなかった。低湿地に面した長岡京の南東部の状況を表したものといえる。長岡京域での「町」内での宅地分割・宅地利用の一端を明らかにすることができたことも成果の一つである。六条三坊二町の場合、南西隅と北西隅に偏って宅地が営まれている。そして、南西隅では建物の重複関係から前後2時期の宅地利用があったことがわかる。造営時は南北30m、東西45m、面積1,350㎡で、3戸主分の宅地を有した。建て替え後も東の建物グループが北の方に移るが、敷地は南北45m、東西30mとなり面積は変わらず3戸主分であることがわかった。（吉崎 伸・木下保明・上村和直）

VI その他の遺跡

19 松ヶ崎廃寺（図版2-1・27）

経過 この調査は京都市立松ヶ崎小学校の給食棟の建設に伴い実施したものである。給食棟の建設計画が立てられたのを受け、平成4年（1992）12月25～27日に試掘調査を実施した。建設予定地内の2箇所で行った試掘の結果、南側の試掘トレンチにおいて東西方向およびそれに取り付く南北方向の石垣の一部を検出した。出土遺物の時期から、この石垣遺構が妙泉寺に関連するものと判断されたため、発掘調査を実施することになった。調査は試掘で検出し

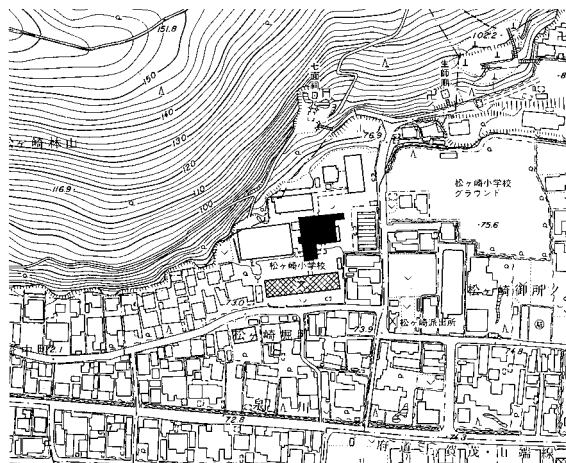


図64 調査位置図（1：5,000）

た石垣と、それによって構成された壇上方部の遺構確認を主眼に進めたが、その経過のなかで石垣列の延長あるいは石垣前面の低地部を濠とした場合に想定される対岸の石垣などの施設を追及して調査区北部、南部および西部に拡張区を設定した。

遺構 この調査で検出した主要な遺構には石垣、溝、土壇、石室、井戸などがある。主要な遺構について概述する。

石垣A 試掘で検出した石垣で、調査区西壁から約13m東西方向に延び、北へ方向を変える。北壁まで約18m検出している。石垣裏側に約1.5m以上の整地土が確認できる。

石垣B 石垣Aに取り付く南北方向の石垣列。拡張部を含め南に約15mまで確認した。

石垣C 南拡張区の石垣B前方に検出した石垣。石垣B付近から北東方向に蛇行する。裏込めには焼土が混じる。

石垣D 調査区北壁付近で石垣Aに付けられた東西方向の石垣。東が北方向に斜行する。今回検出した石垣群のなかではもっとも新しく作られたもので、位置関係からみてもSD24同様、江戸時代に下るものと考えている。

石垣E 調査区西部の南北方向の石垣列。西壁に裏側がかかっていたため、西側に拡張して検出した。

石垣F 石垣Eの前面の低地部がある程度埋まった後にそれに直交して取り付けられた東西方向の石垣。基底部の堆積および裏込めには焼土が混じる。

石垣G 石垣Fの背後に検出した東西方向の石垣。位置や方向は石垣Aにはほぼ揃うが、面が逆である。前面に焼けた壁土と思われるものを検出した。

石垣H 石垣AおよびBの裏込め整地層最下部で検出した石垣の痕跡。石列は南北方向に約5m確認したが、北端で基底部の掘形とみられる段が鉤形に方向を変えており、この部分から東西

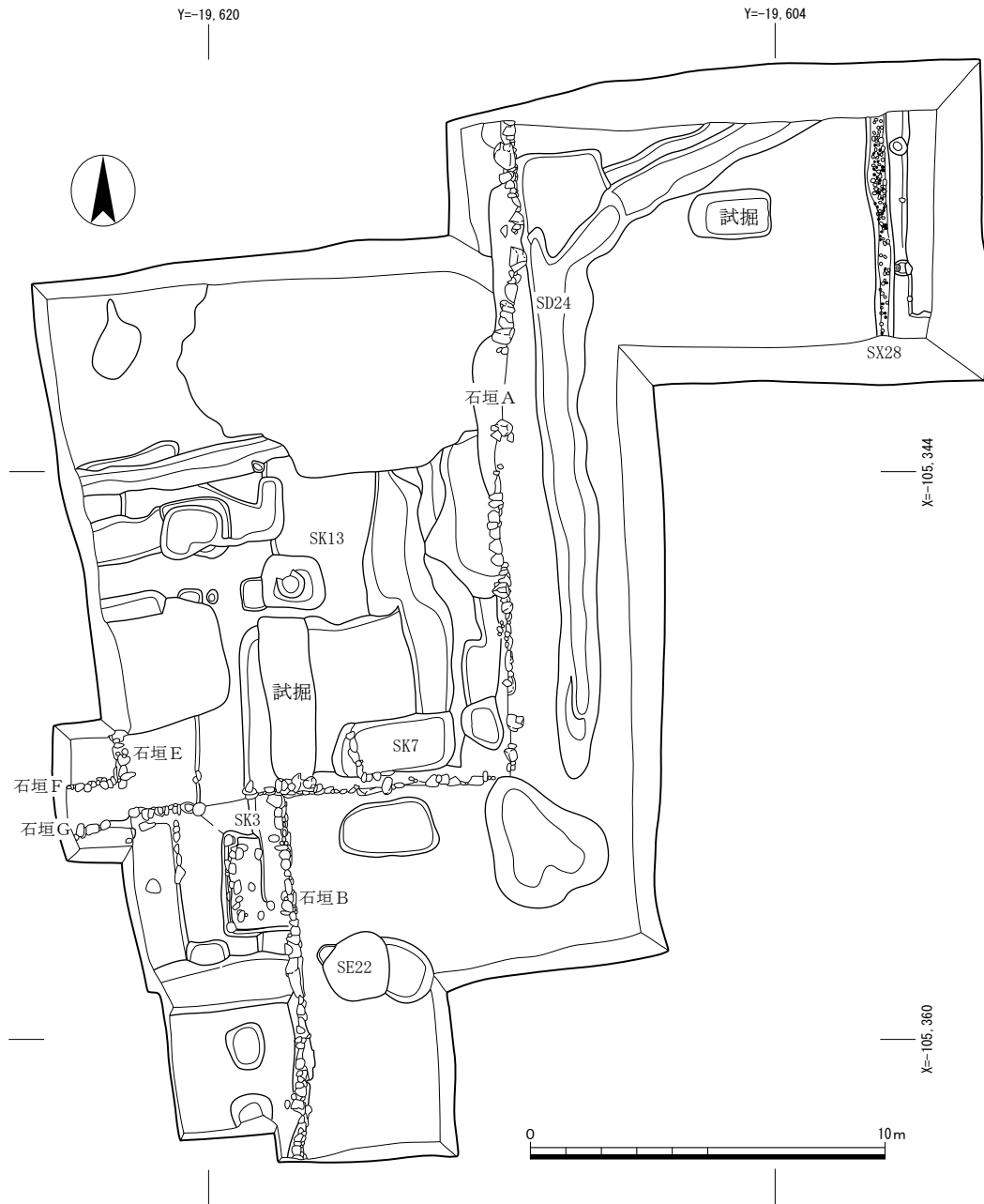


図 65 遺構平面図 (1:200)

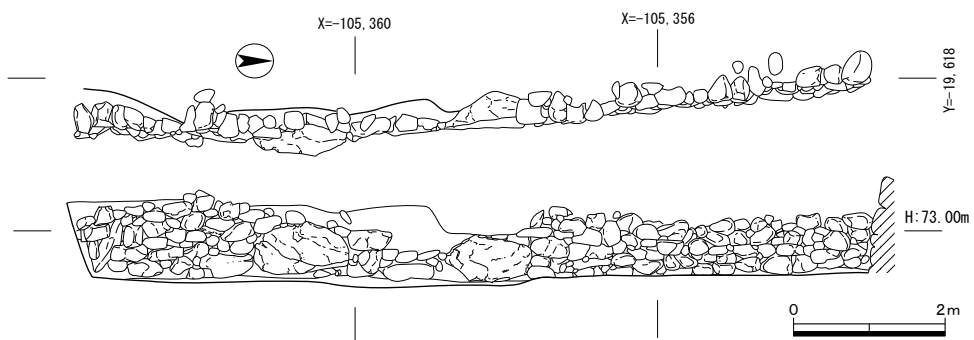


図 66 石垣B実測図 (1:100)

方向に構築されていたようである。

井戸S E 22 石垣B東側に検出した石組井戸。石組みは約2m残存。その下部に方形の木組みがあり、さらに深さ約1mの水溜が作られている。

溝S D 24 石垣A南北方向部に沿って延びる溝。2時期あり、古い段階のものは北部で幅が広くなりとどまる。新しい段階のものは石垣Dに沿って北東に斜行する。掘られたのは石垣Aよりかなり後世で、江戸時代の遺物が出土する。

S X 28 石垣A東方約10mに検出した南北方向の遺構。溝状の掘込みに拳大の石が敷かれている。この部分から東側が一段高いことから石垣Aの南北方向部に対向する石垣基底部の根石の可能性もある。

S X 41・42 S X 41は南北方向の土塁状の高まり。S X 42はその西側の濠状の落込。石垣A裏側の整地層下に検出した。

これらの遺構の時期は、石垣裏込めや整地土層から出土した遺物からみて、S X 41・42が15世紀末頃、石垣A・B・E・Gが16世紀前半代、石垣C・Fは16世紀後半から17世紀初頭に比定できる。石垣Dおよび溝S D 24は前述したとおり江戸時代のもので、17世紀後半代までの遺物を含んでいる。さらに石垣Aの南北方向部も、石垣DやS D 24との関係、修復時の裏込め土から出土した遺物などから江戸時代まで存続していたとみられる。井戸S E 22は出土遺物が非常に少ないが、石垣Cに近い時期とみている。

遺物 遺物は整理箱にして97箱出土しており、その大半が土器類および瓦類である。土器類は各遺構から多く出土したが、桃山時代以前の遺構のものはそのほとんどが土師器の皿で、他の土器類は少ない。土師器は各期の石垣との関連から前後関係を明らかにできるものが多く、室町時代後期から江戸時代にかけての良好な資料が得られた。これらの土師器は現在整理中であるが、石垣が構築され始めた時期から法華の乱直前のものと考えられる。S X 42上部整地層および石垣B裏込め出土のものを図示しておく。江戸時代の土器類は主に溝S D 24から出土しており、種類、量ともに豊富である。瓦類は丸瓦、平瓦が大半を占めるが、石垣A北側の整地層からは平安時代の軒丸瓦、軒平瓦が出土しているほか、S K 11・13などから近世の軒丸瓦、軒平瓦、烏衾瓦、鬼瓦が出土した。

小結 松ヶ崎小学校校地では昭和51年（1976）に校舎増築に伴い、松ヶ崎廃寺を対象にした

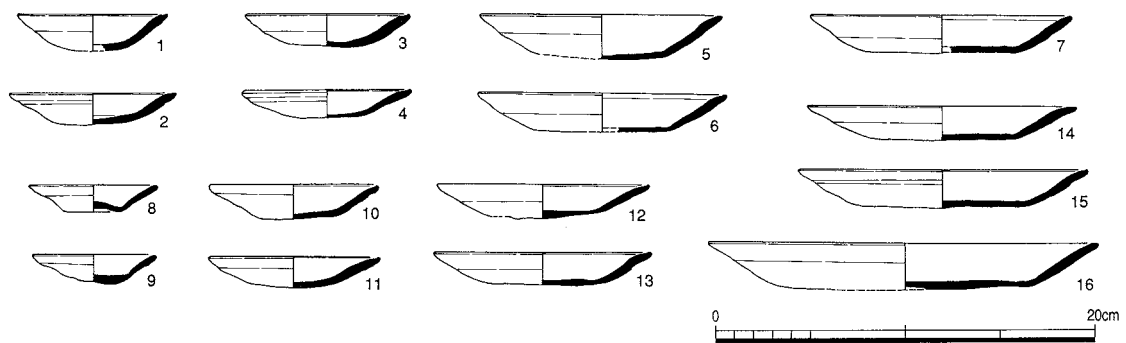


図67 出土土器実測図（石垣B裏込め：1～7 S X 42上部整地層：8～16）（1：4）

発掘調査（校地南側西部）を実施している。この1976年度の調査では、室町時代後半から江戸時代にかけての土壌、井戸や土器、陶磁器、瓦などの遺物を検出したものの、調査区の面積が120 m²と狭小なこともあって、これらの遺構、遺物と寺院との関連は明らかにすることができなかった。

松ヶ崎廃寺は平安時代中頃に源保光により創建された寺院で、当初、円明寺と号し天台宗延暦寺派に属した。^{註1}後に寺名を歓喜寺と変え延暦寺の末寺として続いたが、徳治二年（1307）に当時の住職実眼によって法華宗に改宗し、妙泉寺と寺名を改めた。その後、天文年間には背後の城山に築造されたとされる松ヶ崎城とともに法華一揆の拠点の一つともなったが、天文五年（1535）七月二二日、天文法華の乱の際に山門衆徒の松ヶ崎城攻撃により共に焼失した。^{註2}しかし、天正三年（1575）には日蓮宗妙伝寺の末寺として再興され、寺内には五院の塔頭を構えた。これらの塔頭は明治八年には本寺に合併され、^{註3}さらに大正七年には当松ヶ崎小学校の敷地拡張にあたって、東接する本湧寺（現湧泉寺）に合併された。

今回の調査によって検出したこれらの遺構が天文法華の乱を含む時期にまたがったものであることは明らかで、石垣BおよびGの前面すなわち石垣CとFの裏込めの焼土が天文法華の乱の火災に関連し、石垣B・Gが乱当時の石垣、石垣CとFの築造が天正期の再興期の築造によるものである可能性は高い。また出土遺物の中には平安時代の瓦が含まれており、円明寺あるいは歓喜寺に関連するものとみることできるが、この時期の遺構はまったく検出されなかった。石垣や整地層が北西方向から段階的に敷地を拡張していった過程を示していることから、妙泉寺の前身であるこれらの遺構は今回調査地のさらに北西部に遺存している可能性が高い。

なお、石垣の遺構は上述したように天文法華の乱との明確な関連が認められ、その歴史的な価値を判断して保存が計られるべきと考え、その旨を京都市埋蔵文化財センターに提案した。同センターと教育委員会との協議、検討の結果、予定地の面積や地形などの制約から建設地の移動や設計変更は不可能で、現状保存には無理があるとの結論が出された。そこで学校内という条件付きで移築保存案を提出したところ、遺存状況の良好な石垣AおよびBの一部を新設建物の外装部分に移築することについての了解が得られている。

（平尾政幸）

註1 「中納言源保光卿供養松ヶ崎寺、号円明寺」『日本紀略』正暦三年（992）六月八日条

註2 「法花衆打廻、卯刻松ヶ崎城落ちる」『鹿苑日記』天文五年（1536）七月二二日条

註3 「本府教部省に稟定シテ府下松ヶ崎妙泉寺塔頭止静・宝泉・宝成・大乘・玉禪ノ五ヶ院を同寺ニ合併ス」『松ヶ崎妙泉寺塔頭の合併について』府庁文書明治八年（1875）十月十日

20 植物園北遺跡 (図版2-1・28)

経過 京都市交通局により高速鉄道烏丸線（市営地下鉄）の北山駅から宝ヶ池駅への北進工事が計画された。植物園北遺跡のほぼ中央から東端にあたる北山駅から松ヶ崎駅間の北山通はオープンカット工法により工事が行われることになった。昭和61年（1986）にも同様に下鴨中通以西の北山通を対象に発掘調査^註が行われており、当該範囲にも遺構が道路面下に遺存している可能性が考えられた。このため、下鴨中通以東の北山通約850m間を対象に、道路中央を部分的に占有して東西に長いトレンチを設けて調査を行うことになった。調査は、当初8箇所のトレンチ（1～8トレンチ）を設定し、随時2箇所の調査を並行して行った。その後、前記8箇所の調査成果により、新たにトレンチ3箇所（9～11トレンチ）を設けて追加調査を行った。なお、7・8トレンチについては遺跡外であるが、植物園北遺跡の東端の状況を把握するために調査を実施した。

下鴨中通以東の北山通は造成の際にかなり路面下の土の入れ替えなどが行われたようであり、路面部分の下層は深く地山が削られ、中央分離帯の下層部分に幅0.5～1.0mで遺構面が帯状に削られずに残るといった状況であった。1～6トレンチについては東西20m×南北4mの調査区を当初の計画どおり設けた。中央分離帯部分のみに遺構面が残存していることが判明した後に設けた7～11トレンチについては、その南北の幅を中央分離帯の幅である1m前後で設定した。

遺構・遺物 5トレンチ以西については類似した層序を示す。中央分離帯の下では路面下0.3～0.5mまでが道路造成時の盛土層であり、この盛土層は西へ行くほど薄い。盛土下に旧耕作土層の残るトレンチもあるが、黄褐色系の砂泥層や砂礫層からなる地山に達する。一方、6トレンチ以東については、道路造成以前の地形が現路面よりもかなり深く、道路造成時の掘削が地山までは届いておらず、路面下0.5～1.0mまでが盛土層、以下0.1～0.3mの厚さの旧耕作土層、0.2～0.4mの黒褐色泥砂層（弥生時代後期から古墳時代の遺物包含層）があり、地山に達する。検出した地山の上面の標高は、西端の1トレンチが70m前後で、東へ緩やかに傾斜して、最も低いのは11トレンチで66.5m前後となる。東端の8トレンチでは68m前後と再び高くなっている。

前述したように、大部分のトレンチで中央分離帯の下のみ削平されずに残った幅0.5～1.0mの範囲で、遺構面である地山が残存しているといった状況であった。

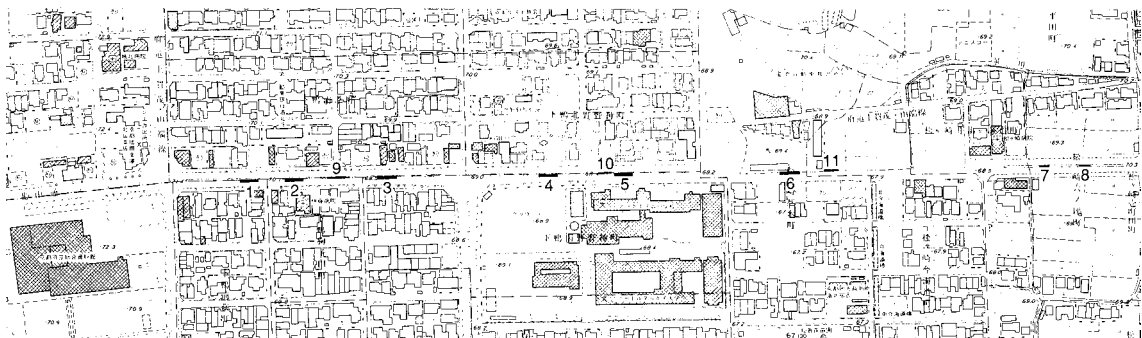


図68 調査位置図 (1:7,500)

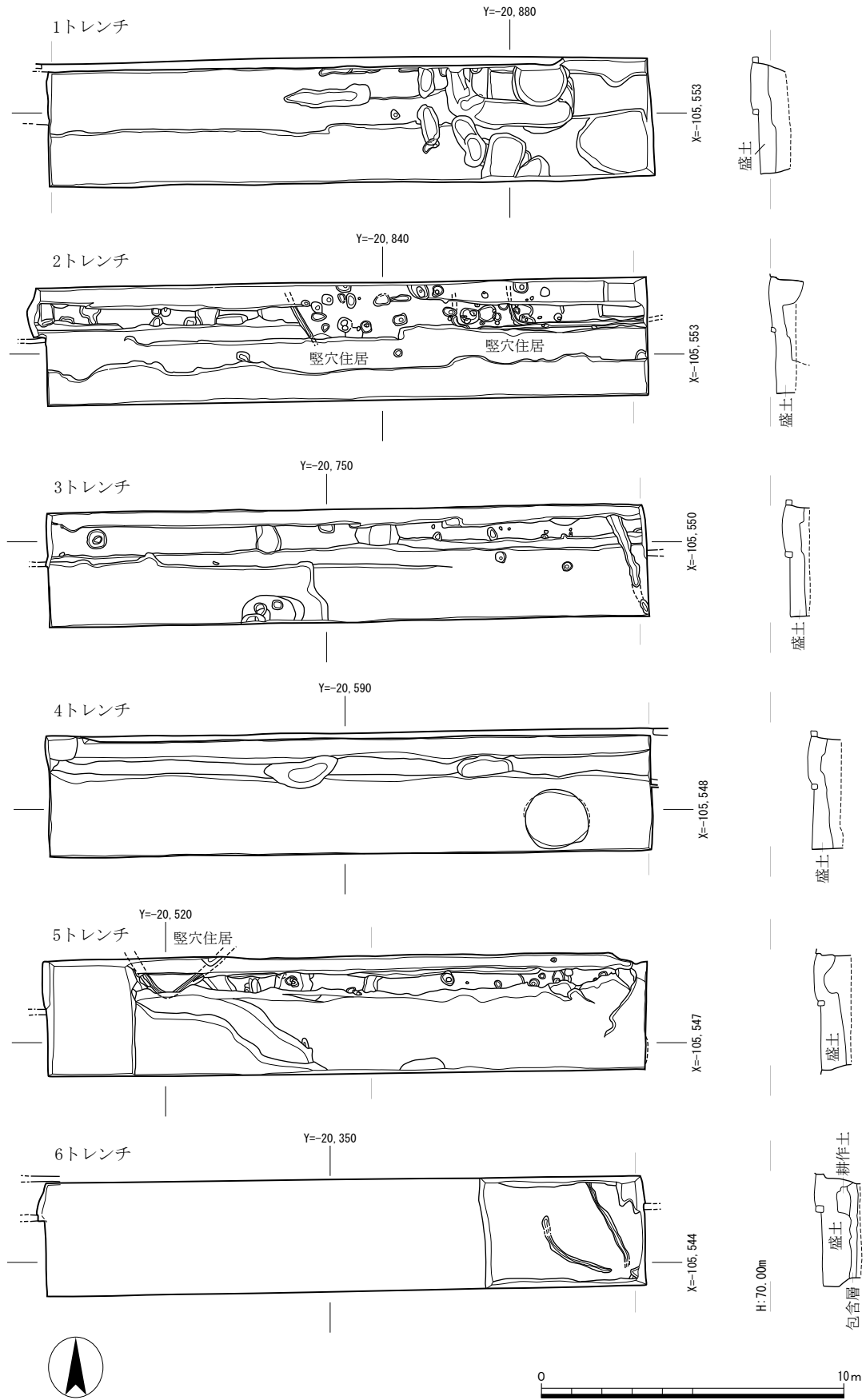


図 69 遺構実測図 (1:200)

主要な遺構としては、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代以前の溝、弥生時代後期から古墳時代の遺物包含層、鎌倉時代から室町時代の柱穴、江戸時代以降の耕作に伴う溝・肥溜などがある。

遺物は整理箱に11箱あり、上記遺構・包含層などから弥生土器の小片や古墳時代の土師器・須恵器をはじめ、中世・近世以降の土師器や陶器などが出土している。

弥生時代後期の竪穴住居は2・5トレンチで検出した。2トレンチでは中央分離帯部分の削平が著しく、壁溝と考えられる溝や柱穴・貯蔵穴などは断片的にしか検出していない。しかし、それらの関係を整理すると、少なくとも3棟分の竪穴住居が確認できた。5トレンチでは竪穴住居の南コーナー部を検出した。検出面での規模は南東辺・南西辺ともに約1m、深さ約0.1mであった。検出した範囲では床面は良好に遺存しており、壁溝も全周し、南東辺では貯蔵穴を検出した。いずれからも弥生土器の細片が出土している。

古墳時代以前の溝は、3トレンチで北西から南東方向を示す約3.5mを検出している。遺物はほとんど出土しなかったが、埋土の状況などから古墳時代以前と判断した。

弥生時代後期から古墳時代の遺物包含層は6トレンチ以東の各トレンチで確認している。特に、6～11トレンチにかけては他と比べて地山の標高が最も低く、地山は泥砂と礫の互層からなっており、その上に包含層（黒褐色泥砂層）が形成されていることから、ある時期この付近は湿地であったと考えられる。遺物は弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器などが出土している。

鎌倉から室町時代の柱穴は、2・3・5トレンチなどで検出した。いずれも建物を復原するにはいたっておらず、遺物も土師器の小片が少量出土したに過ぎない。

小結 本調査では、北山通造成時に遺構面がかなり深く掘削されていたため、良好な調査成果を得ることはできなかった。しかし、残存部の調査によって、弥生時代後期の竪穴住居や鎌倉から室町時代の柱穴などを検出することができた。

また、調査範囲が遺跡のほぼ中央から東端および遺跡外に及んだため、遺跡の立地に関しても一定の見解が得られた。つまり、5トレンチ以西の地域は、部分的に砂礫からなる箇所もあるが、緩やかに西から東へ傾斜する比較的安定した地山（黄褐色砂泥層）に立地している。6トレンチ以東の地域はちょうど賀茂川扇状地の東端にあたる地域で、湿地状の堆積がみられた。遺跡外の調査となった東端の7・8トレンチは再び地山の標高が高くなっており、東の高野川の扇状地の西端にあたるものと考えられる。この7・8トレンチでも弥生時代から古墳時代の遺物包含層を検出しており、周辺に当該期の集落跡が存在する可能性が指摘できる。

（高橋 潔・高 正龍）

註 小森俊寛・原山充志・長戸満男「植物園北遺跡」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989

21 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園（図版2-1・29）

経過 今回の調査地は鐘樓の部分にあたる。鐘樓の傷みが激しく石積みが緩んできたため修理することになり、それに伴い発掘調査を実施する運びとなった。調査区は鐘樓の範囲に限定し、盛土層は小型重機で除去した。江戸時代後期と室町時代の遺構面を検出し、調査区北側に沿って溝が認められ、幅と深さを確認するために一部拡張した。

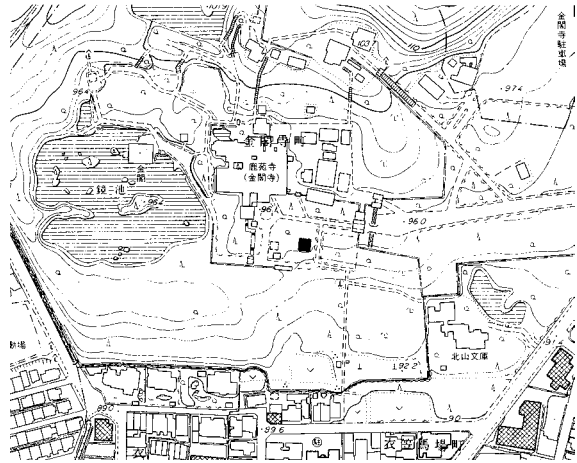


図70 調査位置図（1：5,000）

遺構 江戸時代の遺構には、鐘樓の建てられる前に掘られた調査区の大部分を占める土壌がある。南側の肩部が調査区外に延びるが、東西7.5 m、南北5 m以上の大きさで深さは0.7 mを測る。堆積状況を断面で観察すると、瓦と褐色砂泥層や黄褐色泥砂層が互層となり、北西から瓦を投棄したことが明らかである。陶磁器も多く含まれる。

室町時代の遺構は江戸時代の土壌で攪乱されていたが、東西溝・土壌・落込を検出した。溝5は調査区の北端で検出したが、北側の肩部が調査区外にはみ出しているため一部北側へ拡張した。幅が1.5 m、深さは1.0 mを測り、断面はV字形を呈する。

土壌や落込に削平されず、わずかに鳥状に残った箇所、平安時代中期の浅い土壌4を検出した。径が10～20cmの石とともに炭や焼土が認められた。

遺物 遺物は江戸時代後期の土壌から出土した陶磁器類が大半を占めている。陶磁器類は日常雑器がほとんどで、土師器皿は底部内面に沈線を施したものがある。陶磁器の底部や高台に墨書が認められるものがあるが、かなりくずした文字であることや墨が消えているため判読しがたい。室町時代に属する遺物には土師器や瓦がある。土師器皿はいずれも小破片で量も少ない。平安時代中期の遺物もわずかで、土師器皿・緑釉陶器碗・灰釉陶器碗・黒色土器碗の小破片がみられる。

小結 今調査では現鐘樓の下層より、江戸時代後期の大きな廃棄土壌を検出したが、これによって埋土が軟弱な状態になっており、その上に鐘樓の石積みが築かれた結果、石積みが緩んできたことが明らかとなった。鐘樓からは天保十年（1839）の棟札がみついているため、土壌は天保十年以前である。調査区の北辺で検出した東西方向の溝5は区画を示す堀と考えられる。平安時代の土壌や包含層も検出できるため、西園寺邸以前を探るうえで重要な地点である。

（前田義明）

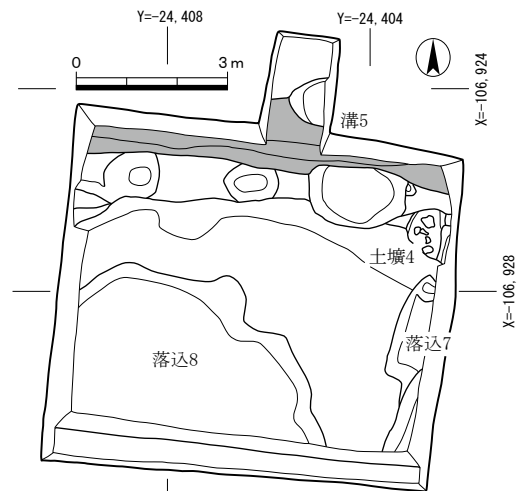


図71 遺構平面図（1：150）

22 史跡大覚寺御所跡 (図版2-2-30)

経過 西部第二排水区西部(第二)系統嵯峨(その29)公共下水道工事に伴う発掘調査を実施した。調査地は右京区嵯峨大沢町地先、大覚寺と覚勝院(大覚寺子院)にはさまれた道路部で、下水工事の竖坑部の3箇所である。

遺構・遺物 No.1は大覚寺参道にかかる西側の位置にある。アスファルト直下、南北方向の石列と堺石と思われる遺構を検出した。以下は褐色砂礫層(10YR5/4)の無遺物層となる。No.2は大覚寺勅使門前の位置にあたる。現地

表下20cmで褐色砂泥層(10YR5/4)の無遺物層となる。この面で黒色泥砂層(10YR2/1)が入る不定形の土塊状遺構を数基検出した。埋土内には遺物はみられず、遺構の形状と堆積状況から根痕と思われる。No.3は有栖川にかかる大覚寺橋の西側の位置にあたる。No.3の遺構面はNo.1・2と比高差があり、現地表下0.7mまで盛土である。この下層から1.5mの間に堅く締まった層が5面確認された。いずれの面も粘土や小礫で叩き締められ路面状を呈している。この第5面で南北溝を検出した。幅1.2m、深さ0.8mで北西部には石組みの一部と思われる石が2列残存していた。溝内から江戸時代の瓦が出土した。路面下層のオリーブ褐色砂礫層(2.5Y4/3)で落込2の東肩部を検出した。幅0.7m以上、深さ0.4m以上を測る。埋土より室町時代の土器器皿が出土した。

小結 No.1・3で検出した堺石や路面は現在の道が拡幅される以前のもので江戸時代までさかのぼることができる。溝1は付替えられた有栖川に関連するものと思われる。室町時代の落込2は調査範囲が狭いため遺構の性格は不明である。(小松武彦)

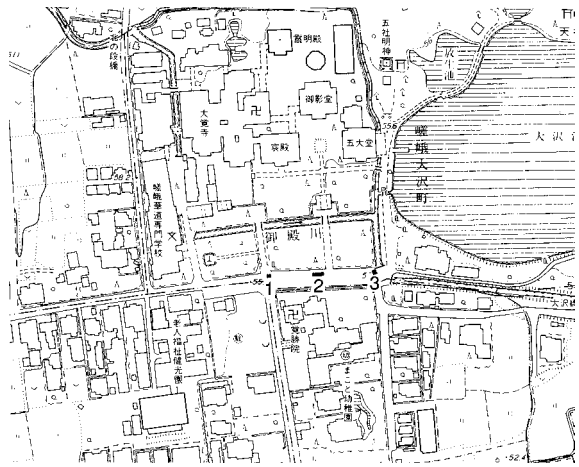


図72 調査位置図(1:5,000)

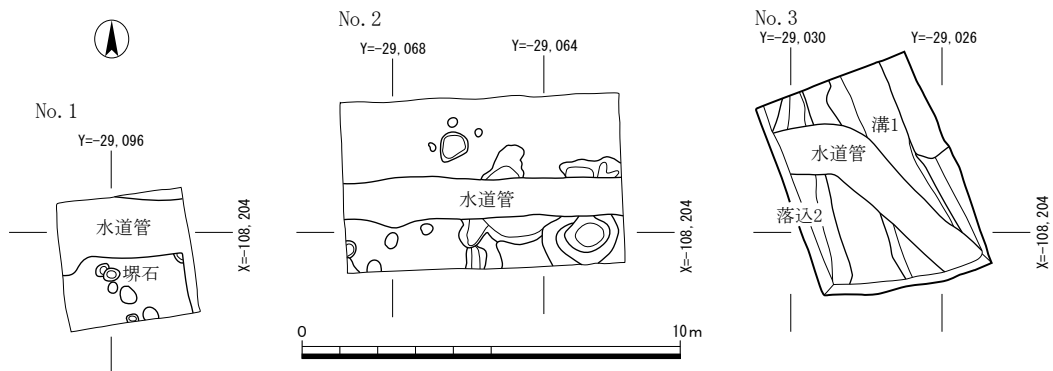


図73 遺構平面図(1:200)

23 史跡名勝嵐山（図版2-2・31・32）

経過 調査地は渡月橋から釈迦堂へ通じる南北の直線道路に接しており、古来風光明媚をもって知られる嵐山の中心部に位置している。調査地は14世紀の半ばに完成した天龍寺の旧境内にあたるが、平安時代には嵯峨天皇皇后橋嘉智子（檀林皇后）の創建になる檀林寺、桃山時代には大堰川を開発した角倉了以の居所が付近にあったとされている。

調査に際しては、敷地の東半部は既存の建物によって攪乱を受けており、遺構の検出が望めないため、これを避けて西半部に調査区を設定した。現代盛土を機械力によって掘り下げて調査を開始し、以後は手掘りによって遺構検出を行った。

遺構 基本土層は、現代盛土層が約20cmで、以下は江戸・室町時代の遺物包含層が複雑に堆積しており、無遺物層はオリブ褐色粘質泥砂層である。地表面から無遺物層までの深さは北で約60cm、南で約10cm、平均の標高は37.0～37.3mである。

今回の調査では、鎌倉時代および室町時代の大規模な東西方向の濠状遺構を2条、石積み地業2基の検出を中心として、多数の土壙、柱穴などを検出した。そして、天龍寺およびその周辺の遺構についての指標を得ることができた。

鎌倉時代の遺構には濠2がある。これは幅1.5m、深さ1.1mで、検出長は22.5mにわたる。断面は逆台形を呈している。埋土は大きく2層に分層できる。上層は地山混じりで、下層は若干泥土質で水が通っていたことを示している。

室町時代の主要な遺構は、濠1、地業1・2がある。濠1は濠2の北側に平行しており、その規模は幅2.7～4.6m、深さ1.2m前後である。断面は逆台形を呈している。濠1の北側では顕著な遺構は認められない。濠1の埋土は大きく3層に分層でき、上層は砂泥層、中層は砂層、下層は泥土質で、中層の時期では比較的速い流れであったと考えられる。そしてこの層から土器(主として土師器皿)が多量に出土している。また上層では人頭大の石が濠の南肩部に集中しており、精査の結果、投棄されたものと判断できた。濠の南肩でトレンチの西端から約2.7mにわたって石垣を検出している。これは3段分約40cm残存しているが、粗雑な石組みであるとの印象を受ける。

地業1は一辺4.8mの矩形を呈する遺構である。遺構検出面では拳大の石が散乱しており、若干量の石を除去したところ、方形の石積み地業であることが確認できた。石積みは30cm以上であることが判明した。そして地業の底部には、四隅および約0.9～1.2m間隔で0.3～0.5mの上面が偏平な石を据えている。地業の平面・断面を観察したところ、大きな石を基準として施工

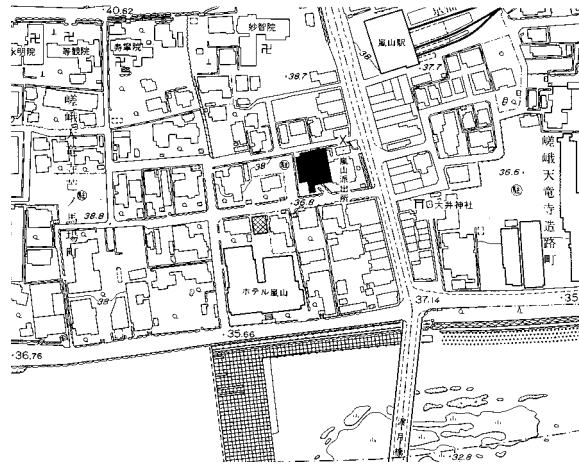


図74 調査位置図（1：5,000）



図 75 遺構平面図（鎌倉時代から室町時代）(1:200)

のブロックとしていることが明らかとなった。

地業2は調査区の南端で北辺部を検出したのみで、南半部は敷地への進入路造成のために削平を受けていた。検出規模は一辺約9.5mを測るが、東端は後世の遺構によって攪乱を受けていたため確定できない部分もある。検出した遺構は、西半部ではほとんど底部に近く、ベースの上に小石が敷かれているだけで残存状況は良くなかった。東半部は幅1.9m、深さ0.2mの溝状の落込を確認し、最下層では西半部と同様に小石を敷き、その上に人頭大の石を据えて地業としたとみられる。

これらの遺構はいずれも西で南へ11～12°振れており、互いに関連しているか、規制を受けていたものと考えられる。現時点では、地業1・2は規模や構築状況からみて、土蔵などとするのが妥当と考えている。

他に、底部に偏平な石を据えて礎石とする柱穴を数多く検出している。土壌には、SK296・1061・117などがある。SK296は50×60cmのほぼ方形を呈しており、中央には羽釜を据え、周囲には径10cm程度の石を置き焼土が充填されている。羽釜の中には骨片などは認められなかつ

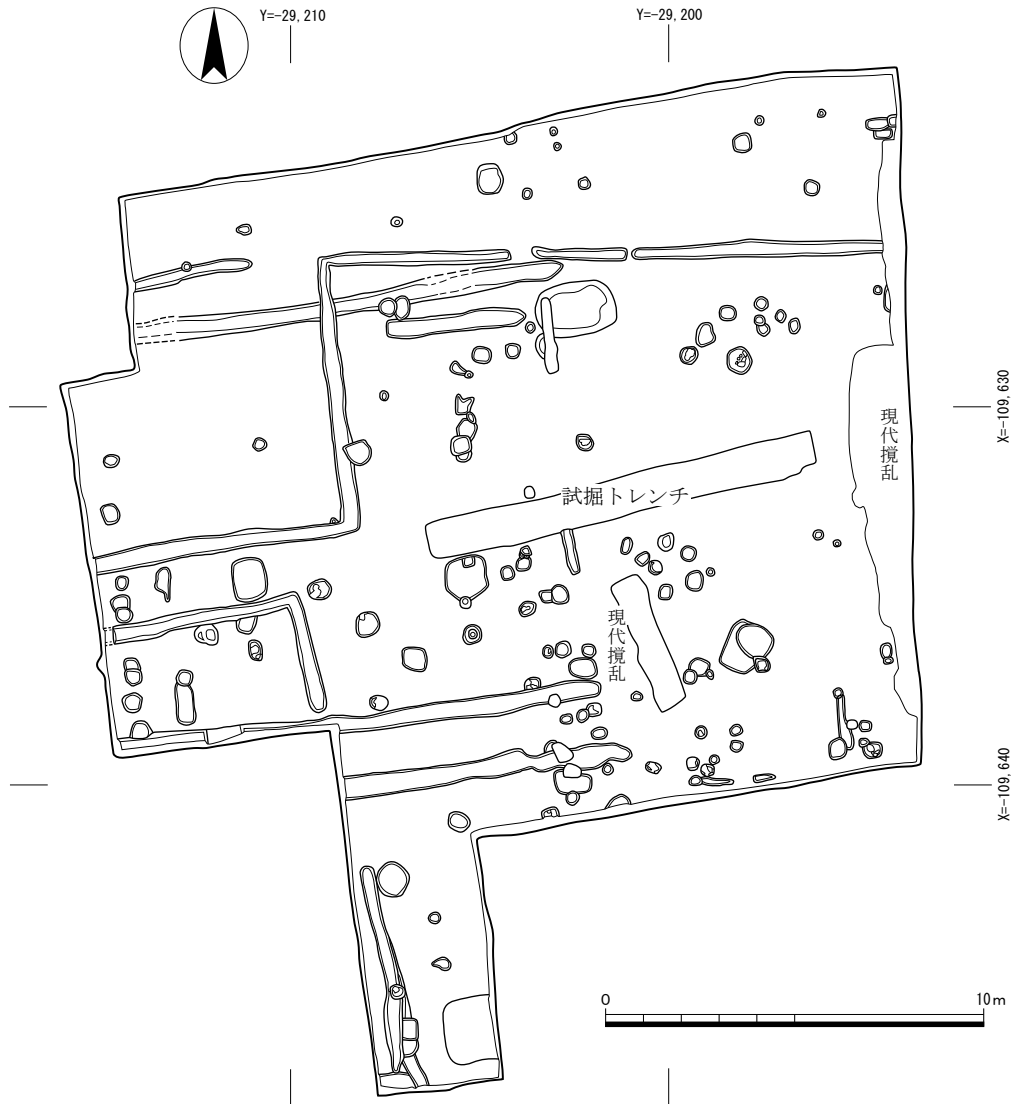


図 76 遺構平面図（江戸時代）（1:200）

たが、何らかの意図をもって埋置されたものであろう。S K 1061 は地業 1 の南に位置している。上層は炭を含む泥土があり、下層には土師器皿が多量に出土している。S K 117 からは室町時代の土器と共に焼土や赤化した壁土が多く出土する。天龍寺が焼亡した後、後始末のための土壌であろう。

江戸時代の遺構のうち、溝は並行していたり鉤状になっており、建物を区画する施設であったと考えている。柱穴も組み合わせてみると、一棟以上はあると思われる。

また掘形が一辺 30cm 程度の方形の柱穴を検出するが、これに対応する遺構を検出することができなかったため、その性格を推定することはできない。時期については遺構の形状から平安時代と推定できるが、埋土からは瓦、土師器小片が出土するのみで、時期を特定することはできなかった。

遺物 平安時代の遺物は土師器皿、須恵器小壺、石帯などがある。主として濠 1・2 から出土しているがいずれも混入品である。特に濠 2 では埋土の上層からは、出土する遺物の大半が平安時代全般にわたる状況であった。遺物は磨耗していないため、近辺に平安時代の遺構があった可

能性をうかがわせる。地業2の溝状遺構からも平安時代の遺物（土師器皿・瓦など）が多く出土している。鎌倉時代の遺物は、濠2の下層からであり、出土量は少ない。室町時代の遺物は、出土量の大半を占め、特に濠1から多量に出土している。江戸時代の遺物は、区画溝、柱穴、土塋などから出土するが比率的には少ない。

遺物の種類も土器類は土師器皿が大半を占めており、鉢、杯などもある。陶器、磁器類も若干量出土しており、輸入品も少量であるが確認できる。陶器のうちでは天目茶碗の出土が目立つ。瓦器は釜、鍋、碗などがあるが、土塋からの出土が多い。土器のなかには、天目茶碗の底部、陶器の茶碗に、「林」、「大□」銘や花押などの墨書を施したものがある。また土師器皿の中央部に穿孔を施したものもある。

瓦類は比較的少ないが、なかに「天龍□」の銘文がある軒平瓦が1点出土している。濠1の南肩の石が集中するところでは輒の出土が比較的多くあった。

石製品は濠1から出土した石帯のほか、滑石製羽釜、石臼、硯などがある。金属製品には、形状や用途などが不明な銅製品、釘、銭貨（宋銭）などがある。

小結 濠1・2は土地区画のための施設と考えられる。その理由としては北側では顕著な遺構が認められないことにある。そのため調査区北端部は宅地としての利用はなく、道路であったのではないかという推測が得られる。

濠以南は宅地部であることが明らかとなっている。検出した遺構、遺物を検討してみると、蔵とみなし得る地業や掘立柱建物を検出しているが、塔頭・僧坊といった寺院と直接関連する遺構の存在は考えにくい。出土遺物も生活雑器が中心となっており、仏具などの出土は認められなかった。『天龍寺文書』の絵図には、調査地と考えられる位置に「在家」と書きこまれているため、調査地は天龍寺の一角としての旧境内というより、天龍寺の門前地か門前町の萌芽的な形態を示すものではないかと考えられる。

地業1・2の検出は、その性格については詳細な検討を要するが、その構造から重量物を支える建物であったことは間違いない。

今回の調査は土地区画と宅地内部の構造の一部が把握できたが、断片的なものである。『天龍寺文書』に残された絵図（「往古諸卿館地之絵図」、「応永鈞命絵図」、「臨川寺領大井郷界畔絵図」など）と調査結果を検討してみると、おおむね信頼できることが判明した。そのため今後は調査データの蓄積を基に、これらの絵図などを利用して「天龍寺」もしくは「嵐山」の全体像の復原を行う必要があるだろう。

(久世康博)

24 南春日町遺跡 25～27次調査 (図版2-3・33)

25次調査

経過 調査地は大原野南春日町の北西部にあたり、大原野神社から南東250mの地点に位置する。当地は畑で小字名は「久保田」と称されている。調査地一帯の地形は北西から南東にかけて緩やかに傾斜する台地で、当地はその高所にあっている。標高は106mである。南側に社家川が流れ、北は大原野神社参道につながる東西道路に接している。昭和59年(1984)の大原野地域一帯での試掘調査では当地に5箇所のトレンチを設定して実施した結果、1箇所

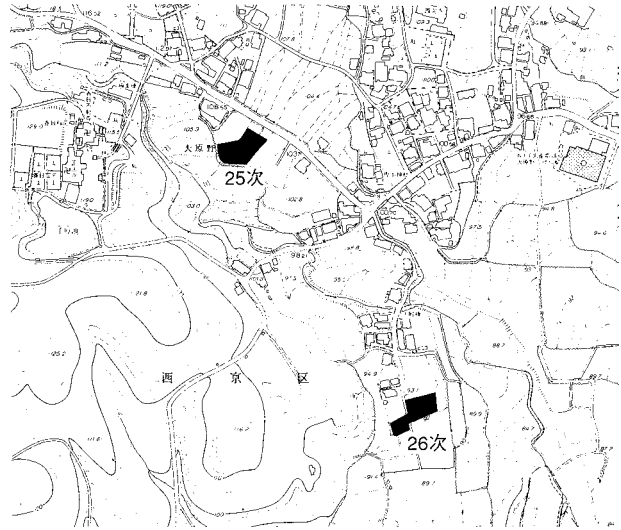


図77 調査位置図 (1:7,500)

で平安時代から中世の遺物包含層と時期不明の焼土を検出した。そのことにより当トレンチ周辺に当該期の遺構・遺物の存在が予想され発掘調査の対象地となった。

遺構・遺物 調査区南端部で平安時代中期の土壌を1基検出した。試掘調査で検出した焼土は当土壌に伴うものであった。平面の形状は長円形で、その規模は南北1.3m、東西0.8m、深さ0.3～0.5m。埋土は暗灰色砂泥。土壌内から土師器、黒色土器、緑釉陶器が、またそれらの土器類とともに、炭化物も出土した。

東半部では河川を検出した。幅5～7mで、深さ1.5m以上。埋土は大きく2層に分かれ、両層とも礫が主体で砂、シルトも混入し、下層では人頭大の礫が多く認められた。河川はさらに調査区外に延びる。

出土遺物は整理箱に2箱あった。遺物はほとんどが土器類で、わずかに瓦が出土している。土器類には土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、陶磁器、瓦器がある。調査区南端部に堆積する遺物包含層と土壌から出土した。

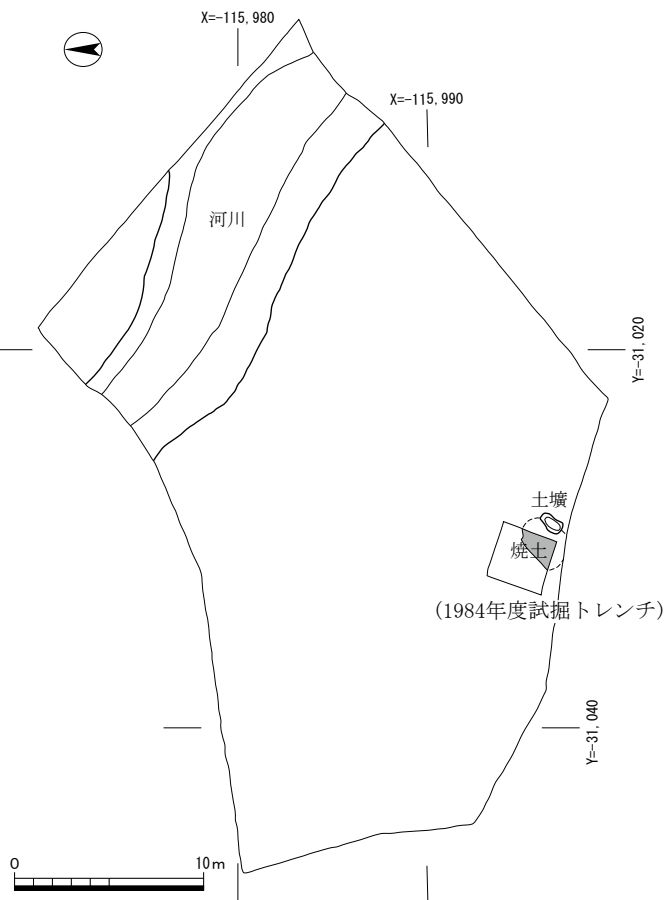


図78 遺構平面図 (1:400)

土壌内からは土師器皿・甕、黒色土器A類椀、緑釉陶器皿が出土した。土師器皿にはいわゆる「て」字状口縁の皿が多く、完形品も認められる。

小結 調査地は、社家川の左岸にあたる。南側は川に向かい急激に傾斜しており、傾斜地には棚田が形成されている。調査地に南接する地区で24次調査を行い平安時代から中世の池状堆積を検出している。本調査地はそれより高所にあたることから建物などの居住を示す明確な遺構を予想したが、平安時代中期の土壌、時期不明の河川、平安時代から中世の遺物包含層の検出にとどまった。土壌、包含層をいずれも調査区南端部で検出し、それより北の全域については明確な遺構は検出できなかった。その要因については、中世の棚田造成期に調査地一帯は大きく改変がなされ、南端部は斜面に近かったことから、削平が少なく遺構が遺存したと思われる。

(加納敬二・永田宗秀)

26次調査

経過 調査地は水田で、小字名は「川向」と称されている。現地形をみると、当地に接して東に社家川が南流している。社家川を挟んで両側に細長く丘陵が延びている。調査地は右岸の丘陵の中位にあたる。大原野神社から南東約600m、奈良時代の須恵器窯である南春日町窯跡からは南東約250mに位置する。

昭和55年(1980)の大原野全域にわたる試掘調査^註では、当地点で奈良時代の竪穴住居を検出した。住居内から須恵器が多量に出土したことや、その須恵器の中には未製品も多くみられ、また窯跡が近接していることなどから、当遺跡が工房跡であることが判明した。さらに検出地点周辺に関連する遺構の存在を予想した。調査では現地の耕作状況により2箇所^註のトレンチを設定して行った。

遺構・遺物 1トレンチ トレンチ西側には試掘調査で検出した竪穴住居が位置する。基本層

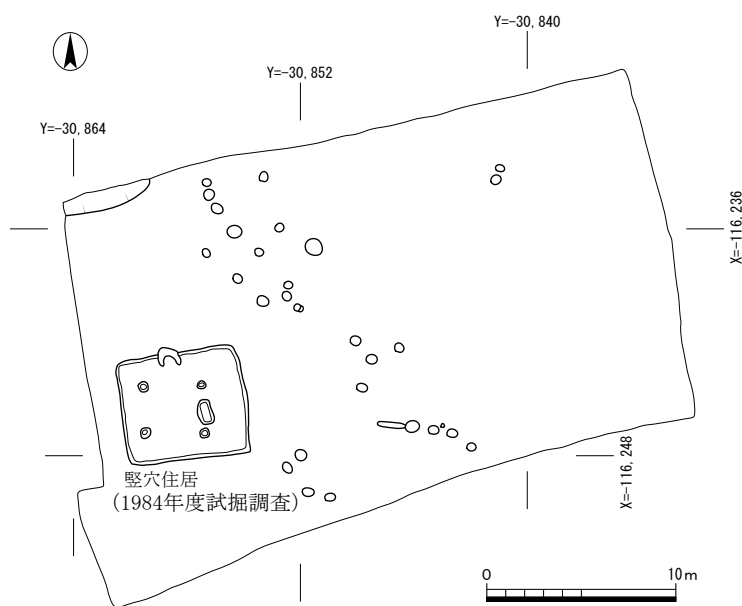


図79 1トレンチ遺構平面図(1:400)

序は上から現耕作土層、床土層、旧耕作土層、旧床土層、褐色砂泥層、黄褐色砂泥層である。褐色砂泥層は奈良時代から中世の遺物を含む遺物包含層で、黄褐色砂泥層は地山である。遺構検出は竪穴住居を検出した地山面で行った。その結果、西半部で中世のピット群、土壌、溝を検出した。東半部については黄褐色砂泥層は消失し、下の礫層が表出している状況で遺構は皆無に等しかった。

出土した遺物は整理箱に1箱であった。ほとんどが土器類で土師器、須恵器、瓦器がある。須恵器は奈良時代のもので、杯、杯蓋、甕がみられ、杯には完形品もある。いずれも包含層から出土した。

2トレンチ 1トレンチの南西にあたる。基本層序は上から現耕作土層、床土層、褐色混礫砂泥層、黄褐色砂泥層である。褐色砂泥層は1トレンチの褐色砂泥層に対応し、黄褐色砂泥層は同一の地山である。遺構検出は1トレンチと同様に、地山面で行った。その結果、南端部で耕作に伴う中世の東西溝を検出するにとどまった。

出土した遺物は土師器、瓦器のいずれも小片で、溝内から出土した。

小結 調査の結果、当初予想していた奈良時代の遺構は検出できず、中世のピット、土壇、溝のいずれも耕作に伴う遺構の検出にとどまった。

今回の調査で竪穴住居検出地点以西および以南には関連する遺構は広がっていなかったことが明らかになった。当時期の竪穴住居が単独ではなく群として存立するという観点からすれば、今回調査できなかった北西部に新たな竪穴住居、関連遺構の存在が求められる。現状は宅地、削平対象外の田畑である。いずれにせよ大原野地域での古代の窯業生産の実態を知るうえで今後も重視すべき地区である。

(加納敬二・永田宗秀)

註 加納敬二・辻 裕司「大原野南春日町遺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度
京都市文化観光局 1986

27次調査（下西代古墳群移築復原）

経過 下西代古墳群は平成元年（1989）3月の16次調査^{註1}で古墳主体部である横穴式石室を検出し、同年6月の再調査である17次調査^{註2}で古墳時代後期の円墳であることが判明した。当古墳を群集墳のひとつとしてとらえ、1号墳としたのを契機に同年10月に新たな古墳確認のため1号墳周辺で試掘調査である18次調査^{註3}を行った結果、1号墳東150mの地点で石室石材を確認し、平成2年（1990）7月の20次調査^{註4}で横穴式石室を検出し、当古墳を2号墳とした。以上の経過により当古墳群は発見された。

大原野地域では数十基の古墳が点在することが知られていたが、いずれも分布調査によるもので、本格的な調査が行われたものはなかった。当古墳群の調査が初例だといえる。調査により1号墳は京都市内で当時期にみられる一般的な形態をもつ横穴式石室であるが、2号墳については同横穴式石室内に小石室をもつ特殊な古墳であることが判明した。

それらのことから当古墳群の重要性が理解され、平成2年（1990）11月に京都府、市、地元の三者で保存についての協議が行われ、その結果、当地点南に公園を造る計画があったことから、公園内に当古墳を移築することになった。ただ面積などの関係から特殊性をもつ2号墳石室を移築復原し、1号墳については残存良好な石材をその補強にあてることになった。

平成3年（1991）9月に移築のための解体調査^{註5}に入り、翌年1月から移築復原にとりかかった。復原作業に際しては解体作業を行った業者に委託し、調査担当者は管理、点検を行った。

復原の指針、実施過程についてのべる。

公園の敷地が狭長なため石室復原のみを主体とした。復原にあたっては、発掘調査時のもとの姿にできるだけ近づけることに注意を払い、石の転落防止、欠石部分の補填、敷石の抜取り防止などのための適当な処置を行い、また公園の景観と合致するように部分的には変更するという指針のもとに行った。

実施過程では、まず石室全体の沈下を防ぐため、コンクリートの基礎を石室底部に設置した。石積みの段階では細部の精度にこだわらず、全体を収めることを重視した。さらに石室石材の裏込めには適宜コンクリートなどで固定しながら行い、また破損の激しい石材については、これに代替できる大きさの石で転用した。復原石室の天端については、安全のために水平な石を補填し、見学可能な状態にした。小石室については、玄室埋土から出土した蓋石と思われる扁平な3石で石室を覆い固定した。

小結 平成4年（1992）3月に下西代古墳群2号墳の移築復原は完了した。また、本年中に公園の整備が実施されることになった。公園の名称は「大原野古墳公園」である。

下西代古墳群は大原野地域の後期古墳を知るうえでは不可欠の古墳群であるといえる。特に2号墳については、横穴式石室はこの時期に京都市内で一般的にみられる代表的なものであるということ、また玄室内に構築された小石室については、全国的にも他に例をみないということから一般性と特殊性を兼ね備えた古墳である。

最後に大原野地域の古代史を知り、考える上での学習の場として、また地域住民の憩う場として活用できる公園の実現を望みたい。（加納敬二・永田宗秀）

註1 加納敬二「南春日町遺跡」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993

註2 加納敬二・永田宗秀「南春日町遺跡第17・19次調査」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

註3 加納敬二・永田宗秀「南春日町遺跡第18次調査」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

註4 加納敬二・永田宗秀「南春日町遺跡第20・21次調査」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

註5 加納敬二・永田宗秀「南春日町遺跡第22～24次調査」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995



図80 下西代2号墳移築復原全景

25 史跡醍醐寺境内 (図版2-4・34)

経過 本調査は、史跡醍醐寺旧境内の南西に位置する醍醐小学校の新グラウンドの建設を契機としている。グラウンド予定地の東端は、東から西に下がる緩やかな斜面となっているが、平成3年(1991)に行った試掘調査の結果、工事によって遺構が削平されることが考えられたため、その部分を発掘調査することになった。また、醍醐寺の西の南門から三宝院に通じる参道の西側には、築地塀の痕跡と考えられる土塁状の高まりが、約70mにわたって南北方向に残っており、この部分に築地塀を修復する計画があるため、これに必要な資料を得るための調査もあわせて実施した。

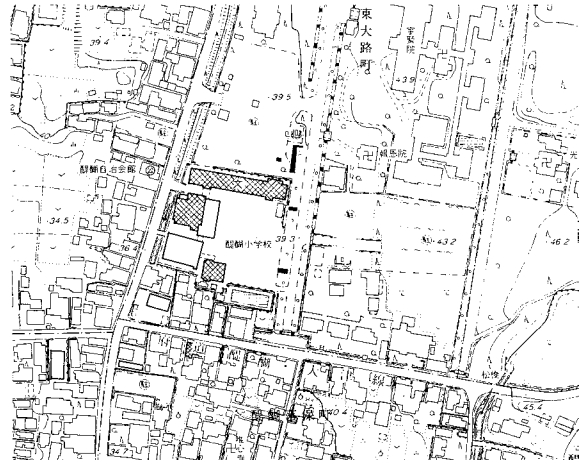


図81 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査区は、グラウンド建設予定地に2箇所、土塁状の部分に3箇所設定した。

グラウンド予定地の東端に設けた1トレンチでは、江戸時代後半の厚さ10cmほどの粘土で囲まれた室状遺構を検出した。南北2.5m、東西は調査区外に延びるため不明である。この室状遺構は、東から西に下がる傾斜地に作られている。この傾斜地を形成している土には、17世紀初頭の遺物が含まれていた。この土を掘り下げると高低差最大1.8mの段差を検出した。この段差は、南へ行くに従い東に回り込む。

3トレンチでは、土塁状の高まりはなかったが、築地塀の基底部と考えられる石列を検出した。

4トレンチは、土塁状の高まりが最も高く約1m残っていた。調査の結果、築地塀の基底部にあたる石列を検出した。この石列は南北方向に基底部両側に並び、東側が2段(高さ40cm)、西側は3段(高さ60cm)積まれていた。2列の石列に挟まれた築地基底部の幅は、1.6mを測る。石は偏平なものが使われており、40cm大のものでも、奥行きは15cmほどしかない。この石列の上には、約80cmの土を盛った状況が確認されたが、築地塀の土にしては粗く築地塀崩壊後、石列の上に土を盛って土塁としたものと考えられる。また石列の東側では、幅80cmの石敷きを検

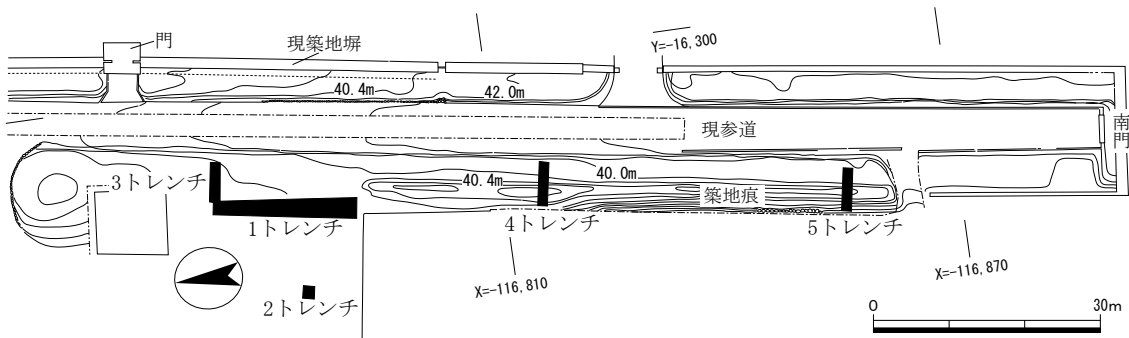


図82 トレンチ配置図 (1:1,000)

出した。築地塀の雨落溝とも考えられるが、ほかのトレンチでは検出されなかった。

5トレンチ 土塁状の高まりに調査区を設けたが築地基底部をなす石列を検出することはできなかった。また、土塁構築土より下層において、築地塀以前の区画施設を確認することもできなかった。

遺物 1トレンチの整地層からは、15世紀代の土師器、瓦器、陶磁器などが出土している。築地塀基底部の石列の構築時期を示す遺物は出土しなかった。この周辺からは、江戸時代後半の塀瓦が出土している。また、4トレンチの石列の上に築地崩壊後に盛られた土塁の構築土からは、文久永寶が出土している。

小結 参道部分の調査では、基底部に石列を施した築地が存在したことが明らかとなった。この築地塀は、幕末までには崩壊し基底部の上に土を盛った土塁に変化していたようである。また築地塀の構築時期は、調査の性格上、基底部を断ち割れないため、明らかにできなかった。

1トレンチで確認された高低差1.8mの段差は、今回の調査地より北へ200mの地点で昭和48年（1973）に行われた修証殿建設に伴う発掘調査でも確認されている。段差は、1トレンチの南端では、東に回り込むため、旧地形に従いながら斜面を削ったものと思われる。段差の西側には、室町時代の良好な整地層が存在しており、この時期に平坦面を得るために、西下りの斜面を削る大規模な整地作業が行われたのであろう。この段差が再び傾斜地形となったのは、17世紀初頭の頃と考えられる。 (南 孝雄・鈴木久男)



図 83 3トレンチ築地基底部（東から）



図 84 4トレンチ土塁断面図（北から）

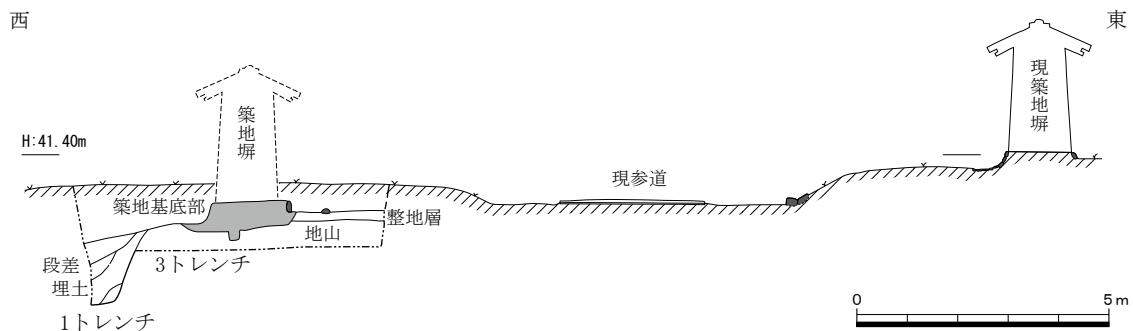


図 85 参道断面模式図 (1:150)

第2章 試掘・立会調査

I 平成4年度の試掘・立会調査概要

平成4年度の原因者負担による試掘・立会調査の件数は、試掘調査が13件、立会調査が13件、計26件である。これらの中には、試掘の結果を含め発掘調査の項で扱ったものや、継続調査のため次年度に報告予定のものがある。また、立会調査では遺構、遺物が全く検出されないものがあり、これらについては改めて項を立てず、試掘・立会調査一覧表（表6）の記載のみにとどめた。その他、文化庁国庫補助事業として継続している京都市内一円の立会調査（表6-27）が430件ある。これに関しては、『京都市内遺跡立会調査概報』平成4年度および『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度として報告されており、本書では省略している。試掘・立会調査（第2章）で扱った項目数は、試掘調査が5項目、立会調査が6項目、計11項目である。

平安京跡 左京二条四坊の試掘調査（1）では、大炊御門大路の南側溝、鎌倉時代から室町時代の柱穴、土壌などを検出した。平安時代から現代までの遺物が多量に出土しており、引き続き発掘調査を実施した。左京九条四坊の試掘調査（2）では、都合4箇所の特レンチを設定して調査にあたったが、注目される遺構の検出はなかった。右京三条一坊では、9箇所に特レンチを設定して試掘調査（3）を行った。朱雀大路西側溝、姉小路南側溝、柱穴、土壌などを検出した。この結果から発掘調査が予定されていたが、原因者の都合で延期されることになった。

長岡京跡 左京三条四坊の下水道工事に伴う立会調査（4）では、沼状の堆積土を検出した。この沼状遺構は近世まで続いていた。左京四条四坊の立会調査（5）では、川を検出したが、顕著な出土遺物の検出はみられなかった。左京九条二坊の試掘調査（6）は、長岡京に関連する遺構、遺物の検出は全く認められなかった。

その他の遺跡 嵯峨院跡に推定されている区域の下水道工事に伴う立会調査（7）で、江戸時代中期から後期の陶磁器の出土をみたが、平安時代の遺構を検出することはできなかった。北に清涼寺、南に天龍寺に近い史跡名勝嵐山の範囲で、下水道工事に伴う立会調査（8）を実施し、小倉池の東部で平安時代から江戸時代までの遺構、遺物を検出した。平安時代の遺構、遺物が集中する区域があり、とくに注目された。同様に、桂川右岸の史跡名勝嵐山の範囲で下水道工事に伴う立会調査（9）でも、平安時代の良好な遺物包含層が検出され、前期の瓦などが出土している。学校建設に伴って、上里遺跡の試掘調査（10）を実施した。試掘特レンチの一部で中世の建物、溝などが検出されたため、この部分については期間を延長し、特レンチを拡張して発掘調査を行った。遺構の範囲が部分的なことから契約関係は試掘調査の延長として位置づけた。桃山時代の向島城跡についても下水道工事に伴う立会調査（11）を実施している。明確な遺構、遺物は検出できなかったが、本丸に関係すると思われる整地層を検出している。（永田信一）

Ⅱ 平安京跡

1 平安京左京二条四坊（図版1）

経過 この調査は小学校校舎の建て替えに伴う試掘調査である。当地は平安京左京二条四坊十一町および大炊御門大路にあたり、平安時代は貴族の邸宅が営まれ、院政期には一時、院の御所が置かれたと推定されているところである。さらに、江戸時代には武家屋敷が造営された記録も残っている。このため古代から近世の各時期の遺構が存在すると予想された。

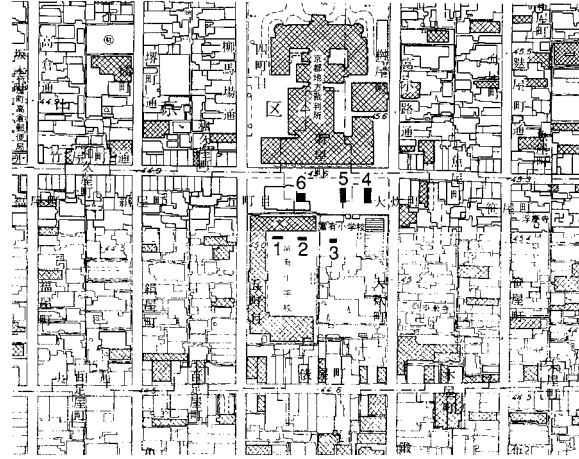


図86 調査位置図（1：5,000）

調査は、本調査に先行する試掘調査のため、個々の遺構についての詳しい検討は避け、遺構の残存状況と土層の堆積状況を確認し、あわせて既存建物の基礎が遺構に与えている影響を探ることを目標とした。調査地は富有小学校構内とその北側の敷地（旧大蔵省用地）に分かれている。このため、調査区を小学校構内に3箇所（1～3トレンチ）、北側の敷地に3箇所（4～6トレンチ）設け、まず小学校構内、次いで北側の敷地の順に調査を実施した。

遺構 遺構は、平安時代から現代までの各時期のものがある。

平安時代の遺構は2～4トレンチで柱穴を、また、4トレンチでは大炊御門大路の南側溝を検出した。大炊御門大路の側溝に比定できるものは複数認められ、改修あるいは宅地内側の溝があるものと考えられる。鎌倉時代から室町時代の遺構は各トレンチで柱穴、土壌などを検出しており、鎌倉時代の側溝も確認している。江戸時代の遺構は各トレンチで柱穴、土壌、井戸、瓦溜などを検出している。このほか、2トレンチでは建物に伴う石垣を確認している。

遺物 出土した遺物も平安時代から近・現代のものまでがある。

平安時代の遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などの土器類と瓦類が出土している。鎌倉時代から室町時代の遺物は土師器、瓦器、陶器などの土器類が出土している。江戸時代の遺物は土師器、磁器、陶器などの土器類と瓦類が多く出土している。このほかに窯体の破片や焼台など窯業に関する遺物が出土しており、また、鏡の鋳型や鞆の羽口など鋳造関係の遺物も認められる。

小結 調査では平安時代から近・現代にいたる多くの遺構・遺物が検出できた。遺構の残存状況は遺構相互の重複関係による破壊はあるものの相対的に良好であった。また、既存建物の部分も基礎が比較的浅い位置にとどまっていることから、下位の遺構は残存している可能性が高いことが確認できた。さらに、京都中心部に特有なきわめて複雑な土層の堆積状況も確認した。

（吉崎 伸）

2 平安京左京九条四坊（図版1）

経過 調査地は、平安京左京九条四坊一町にあたる。調査地の北部では八条大路南側溝、東端部では高倉小路西側溝が推定できる。これを踏まえて調査区は、敷地の東側で南北方向に長い1トレンチを主体に2箇所。その西側に2箇所の都合4箇所にトレンチを設定した。

遺構・遺物 堆積状況はアスファルト・コンクリートなどの舗装を取り除くと耕作土層となる。その直下の灰黄褐色泥砂層を遺構面と判断した。標高は26.6～26.7mを測る。

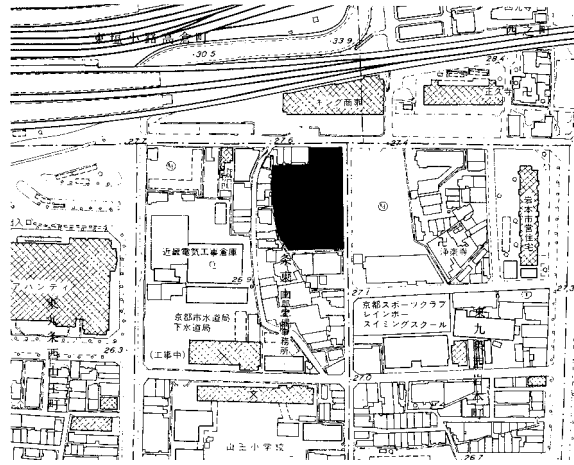


図87 調査位置図（1：5,000）

1トレンチ北端は八条大路南側溝が推定できるが、該当地点は現代の攪乱により地下2m以上が破壊されていた。また、2トレンチでは灰黄色泥砂層上で江戸時代と室町時代の田・畑などの耕作に伴うものと考えられる南北溝および江戸時代以降とみられる柱穴を数基検出した。また、調査地の西半部では灰黄色泥砂層がみられるが、東半部は砂礫層になっている。

遺物は少量であるが、古墳時代から江戸時代までみられる。平安時代の遺物は灰黄色泥砂層などから出土したが、ほとんどが小破片で磨滅している。砂礫層から古墳時代の須恵器が数点出土したがいずれも著しく磨滅している。

小結 調査地は平安時代後期には八条院の所領のうち弘誓院（ぐぜいいん）に推定されている。弘誓院は鳥羽天皇の皇后美福門院の御願寺歓喜光院の末寺として成立し、盛期には河内・摂津・丹後・播磨・淡路で荘園を営んでいた記録が残っている。弘誓院は鎌倉時代の後半頃までは存続したとみられている。室町時代以降は、調査地を含む東九条一帯は、九条家支配の東九条庄に取り込まれている。

調査は、大路・小路推定地点以外にもトレンチを設定し、遺構の検出に努めた。しかし、結果は大路・小路とも、また弘誓院に関連する遺構も認めることはできなかった。（鈴木廣司）



図88 2トレンチ全景（北から）

3 平安京右京三条一坊 (図版1・35)

経過 今回の調査は、旧国有鉄道の清算事業団テナントビル建設工事計画に伴う試掘調査である。調査地は、JR二条駅の南側の空地で、南北230m、東西67mの範囲である。この地は、平安京右京三条一坊三・四町、朱雀大路、姉小路に該当する。なお、三町は「右京職」、四町は「竈殿」に推定される。調査地の東西中央部には朱雀大路西側溝の検出が想定される。

調査区は、朱雀大路西側溝・築地部分に4箇所、朱雀大路部分に2箇所、姉小路部分に1箇所、四町内に2箇所の計9箇所に設定し、調査を行った順に北より調査区1～9とした。

遺構 調査地の基本層序は、上層に旧国鉄時の整地層である砂礫・炭ガラ層が厚さ1.2～1.6m、整地層下に江戸時代の耕作土である灰色泥土層が厚さ約20cmあり、以下に平安時代の遺構ベースである灰色砂礫層、黄褐色砂泥層が堆積する。平安時代の遺構検出面の標高差は、調査区1と調査区9では1.64mあり、南に低くなる。検出した総遺構数は62基で、平安時代の遺構には朱雀大路西側溝、姉小路南側溝、柱穴、土壇がある。室町・江戸時代の遺構には小規模な溝、堀、土壇、井戸があり、堀は西高瀬川である。以下に平安時代の遺構について記述する。

朱雀大路西側溝は4箇所検出した。調査区1・3の側溝は数回流路を変えており、調査区1では幅3.6m、深さ0.6m、調査区3では幅4.3m、深さ0.3mある。調査区6・8では新旧2条の側溝を検出した。調査区6の西側の側溝SD1は、幅1.5m、深さ0.26mあり、埋土は粗砂層の下に黒褐色泥土層が堆積する。東側の側溝SD2は幅約1.5m、深さ0.2mあり、埋土は砂礫層である。調査区8の西側の側溝SD11は、幅1.0m、深さ0.15m。埋土は褐灰色泥砂の均一層である。東側の側溝SD8は、深さ0.1mで、幅約1.7mある。なお、SD8の東側には南北方向の杭列が2条認められた。調査区6・8の側溝はいずれも西側が新しい。また調査区4では姉小路の南側溝を検出した。溝の幅1.1m、深さ0.3mで、断面形状はU字状を呈する。

平安時代の柱穴は3箇所検出した。調査区1では側溝SD1の西肩口より西2.0mで柱穴1基を検出した。柱穴の径34cm、深さ20cm。調査区6では柱穴4基を検出した。いずれも径40cm、深さ20cm前後である。柱間隔は南北2m、東西4mで、2条の側溝を跨ぐかたちである。層位的には柱穴の方が側溝より新しい。調査区8では西側溝SD11の西肩口から西3.5mに南北方向の柱穴を2基検出した。柱間隔は1.6mである。掘形は一辺が55cmの方形で、深さ25cmを測る。

調査区7で検出した土壇SK1は、その東肩口を検出したのみで全容は不明。深さ10～15cmで、埋土は砂礫層で瓦類を含む。また東肩部と西肩と思われる位置に南北方向の杭列を検出した。

遺物 出土遺物は整理箱にして39箱である。大部分が朱雀大路西側溝から出土した平安時代

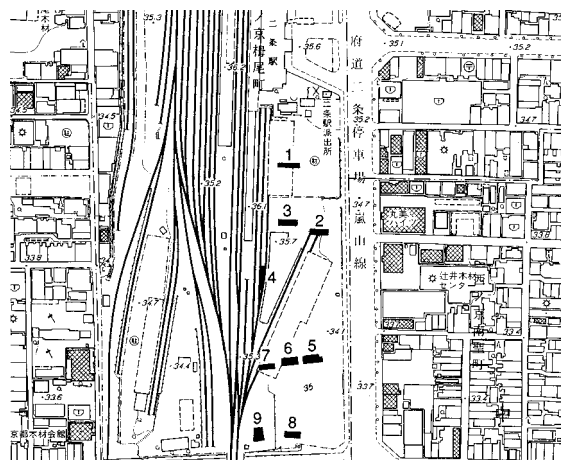


図89 調査位置図 (1:5,000)

の瓦類であり、そのうち軒瓦は2点ある。平安時代の土器類では土師器、須恵器の他に緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、黒色土器、瓦器が若干量出土している。

小結 今回検出した朱雀大路西側溝は、調査区1～8の間が180 mあり、その間に側溝の幅、位置に変化がみられ、姉小路を境にして異なる。調査区1・3では一時的に溝幅は4 m前後の規模となる。溝の西肩口から推定築地心までの幅が約2 m前後で、『延喜式』に記載される幅より狭くなる。姉小路以南の調査区6・8では、明確に2時期の側溝があり、溝位置は調査区1・2より全体的に東寄りで、2条の溝のうち西側が新しい。このように今回の調査では、1町単位で溝の規模、位置が変化することが判明した。また調査区1・8で検出した柱穴は、築地塀との関連性が考えられる。調査区6で検出した平安時代の柱穴は、その性格は不明だが側溝埋没後の施設である。側溝内出土遺物から、朱雀大路西側溝、姉小路南側溝が埋没した時期は、前者が12世紀代、後者が10～11世紀と考えられる。(本 弥八郎)

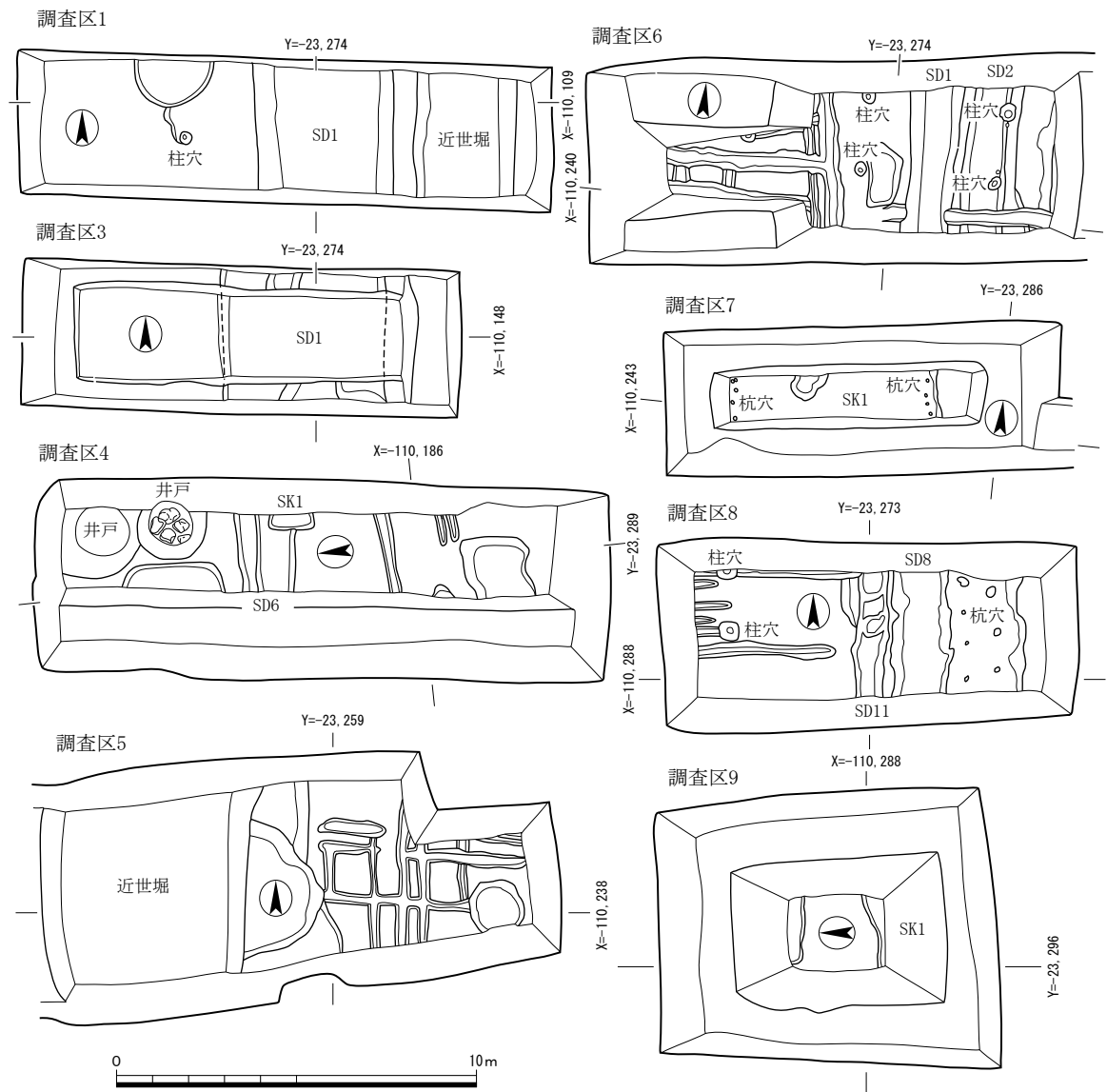


図90 遺構平面図 (1:200)

Ⅲ その他の遺跡

4 長岡京左京三条四坊（図版1）

経過 広域下水道工事に伴う立会調査で、立会区間の一部には、昭和55年度に実施した左京第62次調査地(80 NG-P M)が含まれている。この調査では三条条間小路(大路)や建物および井戸などを検出し、長岡京の東限の町にも宅地班給が行われたこと、また調査地の東部には中世の湿地が広がっていることもわかった。したがって今回の立会調査はその補足と、湿地の範囲の確認に主眼を置いて実施した。

遺構・遺物 工事区間は、東西道4本、南北道2本で実施した。このうち東西方向のうち3本で東に落ちる沼状遺構を検出した。深さ約1.9mまでを確認し区間のさらに東へ延びることがわかった。肩口付近には有機物層の堆積、木片類の混入があり、護岸施設として杭列も確認した。出土遺物がないため明確ではないが、この沼状遺構は近世まで続き、その痕跡を現畦畔の形状に残している。したがって、立会区間の東半部には長岡京に関する遺構はなく、西半部にのみ残存していることがわかった。西半部の状況は、微高地状の地形を呈し、特に三条条間小路(大路)付近が最も高く、黄褐色泥土層の堆積が顕著であった。

小結 前述したように、立会区間は長岡京左京三条四坊に位置しており、三条条間小路(大路)が推定される位置にあたる。住宅地建設当時に一部ではあるが試掘調査を実施しており、大路の両側溝(幅約25m)や建物柱穴、さらに縦板組井戸(方形横棧組)2基などを検出している。この調査区域が、今回の立会区間の西半にあたり、これら遺構が良好な黄褐色泥土層をベースとする微高地に位置していることが明らかとなった。明確な個別の遺構や遺物の確認はないが、その

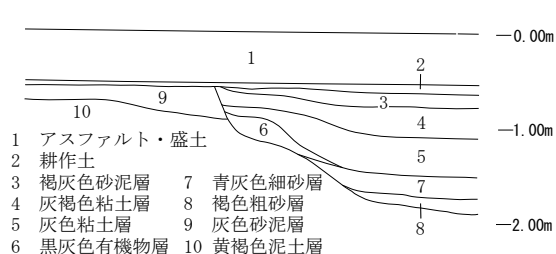


図92 沼状遺構断面模式図(1:80)

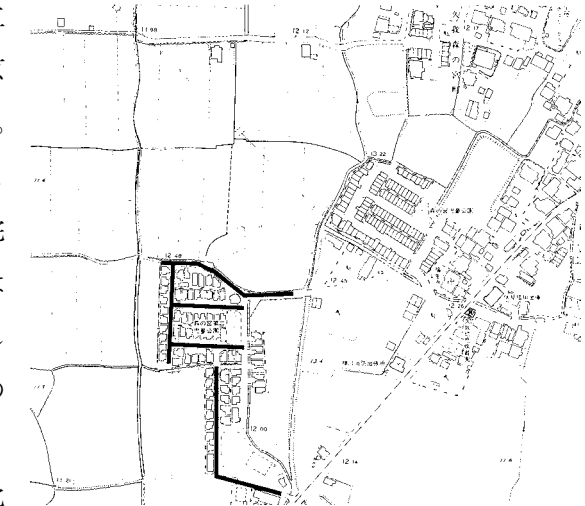


図91 調査位置図(1:5,000)

の状況は当地の北西で実施した工場建設予定地調査(左京第133次調査、85 NG-K S)や西羽東師川拡幅に伴う調査で検出した弥生時代の遺構を検出した状況と変わりはなく、近辺にも同様な遺跡の存在が推定できる。

(長宗繁一)

5 長岡京左京四条四坊（図版1）

経過 広域下水道工事に伴う立会調査である。区間は四条四坊跡の範囲に入ることから調査を実施した。区間の南には、外環状線建設に伴う発掘調査^{註1}が実施されており、長岡京の遺構をはじめとして、弥生・古墳時代や奈良時代の遺構を検出している。特に、奈良時代の遺構は中期頃のもので建物や井戸などの検出があり、集落跡としてとらえることができるものである。

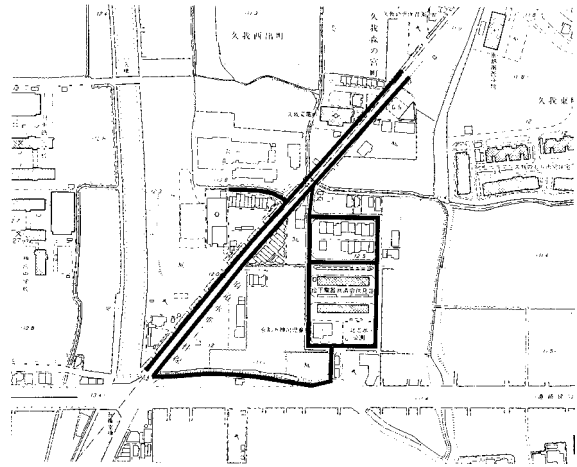


図93 調査位置図（1：5,000）

遺構・遺物 工事区間は、南西方向に通る府道（久我畷）およびこの南東にかけての区域であった。府道の区間は、平安時代頃造られたとされる久我畷にあたるが、近世から現在の道路に伴う盛土層の確認にとどまり、一部人孔部の掘削で表土下2.5 mまでを確認したが、いずれも灰色粘土層の堆積を確認したのみである。一方、この南東区域の住宅街の道路部の掘削では、約2 mの盛土層があり、その下2.1～2.5 mにかけて広い範囲で黄褐色泥土層の良好な堆積を確認した。東西方向に通る府道志水向日町線では、外環状線調査X区で検出した川（奈良時代以降）の堆積がみられ、府道が川の上を通っていることがわかった。顕著な遺物の出土は各区間ともなかった。

小結 久我畷の区間では、路面などの遺構の検出を期待したが、掘削がいずれも現道の端に位置しているためか、平安時代や中世のものは検出できていない。南東区域で検出した微高地は、外環状線X区で検出したものと同じで、微高地が広範囲に広がっていることがわかった。この区域から西には、これまでの発掘調査や立会調査で微高地が各所に点在していることがわかった。また東側は、今回の立会区間の東に南北に流れる西羽東師川支流付近を境にして、桂川などに関係した氾濫堆積が顕著にみられる。この氾濫は、平安時代中期頃のもので厚さ2 m以上に及ぶ砂礫層の流入がみられ、この上に久我東町遺跡や志水町遺跡が成立していることがわかってきた。府道志水向日町線の下を東西に流れる川は、外環状線で検出した古墳時代の遺構を切ることから、これ以降のもので奈良時代には開削されていたものと推定される。この川は、平成元年度に実施した菱川町内の立会調査^{註2}で検出した続きである。菱川町域では平安時代中頃の遺物を含む砂礫層で埋没しているが、志水町域では灰色系の粘土で埋まっており、幅は約20 m、深さは最深で約3 mを測る大河川であることがわかった。（長宗繁一）

註1 長宗繁一・吉崎 伸・鈴木廣司「長岡京左京四条三・四坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991

註2 長宗繁一「長岡京左京四条二・三坊」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

6 長岡京左京九条二坊（図版1）

経過 調査地は長岡京左京九条二坊の推定地である。調査に先立ち、対象地内に10箇所のグリットを設定し遺構の有無を確認した。その結果、対象地全域に遺物包含層があることを確認した。このため、包含層の状況および遺構の有無を明らかにすることを目的に調査地中央に調査トレンチ（南北70m、東西5m）を設定した。

遺構・遺物 調査地の地形は北から南に約50cm傾斜する。中心部の現標高は10.3mである。

基本層序は、上から第1層現代耕作土・床土層（厚さ40cm）、第2層褐灰色泥砂層（堆積土、厚さ40cm）、第3層灰色泥砂層（堆積土、厚さ80cm）、第4層灰色粘土層（堆積土、厚さ1m）、第5層オリーブ灰色粘土層（堆積土、厚さ20cm）、第6層緑灰色粘土層（無遺物層）である。第3・6層表層部はマンガン質が認められ、乾燥した状態を保っていたことが確認できた。

第6層上面は堅く締まり、遺物包含層があることから遺構面と認定した。上面は若干の起伏はあるが、北から南に傾斜する地形である（中央部標高は7.3m）。遺構面では南部で落込を2箇所検出したが、これに伴う施設などは検出できなかった。

遺物は整理箱に1箱出土した。遺物には土師器・瓦器・瓦などがあり、6層上面と5層で出土した。時期は平安時代（10世紀）から鎌倉時代であり、いずれも小破片で、磨滅していない。

小結 長岡京に関連する遺構・遺物は全く検出することはできなかった。平安時代から中世の遺構面が標高7m前後であることを考えれば、長岡京の遺構が削平されたと考えるより、調査地周辺では条坊が施工されなかったものとみられよう。

調査区の堆積層には桂川に関する砂礫層や砂層の堆積はなく、当地域は桂川の流路内ではないことが明らかとなった。平安時代から中世の遺構面では、当時期の顕著な遺構は検出できなかった。しかし、土層の状況や出土遺物が磨滅していないことから、当地域一帯が湿地ではなく、遺構面の土質などから水田に関係した地域である可能性が高く、近接した場所に集落が想定できる。この時期巨椋池の水位も低下していたと指摘されており、今回の調査成果もこれを裏付けている。

当地域一帯は、平安時代前期から鎌倉時代・室町時代にかけての外港である「淀津」に推定されている。調査の結果から、調査地の東側、現在の堤防付近にこのような施設が存在する可能性は高い。

（上村和直・西大條哲）

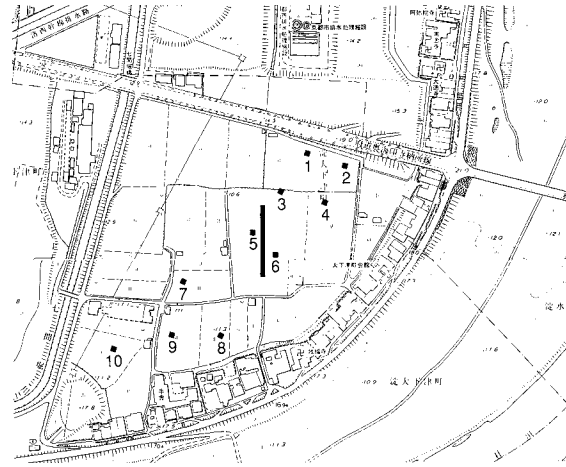


図94 調査位置図（1：7,500）

7 嵯峨院跡（図版2-2）

経過 西部第二排水区西部（第二）系統嵯峨（その36）公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は、右京区嵯峨観空寺明水町その他の主に府道大覚寺平岡線で、当該地は嵯峨院跡に比定されている。付近の調査には大覚寺境内の発掘調査、埋設管布設工事に伴う立会調査などがある。以前の立会調査では平安時代前期の土壌、落込などが検出され嵯峨院に関連するとみられる土器群が出土している。今回の調査地は遺跡範囲の西端にあり、遺構の遺存および分布状況の確認を目的とした。

遺構・遺物 今回の調査では主に江戸時代の遺構を検出した。

1区 全体的に近世の盛土層下は現地表下30cmで明黄褐色系泥砂の地山層となる。

2区 中央部で現代盛土層下に江戸時代中期の土師器を含む黒褐色系砂泥層を検出した。この層の下は現地表下40cmで明黄褐色系泥砂の地山層となる。

3区 西部で遺物包含層を検出した。暗褐色砂泥で土師器と炭を含む。土師器は小片で中世のものとみられる。No.1地点でピットを検出したが、遺物の出土はない。

4区 ほぼ全域で現代盛土層下に江戸時代中期から後期の遺物をまばらに含む整地層を検出した。この層の下は黄色系泥砂の地山層となる。No.2地点で江戸時代中期の土壌を検出した。

今回の調査で出土した遺物は整理箱に1箱分である。遺物のほとんどが整地層からの出土で、主に江戸時代中期から後期の国産陶磁器の破片である。陶磁器の種類には伊万里産の皿・蓋、唐津大鉢、瀬戸産の半筒椀・鉢や丹波焼の播鉢・徳利などがある。

小結 今回の調査では嵯峨院跡および平安時代に関する遺構・遺物の検出はなく、主に江戸時代中期から後期に属する遺構・遺物が検出された。3区で中世のものとみられる遺物包含層を検出したが、その広がりには確認できていない。現在の道路面は西側の畑地より1m以上低くなる部分などもあり、現代盛土層下は近世の整地層か、あるいは道路敷き設時に上面を削平された地山層となっている。

なお、遺跡範囲外に位置するNo.3～5地点では平安時代の遺物包含層を検出しており、遺物包含層の範囲は西側に広がるとみられる。この地は嵯峨観空寺明水町地内であり、西には観空寺久保殿町など「観空寺」を町名に冠するいくつかの町があることから、この付近が平安時代前期の創建と伝える観空寺の旧境内と思われる。

（小檜山一良）

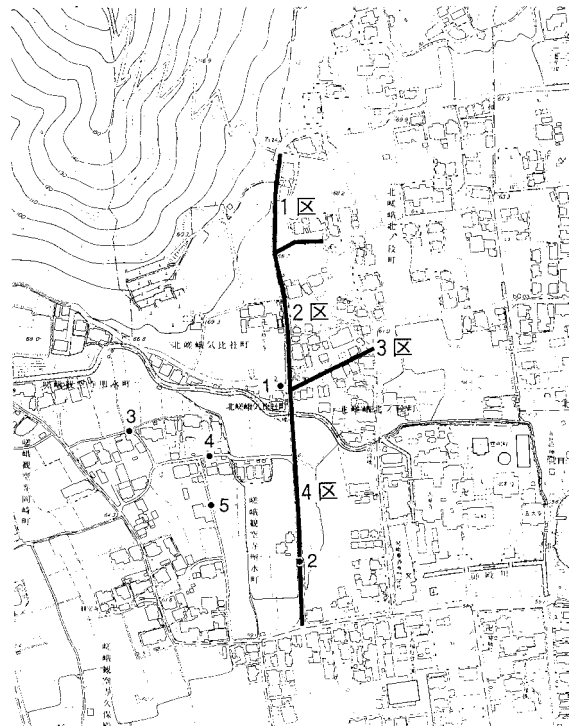


図95 調査位置図（1：7,500）

8 史跡名勝嵐山1 (図版2-2)

経過 西部第二排水区西部(第二)系統嵯峨(その22)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は右京区嵯峨野々宮町他の地域であり、史跡名勝嵐山にあたる。当地周辺には北に清涼寺、南に天龍寺などが位置し、平安時代以降多くの寺院や別業などが営まれた地域である。調査地周辺は遺跡の空白地帯とされており発掘、立会などの

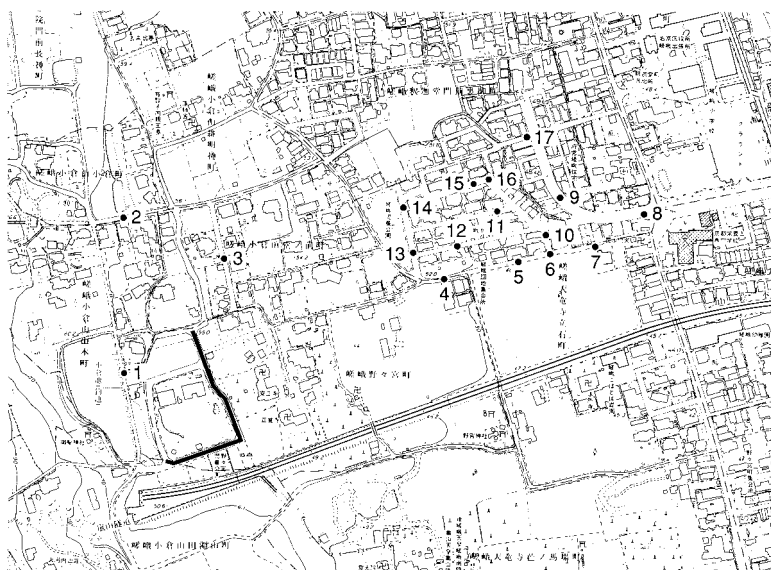


図96 調査位置図 (1:7,500)

調査例は少ない。このため、今回の立会調査では史跡名勝範囲外も含め、遺構の遺存および分布状況の確認を主目的に実施した。

遺構・遺物 今回調査した史跡名勝範囲内の基本土層は現代盛土層、旧耕作土層であり、その下層は黄褐色泥砂の地山層という状態であった。

周辺部では平安時代から近世までの各時代の遺構・遺物を検出した。

平安時代の遺構は次の各地点で検出した。No.16 地点で9世紀の遺物包含層を検出した。No.2・17 地点で11世紀の遺物包含層を検出した。No.3・6・7 地点では土壌を計5基検出しており、12世紀の土師器、瓦などが出土した。No.3・8 地点で12世紀の遺物包含層を検出した。

鎌倉時代の遺構は次の各地点で検出した。No.6・7・14 地点で土壌を検出した。特にNo.14 地点の土壌からは褐釉陶器四耳壺、東播磨系須恵器鉢、灰釉輪花皿などの遺物が多く出土した。No.4・5・11・12・15・17 の各地点で遺物包含層を検出した。

南北朝時代の遺構は次の各地点で検出した。No.10 地点で石組井戸を検出した。石組みは5段遺存しており、14世紀の土師器が出土した。No.13 地点で土壌を6基検出した。No.9・11 地点で遺物包含層を検出した。No.1 地点では現地表下1.4mの黄褐色泥砂層内で14世紀の土師器が出土した。この場所は小倉池の東堤にあたり、この時期の堤の修復事業に伴うものとみられる。

室町時代の遺物包含層をNo.7・16 地点で検出した。近世の国産陶磁器類は広範囲で出土した。

小結 今回の調査では工事区のうち史跡名勝にあたる部分の地域では遺構・遺物の出土はなく、旧耕作土を埋めて造成した跡を確認したのみである。周辺部で検出した各種の遺構・遺物から平安時代から中世の遺跡が良好な状態で遺存することが明らかになった。しかし、各時代ごとの遺構の性格やまとまりまでは把握できないのが現状である。嵯峨野地域における新たな遺跡の指定、遺跡範囲の変更が早急に望まれる。

(小檜山一良)

9 史跡名勝嵐山2 (図版2-2)

経過 桂川右岸流域関連松尾1号幹線(その6・7)、桂川右岸流域関連松尾5号幹線(その2)および桂川右岸流域関連松尾処理分区嵐山(その2~5)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は、京都市西京区嵐山西一川町ほか13町にわたり、一帯は史跡名勝嵐山の範囲に含まれる。今回の調査地は桂川右岸上流域に位置する。北から東には桂川が流れ、西には嵐山から松尾山に続く尾根がそびえ、山田古墳、松尾山古墳群、松尾大社西方古墳群など古墳時代後期の群集墳が展開する。南東方向0.5kmには秦氏の創建による松尾大社があり、松室遺跡などもある。河川と山に挟まれた南北2km、東西0.5kmほどの地域で、南東に向かって開ける地形である。当地一帯は平安時代より葛野郡山田郷とされていた。

当該地は遺跡の空白地域となっているが、周辺地一帯の歴史的環境などからも古墳時代から古

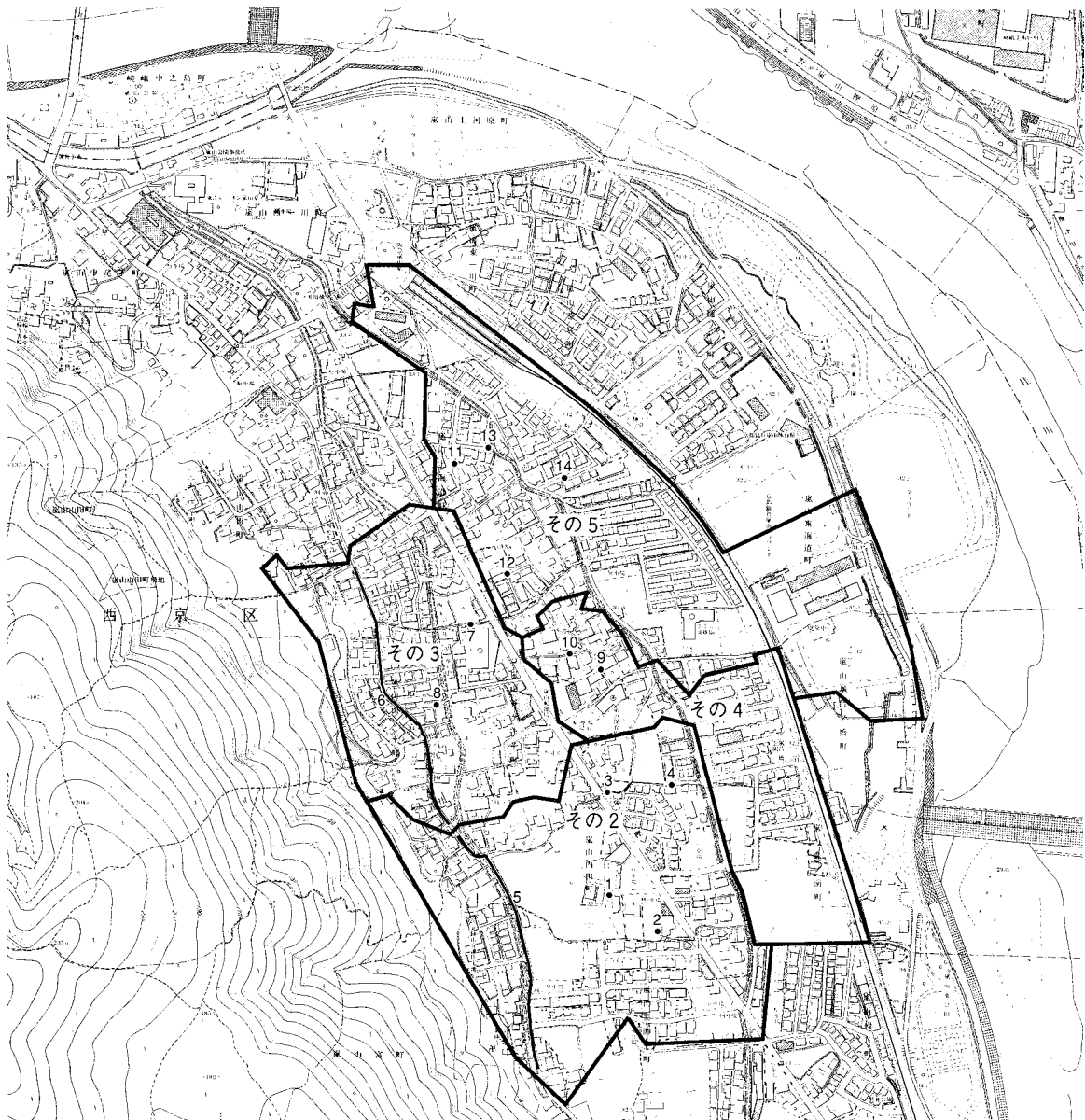


図97 調査位置図(1:7,500)

代、中世期の遺構・遺物の存在が十分に予想された。そのため遺構の遺存および分布状況の確認、さらに旧地形の復原などを調査の目的とした。調査区は6地区に分割して調査を実施した。

遺構 今回の調査では主に平安時代前期から後期の遺構を検出した。

嵐山（その2）区では中央部に平安時代後期の遺構が点在する。No.1地点で土壌・流路、No.2～4地点で遺物包含層などを検出した。西側山沿いの道路下No.5では9箇所ですべて3～6層に及ぶ路面の堆積層を検出した。

嵐山（その3）区ではNo.7地点で幅約2m、深さ0.6mの溝250を検出した。溝断面は逆台形を呈し、平安時代前期の瓦を多量に含んでいる。No.8地点で前期の遺物包含層を検出した。西側の蛇行する南北方向道路下No.6では14箇所ですべて3～8層に及ぶ路面の堆積層を検出した。

嵐山（その4）区では北部に平安時代の遺構が集中する。No.9地点付近で前期の遺物包含層、No.10地点付近で後期の柱穴を2基検出した。南東部一帯は厚さ約1mの現代盛土層の下に耕作土層があり、以下は砂礫の堆積層である。

嵐山（その5）区では中央やや北寄りに平安時代の遺構が集中する。No.11地点で後期の土壌を検出した。No.12地点で前期、No.13地点付近で中期、No.14地点付近で後期の遺物包含層を検出した。ほぼ同じ範囲内に南北朝時代、室町時代の遺物包含層も重複して検出している。南東部一帯は厚い現代盛土層の下に耕作土層が位置し、以下は砂礫の堆積層が続く。

遺物 今回の調査では平安時代に属する土師器、須恵器、瓦類などの遺物が出土した。平安時代前期に属する遺物は溝250から出土した軒平瓦、平瓦、塼などの瓦類が多く、整理箱に4箱分出土した。量的には多くないが土師器杯・高杯・皿なども出土している。高杯は脚部をヘラケズリで断面七角形に面取りするものである。ほかに須恵器の杯蓋が出土した。後期に属する遺物はほとんどの調査区で出土している。遺物の内容は土師器杯・皿、瓦器椀、白磁椀などである。室町時代に属する土師器も少量ではあるが遺物包含層から出土した。室町時代末期に属する備前焼の櫛描波状文壺が土壌から出土している。

小結 今回の調査では、砂礫の堆積が著しい状況を呈する箇所が大部分を占め、桂川が及ぼした広範囲な氾濫原を確認した。その中で現代盛土層下に耕作土層、その下に暗褐色系砂泥層などが堆積する範囲を東一ノ井川より東側の地域で確認した。この層は主に平安時代前期から後期の遺物包含層であり、この範囲内で各種の遺構も検出した。同時期の遺物包含層はさらに嵐山（その2）区以南に広がるものとみられる。東西方向の溝250は東側をやや北に振る傾きをもち、平安時代前期の軒平瓦を含む瓦類を多量に出土した。周辺一帯の広範囲な地域には同時期の遺物包含層が存在することから、付近に寺院か別業などの遺跡の存在を想定することができる。なお、軒平瓦は同範のものが嵯峨野地域で出土しておりそれらとの関連性が注目される。

No.5・6の山裾に沿って検出した路面は部分的に後世の攪乱を受けているが本来は連続すると考えられる。最下層での遺物の出土がないため路面の成立時期を確定することができないが、桂川右岸および嵯峨野地域の古墳時代の遺跡分布を考慮すれば、物集女から松尾そして渡月橋へと連絡する古墳時代以来の古道の可能性を指摘できる。

（小檜山一良）

10 上里遺跡 (図版2-3・36)

経過 調査地は、明治6年(1873)の大原野村地籍地図によると小字名は「丸町」と称されている。調査地の現状は竹が植林され、広域にわたり竹林になっている。対象地の西半部は古墳時代から中世の上里遺跡にあっている。調査にあたっては、対象地が広域なこと、ほとんどが竹林であること、さらに当地周辺の調査事例が皆無に等しいことなどから、トレンチ設定については、当地全体の遺構・遺物の有無および土層の状況が把握できるように、また現状の地形も考慮しながら行った。トレンチは100㎡規模を基本として14箇所設けた。さらに調査に先行して、各トレンチと周辺部の竹の伐採を業者に委託した。

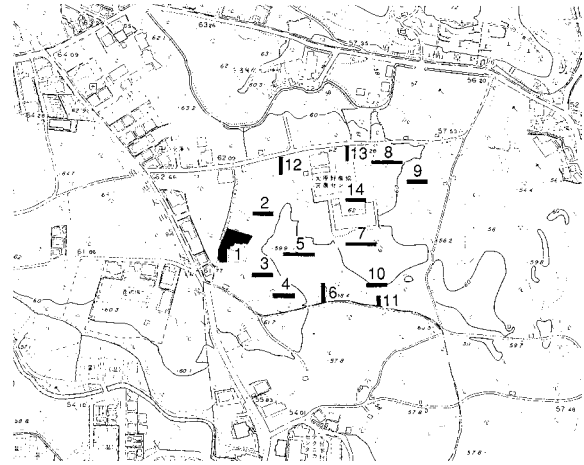


図98 調査位置図(1:7,500)

調査の結果、1トレンチで中世のピット、土壇、溝を検出した。その他のトレンチでは近・現代の竹林の土入れに伴って削平を受け、明確な遺構を検出することができなかった。遺構を検出した1トレンチについては、さらに拡張を行い関連する遺構の広がり、遺構の性格を明らかにするため調査期間を延長して行った。

遺構・遺物 拡張して調査した結果、中世の建物、土壇、溝、柵列、ピット群を検出した。以下主要な遺構について略述しておく。

建物1 南北2間、東西3間以上の北庇付きの掘立柱建物である。柱間の間隔は南北が1.9m、2.2m、東西は2.2m、2.2m、2.6mである。建物方位は南東に大きく振れている。

溝1 東西溝。規模は幅2.2m、深さ0.2～0.6m。

溝2 東西溝。規模は幅0.5m、深さ0.2～0.4m。方位は建物1と同一である。

柵列 南北方向で、方位は真北に近い。ピット間は1.3mの等間隔である。

土壇1 平面での形状は隅丸の長方形である。規模は長辺で1.1m、短辺で0.9m。深さは0.3～0.5m。土壇内には埋土と共に炭化物も多く、また完形の瓦器椀、白磁も出土している。

出土遺物は整理箱に5箱あった。ほとんどが土器類で、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器がある。量的には瓦器が多くをしめる。溝1からは鎌倉時代の瓦器椀・皿、土師器皿、白磁片がまとめて出土した。また溝3からは中世の土器類と共に、体部に波状文を施した古墳時代の須恵器片が出土している。

小結 調査区の東半部は近・現代の土取りにより大きく削平を受けたにもかかわらず、検出遺構は遺存していた。調査区を概観すると、建物1は中心的な建物であり、多数検出した柱穴群は柱穴同士の重複関係から建物1廃絶以降、幾度も建て替えられた様子を示す。また溝1は建物1に伴う区画溝である。東半部については土取りにより大きく削平を受けていたが、北で土壇1を

検出した。検出状況などから土壙墓の可能性があり、さらに南に広がっていたとすれば、墓域の存在が考えられる。西側の居住域との関係を考えてと当地に集落跡を想定することができる。上里の地名の初見は、三鈷寺寂照院仁王像胎内に納められた康永三年（1344）の結縁交名にみられる。また保安四年（1123）の「富坂荘預解」には平安時代末には当地が富坂荘の一部であったことがわかる。従来から遺物散布地としてしか知られていなかった上里遺跡を対象とした今回の試掘調査により、当地には古代末から中世にかけて集落跡が展開するものとみられる。

(加納敬二・永田宗秀)

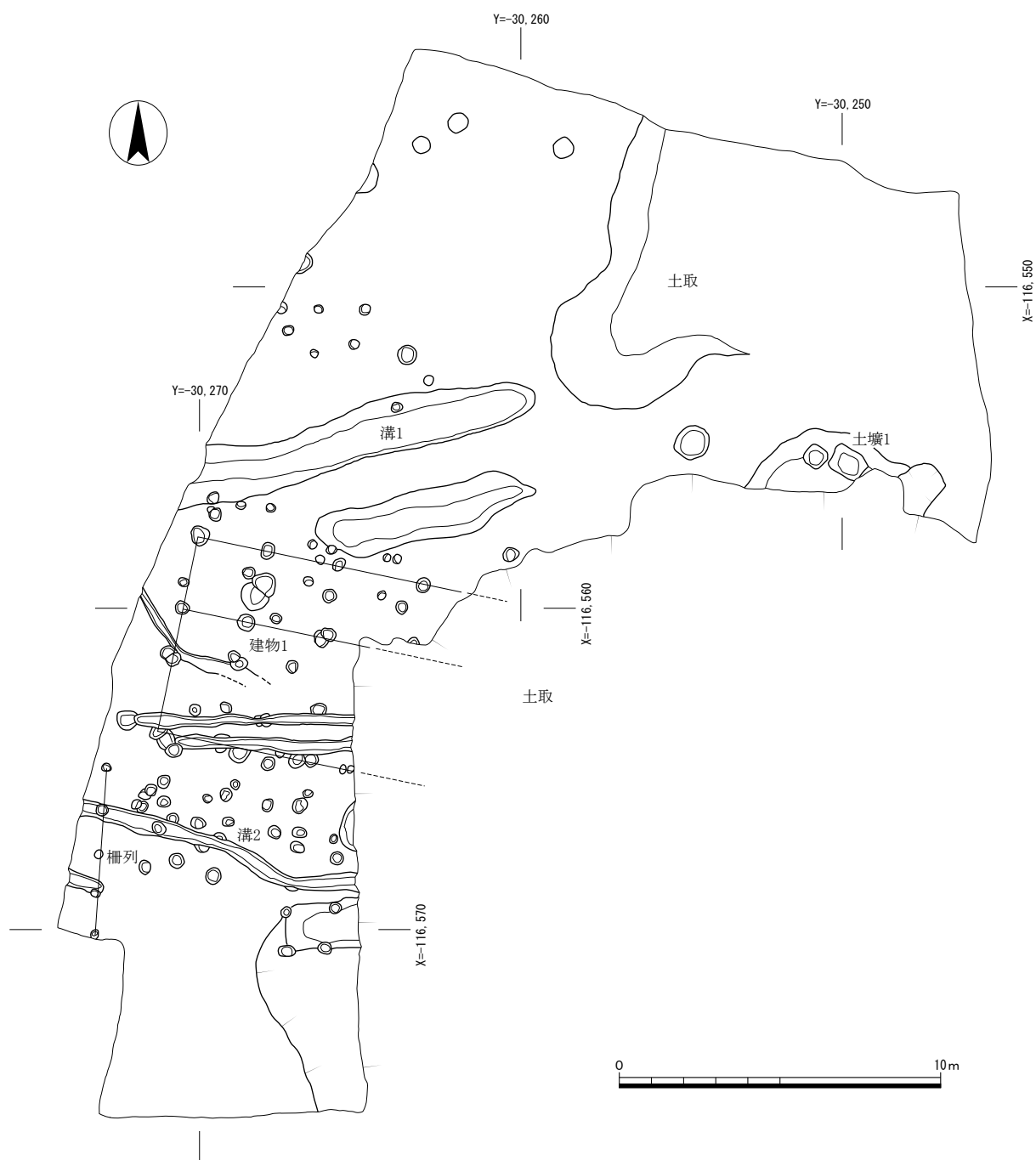


図99 1 トレンチ遺構平面図 (1:200)

11 向島城跡（図版1）

経過 京都市伏見区向島本丸町・善阿弥町・庚申町・立河原町・吹田河原町地内他において京都市水道局による公共下水道工事が計画され立会調査を実施した。工事区は桃山時代の向島城跡にあたり、前年には国道24号線より西側の下水道工事に伴う国庫補助による立会調査^{註1}において礎石や堀の肩口などを検出している。

工区は国道24号線から東へ順に向島(その10・11・12・13)と分かれており、工事計画から向島(その10・12)を92FD-SW1、向島(その11・13)を92FD-SW8として立会調査を行った。調査期間は平成4年(1992)4月4日から平成5年(1993)9月27日までの18箇月間にわたった。調査順にSW1ではNo.1から123まで、SW8ではNo.1から161まで断面番号をつけ、写真撮影・断面観察・遺物採集を行った。

向島城は、文禄三年(1592)豊臣秀吉の伏見城の出城として築かれ、伏見城は宇治川をはさみ南側に位置するが、その位置は明確になっていないという^{註2}。しかし、現在の町名に本丸町、二ノ丸町などが残り、その町内の地表面が周辺部よりも若干高くなっていることから、関連遺構の検出が期待された。

遺構・遺物 (その11～13)では明確な遺構・遺物は検出できなかったが、本丸町が工区にあたる(その10)で、本丸の積土と考えられる整地層(No.66・68・69・72～75・78・88・94・96・97・99・103・112・115地点)と、その周辺部で本丸の堀へ落ち込む肩口と考えられる落込

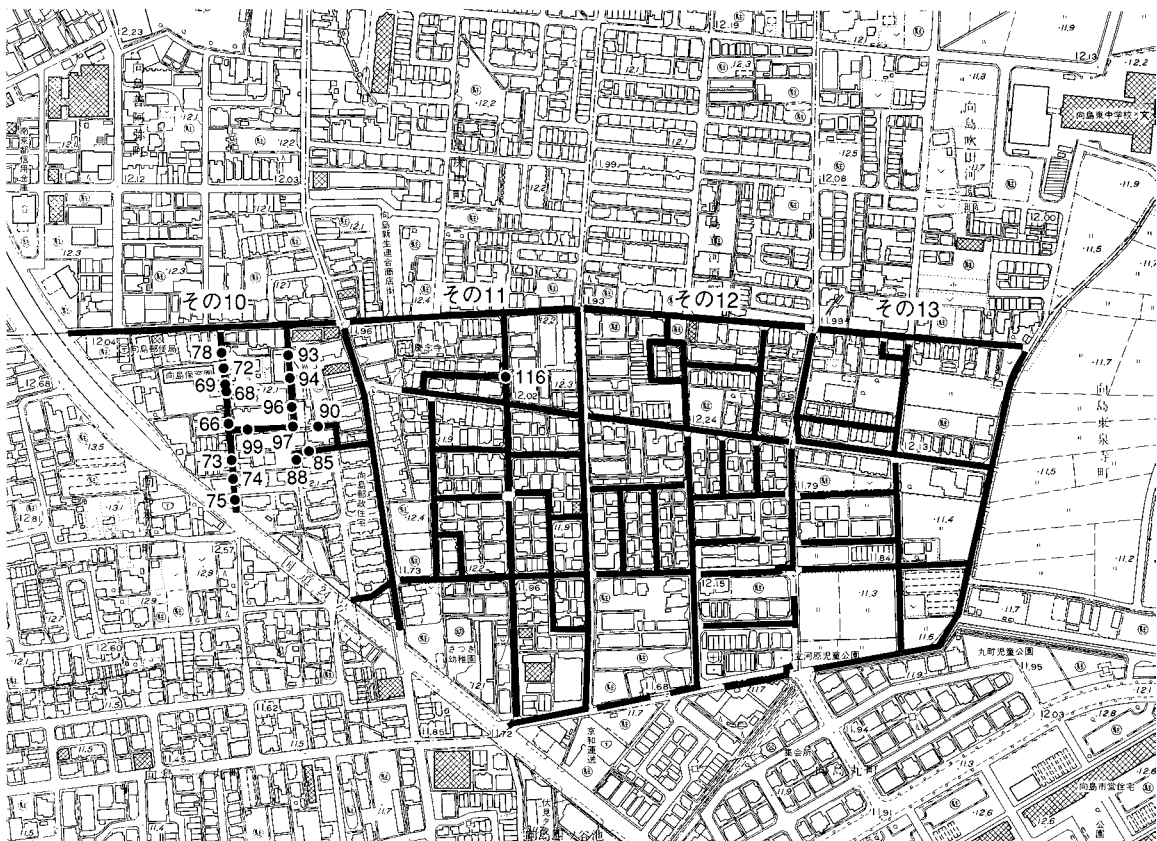


図100 調査位置図(1:5,000)



図 101 No. 116 地点出土唐津碗

遺構をNo. 85 地点周辺(東下がり)、No. 90 地点(東下がり)、No. 93 地点(北下がり)、No. 96 地点(北下がり)の4箇所を確認できた。これらのことから、当時の向島城の範囲は、ほぼ現在の本丸町の範囲にあたるが、上部の盛土部分は削平されていることがわかった。

多くの包含層を検出したが、時期不明のものが大部分で、流れ堆積の粗砂層から採集された遺物は磨滅しているものが多く、特に本丸町よりも東に位置する(その12)の工区から採集した土器類は大部分が磨滅していた。

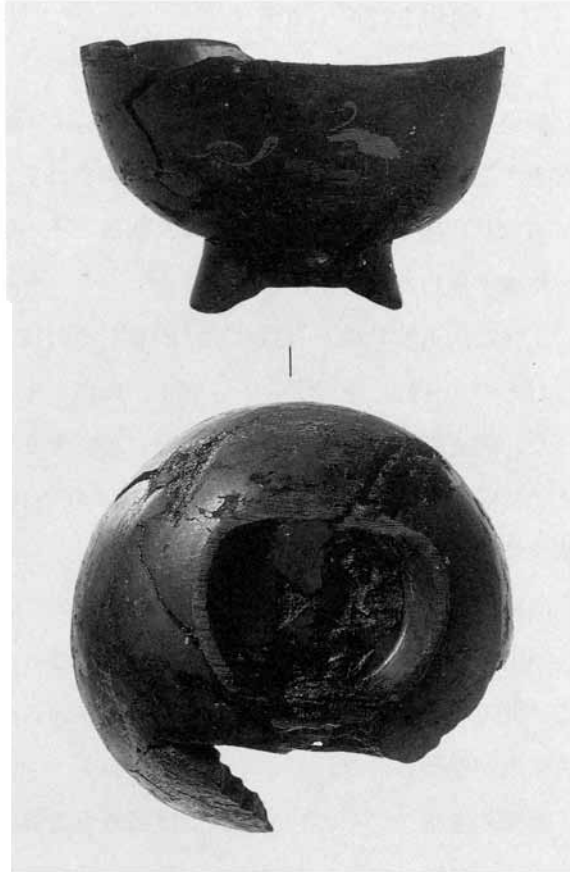



図 102 No. 116 地点出土漆器碗

わずかに(その11)のNo. 116 地点で、深さ2.5 mまでの掘削時に、近世の陶器碗(図101)を採集した。同じく深さ3.5 mまでの掘削時に漆器碗(図102)を採集した。漆器碗は、体部外面には鶴・亀・松の文様が赤漆で色鮮やかに描かれ、また底部外面には「」が陰刻されていた。桃山時代から江戸時代のものと考えられる。

小結 向島城本丸の推定地にあたる(その10)における整地層と落込は、本丸の遺構で、本丸町という町域が、本丸の地割りを引き継いでいるものと考えられるが、時代の明らかな遺構・遺物は検出できなかった。

今回の立会調査は道路部分のみであったため、削平されている部分が多くみられたが、宅地部分は道路よりも高くなっているところもあり、今後の調査に期待される。

今回の立会調査と前年の向島城跡の立会調査の結果などをまとめてみると、現在の本丸町、二ノ丸町では古くから盛土した砂層がみられ、これが向島城の中心部であったと考えられる。これは大正時代の地図の標高をみると周囲より2~6 mも高くなっていることから明らかである。また、本丸町の周囲は流れ堆積の砂層がみられるのみで、本丸町から東側の(その11~13)の工事範囲は川か堀の中と考えられる。

(竜子正彦・尾藤徳行)

註1 竜子正彦「向島城跡(91 F D 152・161・311・349, 92 F D 190)」『京都市内遺跡立会調査概報』平成4年度 京都市文化観光局 1993

註2 『京都市の地名』日本歴史地名体系 27 平凡社 1979

第3章 資料整理

1 遺跡測量

本年度における遺跡測量作業は、47 調査現場 75 件の調査基準点測量や地形測量における図根点作成作業および5 調査現場 18 件の写真測量用標定点測量、撮影作業を行った。調査基準点測量の内訳は発掘調査 56 件、試掘・立会調査 18 件、地形測量 1 件である。このうち、外部からの依頼が6 件ある。

写真測量における 35mmカメラの精度を昨年度は追求し、考古学における図面精度には十分対応できることがわかった。次に写真測量から発生するデジタルデータを、どのように管理活用するのかが課題となってこよう。その前提として写真測量発注時に、どのような仕様書で統一するか。また、ポリゴンに対する属性の統一をどうするかが今後の重要な課題となる。埋蔵文化財関係者のみならず航測関係者との関係が必要となってこよう。

最後に、当研究所では写真測量での成果品については、今年度から素図、デジタルデータおよびスクライビングによる成果品を併せて納品させることにした。スクライビングとはポリエステル系フィルムベースの表面に遮光被膜を塗布したスクライブベースにスクライバーと呼ばれる針で製図することである。通常スクライブと呼ばれる。スクライブされた原板は製版フィルムと同様なものであり、画線部が光を透過することにより焼き付けられ、従来のトレースに近い原図が作成される。フィルムベースを保存すれば、写真製版することで原図の複製が容易にできる。デジタルデータの重要な利用法であろう。(辻 純一)

2 コンピュータ

前年度に引き続き、調査概要データ・写真データ・遺物管理データ・保存処理データ・調査図面データなどを作成している。

考古学におけるコンピュータ利用は、ハードの高機能化と低価格化により急速に拡大化している。しかしながら、それらは今なお文字データを中心としている。考古学の調査により発生する資料は多岐にわたっており、記録保存の面からみれば不十分である。写真資料であるフィルムは、年とともに退色していくし、実測図は紙の傷みにより見えなくなってくる。これらをデジタルデータとして保存すれば、入力時点からの劣化がなくなることになる。また、画像処理などの手法を用いることで、もとの状態に近付けることも可能である。さらに、デジタルデータからポジやネガにすることもできる。フォトCDと呼ばれる規格が登場し安価で写真資料をデジタルデータ入力サービスが開始された。今後のコンピュータによる資料活用にとって重要な方向性を示しているのではないだろうか。(辻 純一)

3 保存処理

平成4年度の出土木製品の整理および保存処理状況の報告を行う。

1 井戸枳材の整理と保存処理状況

調査現場から搬入された井戸枳材については洗浄の後、略図・計測・写真をもとにした台帳を作成し、順次PEG含浸による保存処理を行っている。井戸枳材の保存処理に要する含浸期間は約1年に設定している。今年度の整理および保存処理状況は以下のとおりである。

表1 井戸枳材の整理と保存処理状況（○は済み）

略記号	点数	略図	計測	ラベル	写真	保存	略記号	点数	略図	計測	ラベル	写真	保存
79HK - CF	2	○	○	○	○	○	87HK - YF	78	○	○	○	○	○
79HK - SM2	1	○	○	○	○	○	87HK - XF2	424	○	○	○	○	○
80HK - HN	2	○	○	○	○	○	87MK - AB	10	○	○	○	○	○
81HK - FC	6	○	○	○	○	○	87HK - WE3	3	○	○	○	○	○
86HK - RI	41	○	○	○	○	○	87HK - RL1	3	○	○	○	○	○
86MK - SW49	1	○	○	○	○	○	87HK - FL	32	○	○	○	○	○
86HK - OB2	104	○	○	○	○	○	91HK - FR5	60	○	○	○	○	○
86HK - HK4	210	○	○	○	○	○	92HK - FR6	17	○	○	○	○	○
86NG - KJ3	36	○	○	○	○	○							

2 小型木製品の整理と保存処理状況

調査現場から搬入された小型木製品については実測を要するものと、それ以外に選別した上で整理を行っている。前者については調査担当者作成の実測図をもとに、後者については略図・計測をもとに台帳を作成する。整理済の小型木製品を前者については高級アルコール法により、後者については従来通りPEG法で保存処理を行っている。前者については保存処理期間の短縮と、精度の高い処理をめざし、後者については多量の木製品を効率的に処理するためである。今年度の整理・保存処理状況は以下のとおりである。

(岡田文男)

表2 小型木製品の整理と保存処理状況（○は済み、△は継続）

略記号	点数	略図	計測	ラベル	写真	注記	保存	略記号	点数	略図	計測	ラベル	写真	注記	保存
80MK - SW5	35	○	○	○	○			85NG - KS	66	○	○	○	○	○	○
80NG - PV	442	○	○	○	○		○	85NG - PV	236	○	○	○	○	○	○
81HK - K48	37	○	○	○	○	○	○	87HK - YF	6,109	△	△	△			
81HK - SM4	1,778	○	○	○	○		○	87NG - PVX2	21	○	○	○	○	○	○
81NG - PV	1,401	○	○	○	○	○	○	87NG - PVY1	45	○	○	○	○		○
82FD - MR2	457	○	○	○	○			88FD - AH2	1,671	△	△	△			
82NG - PV	492	○	○	○	○	○	○	88NG - AO	11,609	○	○	○	○		
83MK - KB	90	○	○	○	○			88NG - PV	540	○	○	○	○		○
84NG - KJ2	11	○	○	○	○	○	○								

4 復原彩色

本年度の復原彩色業務として行った遺物復原は以下のとおりである。

遺物復原の彩色

本年度、復原彩色を行った遺物は230点である。平成4年度の国庫補助による調査概報、京都市埋蔵文化財調査概要、調査報告書の掲載分が主なもので詳細は以下のとおりである。

表3 平成4年度の遺物復原彩色件数一覧表

内 容	調査記号	点数	内 容	調査記号	点数
国庫補助概報	92 HK-DY	21	調査報告書	85 NG-PV U区	14
調査概要	87 UZ-SW43	1		86 NG-PV V区	27
	88 UZ-SW25	5		88 NG-PV Y4区	4
	88 UZ-BN	4		88 RH-IK	6
	88 UZ-PB2	11	展示・貸し出し	90 KS-KF	32
	88 UZ-YA	44		その他	46
	90 NG-MI	15			

復原遺物の修理

展示・貸し出しのうち「その他」の46点は、三重県斎宮歴史博物館への遺物貸し出し分である。これは以前に遺物復原を行った中から石膏の補修と色の補色が必要なものを対象として修理した。当時、彩色の画材にはポスターカラーを使用しており、長期の保管のうちに日光や湿気によるとみられる剥落、変色が著しいために今回は変色しにくいアクリル絵具を使用した。アクリル絵具はポスターカラーと同様に水溶性であるが、乾燥後は耐水性を持つので他の画材に比べて使用しやすい。その上、絵具自体が被膜となって石膏を保護するので、耐久性を必要とする遺物復原には適していると考えられる。

貸し出しや展示などが予想できる遺物復原には目的に応じた画材の選択をする必要がある。このような経験を生かして今後の彩色の参考としたい。

(田中利津子)



図103 ポスターカラー



図104 アクリル絵具

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

(1) 「平安京神泉苑発掘調査報告会」の開催

日時 平成4年9月6日(日) 午後2時～4時30分

会場 京都会館会議場(参加者 約350名)

内容 「神泉苑の歴史」 研究所長 杉山信三
「神泉苑の調査成果」 調査課 小森俊寛

(2) 「文化財講演会」の開催

日時 平成5年3月6日(土) 午後2時30分～4時30分

会場 京都府立西陣労働セツルメント(参加者 約100名)

内容 「古墳時代の水田跡－水垂の調査から－」

調査課第4係長 長宗繁一
立命館大学教授 和田晴吾

(3) 「'92 発掘調査成果写真展」の開催

期間 平成5年1月20日～1日31日(10日間)

会場 京都市考古資料館3階(入場者 570名)

主催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所

後援 NHK京都放送局・京都新聞社・KBS京都

(4) 現地説明会の開催

ア 平成4年5月30日 「平安京左京三条三坊」(参加者 約120名)

イ 平成4年12月12日 「白河街区跡」(参加者 約170名)

ウ 平成5年1月24日 「長岡京左京六条三坊二町跡」(参加者 約130名)

(5) 「リーフレット京都」(No.39～No.50)の発行

No.39 土器・瓦8 「京都でいちばん古い土器」

No.40 考古アラカルト6 「遺物の復元－形をつくる－」

No.41 発掘ニュース8 「長岡京の町のようす－左京六条三坊三町の調査から－」

No.42 考古アラカルト7 「織田信長ゆかりの遺跡を訪ねて」

No.43 発掘ニュース9 「栗栖野の窯跡から二彩陶器が…」

No.44 都市・農村6 「小六条殿と街路のつけかえ」

No.45 生活・文化4 「埋もれていた庭園－鳥羽離宮跡－」

No.46 発掘ニュース10 「御堂ヶ池2号墳は『消滅』したのか」

No.47 都市・農村7 「都大路を歩く」

- No.48 考古アラカルト8 「遺物の復元－色をつける－」
 No.49 発掘ニュース11 「発掘成果をふりかえって 1992」
 No.50 土器・瓦9 「織部焼－埋もれた茶陶がよみがえる－」

(6) 研究会などへの派遣

- ア 平成4年4月～平成5年3月（毎月開催） 京都府埋蔵文化財調査研究センター
 「長岡京連絡協議会」 調査課主任 木下保明
 調査課主任 上村和直
 調査課 吉崎伸
- イ 平成4年6月6日・7日 鎌倉市中央公民館分館
 「中世都市研究会シンポジウム」 調査課主任 堀内明博
- ウ 平成4年6月12・13日 国立歴史民俗博物館
 「共同研究による研究会」 調査課主任 堀内明博
- エ 平成4年6月22・23日 国立歴史民俗博物館
 「科学研究費による研究・討議」 資料課 宮原健吾
- オ 平成4年9月17・18日 ホテル木暮
 「全国埋蔵文化財文化財法人連絡協議会平成4年度研修会（調査研究部会）」
 資料課 辻純一
- カ 平成4年9月25～27日 青山学院大学
 「第13回日本貿易陶磁研究集会」 調査課主任 百瀬正恒
 調査課 辻裕司
- キ 平成4年9月29・30日 国立歴史民俗博物館
 「科学研究費による研究会」 資料課 宮原健吾
- ク 平成4年12月25・26日 国立歴史民俗博物館
 「共同研究による研究会」 調査課主任 堀内明博
- ケ 平成5年3月27・28日 国立歴史民俗博物館
 「共同研究による研究会」 調査課主任 堀内明博

2 京都市考古資料館状況

(1) 展示替事業

- ア 「写真展示コーナー」の新設 平成5年3月26日
 史跡平安宮豊楽殿や鳥羽離宮跡など、京都市内の遺跡の20年にわたる発掘調査により出土した遺構・遺物の代表的な写真28枚を選び、京都を語る貴重な文化遺産として紹介するコーナーを新設した。
 高さ3.5m、幅3.0mのコルトンボックスに、モザイク状に大・中・小の大きさの写

真を展示した。

紹介した遺跡・遺物としては中臣遺跡、長岡京跡、大枝山古墳群（22号墳）、豊楽殿壇上積基壇、鳥羽離宮釈迦堂の地業、神泉苑舟着場、金閣寺の修羅、伏見城の金箔瓦、高陽院の池の洲浜などがある。

イ 常設展示「桃山陶器」コーナー 平成5年3月26日

開館以来、玄関ホール正面を飾った平安時代の王朝文化を象徴する「緑釉陶器」コーナーを、桃山文化を代表する「桃山陶器」コーナーに展示替えし、志野水指など5点の展示を行った。

(2) 「第13回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期 間 平成4年8月4日～7日

ア 「小学生親子教室」 8月4日・5日

第1日目（児童のみ）

9：30～11：30 資料館見学、瓦の拓本の実習 (参加者46名)

第2日目（親子参加）

9：30～11：30 古墳見学（甲塚古墳から蛇塚古墳の見学および遺跡や遺物の時代の決め方、古墳の保存などについての学習）（参加者親子39組）

イ 「中学生サマースクール」 8日6日・7日

第1日目

9：30～11：30 資料館見学、瓦の拓本の実習 (参加者42名)

第2日目

9：00～12：00 勧業館跡（左京区岡崎成勝寺町）の発掘調査現場で発掘調査の実習 (参加者42名)

(3) 「夏期教室拓本展並びにスナップ写真展」の開催

期 間 平成4年8月18日～9月4日

会 場 考古資料館 1階

(4) 文化財講座の開催

好評を得ている文化財講座は、本年度は「遺跡から見た平安時代以前の寺院」をテーマとして実施することとした。

ア 第54回 平成4年4月25日

「平成3年度京都市内の遺跡調査の概要」 調査課長 永田 信一

「遺跡から見た平安時代以前の寺院」講座1

－平安時代以前の寺院跡の発掘調査概要－ 調査課 高橋 潔
(受講者87名)

イ 第55回 平成4年5月23日

「中久世遺跡の調査」 調査課 吉崎 伸

- 「遺跡から見た平安時代以前の寺院」講座2
 -北野廃寺の調査- 調査課主任 久世 康博
 (受講者 80名)
- ウ 第56回 平成4年6月27日
 「平安京右京六条三坊八町の調査」 調査課 前田 義明
 「遺跡から見た平安時代以前の寺院」講座3
 -桎原廃寺の調査- 調査課 長戸 満男
 (受講者 100名)
- エ 第57回 平成4年7月25日
 「平安京左京二条三坊十町の調査」 調査第5係長 磯 部 勝
 「遺跡から見た平安時代以前の寺院」講座4
 -北白川廃寺の調査- 資料課 辻 純一
 (受講者 97名)
- オ 第58回 平成4年9月19日
 現地講座「白河街区の調査」 考古資料館学芸員 南出 俊彦
 (受講者 91名)
- カ 第59回 平成4年10月24日
 「平安京左京六条三坊十町の調査」 調査課 内田 好昭
 「遺跡から見た平安時代以前の寺院」講座5
 -大宅廃寺の調査- 調査第2係長 平方 幸雄
 (受講者 69名)
- キ 第60回 平成5年1月23日
 「神泉苑の調査」 調査課 上村 憲章
 「遺跡から見た平安時代以前の寺院」講座6
 -広隆寺の調査- 調査課主任 平田 泰
 (受講者 101名)
- ク 第61回 平成5年2月27日
 「伏見区淀樋爪町の長岡京跡の調査」 調査課主任 木下 保明
 「遺跡から見た平安時代以前の寺院」講座7
 -長岡京川原寺跡の調査- 調査第4係長 長宗 繁一
 (受講者 69名)
- ケ 第62回 平成5年3月27日
 「中務省跡の調査」 調査課主任 辻 裕司
 (代講) 資料館 南出 俊彦
 「遺跡から見た平安時代以前の寺院」講座8

(5) 普及啓発、資料収集

「情報コーナー」においてリーフレットの配布をはじめ、パソコン、レーザーディスクおよびビデオによる展示資料・遺跡などの紹介を行うほか、次の参考資料を整備し利用に供している。

- ア 考古学・日本歴史ほか関係図書
- イ 府下および近県の博物館施設などのパンフレット
- ウ 発掘調査現地説明会資料
- エ 発掘調査関連新聞記事

(6) 考古資料の貸出

- ア 継続貸出分 28件 702点
- イ 新規貸出分 16件 409点

(7) 博物館学芸員課程実習生などの受入

- 京都芸術短期大学 7名 京都精華大学 3名 帝塚山大学 1名
- 立命館大学 5名 京都橘女子大学 4名

(8) 京都市考古資料館入館者状況

表4 平成4年度月別観覧者一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	26	1,211	376	172	0	1,759	67.7
5	27	1,236	271	145	478	2,130	78.9
6	25	1,112	247	128	92	1,579	63.2
7	27	1,267	319	196	0	1,782	66.0
8	26	1,425	480	242	114	2,261	87.0
9	26	1,248	310	211	0	1,769	68.0
10	27	1,296	158	167	0	1,621	60.0
11	25	1,252	186	133	0	1,571	62.8
12	24	1,016	166	81	57	1,320	55.0
1	24	1,081	167	163	0	1,411	58.8
2	24	1,119	122	99	0	1,340	55.8
3	26	1,205	158	89	73	1,525	58.7
合計	307日	14,468人	2,960人	1,826人	814人	20,068人	65.4人

(参考 平成3年度観覧者数 開館日 308日 延べ人数 20,906人 1日平均 67.9人)

3 役職員名簿

(1) 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	松村 哲治	京都市文化観光局長
専務理事	柴田 昌夫	京都市文化観光局文化部参事
理事	池田 佳郎	京都市文化観光局文化部文化財保護課長
	上田 正昭	京都大学名誉教授・大阪女子大学学長
	木村 捷三郎	財団法人京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	杉山 信三	財団法人京都市埋蔵文化財研究所長
	田辺 昭三	京都造形芸術大学教授
	角田 文衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	檜崎 正孝	京都市文化観光局文化部長
	西川 幸治	京都大学教授
	福山 敏男	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
監事	市田 幸雄	京都市会計室長
	堀 道夫	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事

(2) 職員名簿

	氏名	職名		氏名	職名
	杉山信三	研究所長(理事)	調査部 調査課	永田信一	調査課長
	木村捷三郎	嘱託(理事)		本 弥八郎	調査第1係長
	田辺昭三	嘱託(理事)		平方幸雄	調査第2係長
総務部 総務課	伊藤哲夫	総務部長(京都市出向)		鈴木久男	調査第3係長
	宮崎 高	総務課長(3.31退職)		長宗繁一	調査第4係長
	菅田悦子	主 任		磯部 勝	調査第5係長
	上村京子	事務職員		吉村正親	主 任
	村木節也	〃		平田 泰	〃
	本田憲三	〃		木下保明	〃
	金島恵一	〃		鈴木廣司	〃
	小松佳子	〃(2.16退職)	菅田 薫	〃	
	夏原美智代	〃	堀内明博	〃	
			百瀬正恒	〃	

	氏 名	職 名
調 査 部 調 査 課	久世康博	主 任
	加納敬二	〃
	平尾政幸	〃
	辻 裕司	〃
	上村和直	〃
	前田義明	研究職員
	丸川義広	〃
	吉崎 伸	〃
	網 伸也	〃
	内田好昭	〃
	高 正龍	〃
	高橋 潔	〃
	山本雅和	〃
	南 孝雄	〃
	小森俊寛	〃
	長戸満男	〃
	上村憲章	〃
	伊藤 潔	〃
	近藤知子	〃
	会下和宏	〃
	真喜志悦子	調査補佐員
	能芝 勉	〃
	能芝妙子	〃
	法邑真理子	〃
	鎌田泰知	〃
	小倉万里子	〃
	松尾武彦	〃
	竜子正彦	〃
	本田次男	〃 (8.10 退職)
	桜井みどり	〃
清藤玲子	〃	
藤村敏之	〃	
山口 真	〃	
津々池惣一	〃	
上田栄治	〃	
太田吉男	〃	
堀内寛昭	〃	
大立目 一	〃	
川村雅章	〃	
小檜山一良	〃	

	氏 名	職 名	
調 査 部 調 査 課	近藤章子	調査補佐員	
	西大條 哲	〃	
	布川豊治	〃	
	永田宗秀	〃	
	東 洋一	〃	
	宮下則子	〃	
	吉本健吾	〃	
	端美和子	〃	
	藤村雅美	〃	
	北川和子	〃	
	北原四男	〃	
	小谷 裕	〃	
	尾藤德行	〃	
	大立目道代	〃	
	調 査 部 資 料 課	峰 巍	資料係長
		中村 敦	研究職員
		辻 純一	〃
		岡田文男	〃
西川恵美子		〃 (7.31 退職)	
原山充志		〃	
出水みゆき		調査補佐員	
児玉光世		〃	
角村ひろみ		〃	
田中利津子		〃	
ト田健司		〃	
出口 勲		〃	
宮原健吾		〃	
角村幹雄		〃	
村井伸也		〃	
幸明綾子		〃	
村上 勉		〃	
多田清治		〃	
モハテイ恭代	〃		
大槻明義	〃		
考 古 資 料 館	塩崎英雄	館 長	
	浪貝 毅	副 館 長 (12.28 死去) (京都市埋蔵文化財調査 センター所長兼任)	
	中島松夫	主 任	
	南出俊彦	学 芸 員	

表5 発掘調査一覧表

	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
平安宮	01	H4-026 中務省跡 92HK-DY	上京区丸太町通千本東入 中務町 491	92.09.07 ～ 92.09.25	65㎡	京都市長 那須久生	木下	国庫補助
	02	H4-058 中務省跡 92HK-DW	上京区丸太町通智恵光院 西入中務町 933	93.02.22 ～ 93.03.16	72㎡	京都市長 （株）京都厚礼 自動車	高橋	国庫補助
	03	H4-036 左馬寮跡 92HK-LB	中京区西ノ京左馬寮町 3-1 （朱雀第二小学校）	92.11.16 ～ 93.03.24	767㎡	京都市長	辻裕 近藤	H4-029 試掘
		H4-063 左馬寮跡 92HK-LB	中京区西ノ京左馬寮町 3-1 （朱雀第二小学校）	93.03.25 ～ 93.06.15	520㎡	京都市長	辻裕 近藤	
平安京	*	H4-046 左京二条四坊 92HK-GN	中京区柳馬場通竹屋町下る 五丁目 242 （御所南小学校）	92.12.16 ～ 93.05.21	530㎡	京都市長	丸川 堀内 内田	平成5年度に 2次調査と合 わせて報告
	04	H4-021 左京三条一・二・四坊 92HK-FR006	中京区押小路通 （堀川～美福）、 御池通（寺町～東洞院）	92.04.27 ～ 93.03.31	997㎡	京都市交通局	小森 上村憲 百瀬	No.32～36 トレンチほか 発掘立会
	05	H4-064 左京三条二坊 92HK-LG	中京区押小路通堀川西入 二条城町地内	93.03.18 ～ 93.05.08	47㎡	上下水道事業	小森 上村憲	
	06	H4-045 左京三条三坊 92HK-FX	中京区烏丸通御池 東入梅屋町 358	92.12.11 ～ 93.03.31	393㎡	（株）アーバンリア ルエステート	伊藤 小松	
	07	H4-035 左京四条一坊 92HK-UH	中京区壬生朱雀町 8-2 （朱雀第一小学校）	92.11.09 ～ 93.04.28	887㎡	京都市長	南 会下 鈴木久	
	08	H4-022 左京五条四坊 92HK-PN001	下京区仏光寺通高倉西入 西前町 358（洛央小学校）	92.07.01 ～ 93.01.13	1,272㎡	京都市長	山本 長戸 近藤 鈴木廣	平成3年度に 試掘（H3- 032）
	09	H4-040 左京九条二坊 92HK-BH006	南区西九条烏居口町 1	92.12.21 ～ 93.04.28	1,194㎡	（株）松下興産	菅田 鈴木久	
	10	H4-015 左京九条二坊 92HK-BH005	南区西九条北ノ内町 12 他 1 筆	92.06.01 ～ 92.09.16	682㎡	（株）エム・アイ・ ディ土地建物	菅田	
	11	H4-057 左京九条四坊 92HK-BL002	南区東九条西岩本町 1	93.03.12 ～ 93.09.27	2,138㎡	京都市長	吉村	H4-041 試掘
	12	H4-037 右京一条四坊 92HK-IU	右京区花園車道町 1 （花園小学校）	92.11.24 ～ 93.01.29	510㎡	京都市長	平田	H4-033 試掘
13	H4-052 右京四条一坊 92HK-IT004	中京区壬生天池町地内 J R山陰線（三条～六角間）	93.02.15 ～ 93.03.08	120㎡	京都市長	平田		
14	H4-020 右京六条一坊 92HK-XF007	下京区中堂寺粟田町 1	92.07.13 ～ 93.01.14	3,805㎡	（株）京都リサーチ パーク	平尾		

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
白河街区	15	H4-023 白河北殿跡 92KS-AD	左京区丸太町通川端東入 東丸太町 34 - 12	92.10.05 ～ 92.12.11	600㎡	建設省近畿地 方建設局	吉崎	
	16	H4-011 成勝寺跡 92KS-KK002	左京区岡崎成勝寺町 9 - 1、 円勝寺町 26 (勸業館)	92.06.15 ～ 93.01.31	5,800㎡	京都市長	網、南 会下 鈴木久 前田	
		H4-055 成勝寺跡 92KS-KK003	左京区岡崎成勝寺町 9 - 1、 円勝寺町 26	93.02.01 ～ 93.04.02	750㎡	京都市長	網 会下	
	*	H4-027 白河街区跡 92KS-OG	左京区岡崎最勝寺町 63 (岡崎グラウンド)	91.09.30 ～ 92.09.17	10,041㎡	(財)京都市駐 車場公社	丸川 内田	平成3年度で 報告済
鳥羽離宮	17	H4-038 鳥羽離宮跡 92TB-TB138	伏見区竹田中殿町 85 (田中殿児童公園)	92.10.13 ～ 92.11.06	56㎡	京都市長	会下	
長岡京	18	H4-010 左京六条三坊・水垂遺跡 92NG-MI003	伏見区淀樋爪町	92.04.01 ～ 93.03.31	38,810㎡	京都市長	吉崎 上村 木下	D・E - 1～3区
そ の 他 の 遺 跡	19	H4-061 松ヶ崎廢寺 92RH-MH002	左京区松ヶ崎堀町 40 (松ヶ崎小学校)	93.03.17 ～ 93.07.12	448㎡	京都市長	平尾	H4 - 049 試掘
	20	H4-024 植物園北遺跡 92RH-KA004	北区上賀茂岩ヶ垣内町～ 左京区松ヶ崎芝本町地内 (北山通)	92.09.14 ～ 93.05.26	560㎡	京都市交通局	高橋 高	
	*	H4-056 植物園北遺跡 91RH-CH002	左京区下鴨半木町地内 (京都府立大学農学部の農 場の一部)	91.06.04 ～ 92.06.08	5,860㎡	京都市長	久世 高橋	平成3年度で 報告済
	21	H4-044 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 92RH-KK004	北区金閣寺町 1	92.11.25 ～ 92.12.18	57㎡	宗教法人鹿苑寺	前田	
	22	H4-016 史跡大覚寺御所跡 92UZ-AA004	右京区嵯峨大沢町地先	92.06.11 ～ 92.07.25	68㎡	上下水道	吉村 小松	
	23	H4-028 史跡名勝嵐山 92UZ-MH	右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場 町 3 - 25・27・41・50	92.09.16 ～ 93.02.16	397㎡	(株)清水	久世 平方	
	24	H4-017 南春日町遺跡 92MK-HO025	西京区大原野南春日町地内	92.03.16 ～ 92.04.17	1,500㎡	京都府宇治地 方振興局	加納	
		H4-034 南春日町遺跡 92MK-HO026	西京区大原野南春日町地内	92.10.07 ～ 92.11.26	800㎡	京都府宇治地 方振興局	加納	
H4-017-02 南春日町遺跡 92MK-HO027		西京区大原野灰方町	93.01.08 ～ 93.03.03		京都府宇治地 方振興局	加納	移築復原	
25	H4-014 史跡醍醐寺境内 92FD-DG005	伏見区醍醐東大路町地内 (醍醐小学校)	92.06.08 ～ 92.07.08	71㎡	京都市長	南 鈴木久	平成3年度に 試掘 (H3 - 041)	

表6 試掘・立会調査一覧表

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考
平安宮	01 H4-029 左馬寮跡 92HK-AH002	中京区西ノ京左馬寮町3-1 (朱雀第二小学校)	92.08.06 ～ 92.08.20	試掘 53㎡	京都市長	高	発掘へ移行 1章II-3
平安京	02 H4-030 左京二条四坊 92HK-AH001	中京区柳馬場通竹屋町下る 五丁目242(富有小学校)	92.08.10 ～ 92.08.28	試掘 87㎡	京都市長	吉崎	2章II-1 発掘へ移行
	03 H4-051 左京九条四坊 92HK-BM001	南区東九条東山王町19-1	93.02.12 ～ 93.02.26	試掘 392㎡	京都市府市町村 職員共済組合	鈴木廣	2章II-2
	04 H4-041 左京九条四坊 92HK-BL001	南区東九条西岩本町1	92.12.08 ～ 92.12.12	試掘 114㎡	京都市長	本	発掘へ移行 1章II-11
	05 H4-033 右京一条四坊 92HK-AH003	右京区花園車道町1 (花園小学校)	92.10.07 ～ 92.10.19	試掘 164㎡	京都市長	平田	発掘へ移行 1章II-12
	06 H4-018 右京三条一坊 92HK-UG001	中京区西ノ京梅尾町	92.07.01 ～ 92.08.11	試掘 419㎡	㈱レールシティ 西開発	本 伊藤	2章II-3
	07 H4-053 右京三条一坊・穀倉院跡 92HK-UI	中京区西ノ京星池町地内 (二条駅)	93.02.08 ～ 93.02.16	試掘 132㎡	京都市長	本	
	08 H4-009-04 右京五・六条二・三坊 92HK-UW011	右京区高辻通(佐井通～西 大路通)他地内	92.11.30 ～ 93.03.01	立会 750 m	上下水道	吉本 川村	
	09 H4-007 左京三条四坊 92NG-SW006	伏見区久我森の宮町地内	92.05.08 ～ 92.06.16	立会 525 m	上下水道	長宗 加納	2章III-4
長岡京	10 H4-008 左京四条四坊 92NG-SW007	伏見区羽束師志水町他	92.04.27 ～ 92.09.07	立会 700 m	上下水道	長宗 加納	2章III-5
	11 H4-019 左京九条二坊 92NG-AA001	伏見区淀大下津町地内	92.06.17 ～ 92.07.24	試掘 250㎡	建設省近畿地 方建設局	上村和	2章III-6
	12 H4-032 左京九条二坊 92NG-AA002	伏見区淀大下津町地内	92.10.15 ～ 92.11.26	試掘 280㎡	建設省近畿地 方建設局	上村和	2章III-6
	その他の遺跡	13 H4-006 本山古墳群・幡枝古墳群・ 南ノ庄田瓦窯跡 92RH-SW003	北区上賀茂本山、 左京区岩倉幡枝町	92.04.06 ～ 93.04.09	立会 2,300 m	上下水道	吉村 川村
14 H4-049 松ヶ崎廢寺 92RH-AH001		左京区松ヶ崎堀町40 (松ヶ崎小学校)	92.12.21 ～ 92.12.23	試掘 35㎡	京都市長	本	発掘へ移行 1章VI-19
15 H4-039 植物園北遺跡 92RH-AH002		北区上賀茂烏帽子垣内1 (上賀茂小学校)	93.01.06 ～ 93.01.18	試掘 17㎡	京都市長	高 高橋	発掘へ移行 平成5年度
16 H4-062 北野遺跡 92RH-UW013		北区衣笠天神森町～平野宮 本町	93.03.29 ～ 93.08.17	立会 562 m	上下水道	川村 吉本	

	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
その他の遺跡	17	H4-050 嵯峨院跡 92UZ-SW012	右京区嵯峨観空寺明水町・大沢町、北嵯峨北ノ段町・気比社町・朝原山町	92.12.22 ～ 94.04.05	立会 600 m	上下水道	小檜山	2章Ⅲ-7
	18	H4-004 史跡名勝嵐山 92UZ-SW005	右京区嵯峨野々宮町、小倉田淵山町	92.04.24 ～ 92.05.26	立会 240 m	上下水道	小檜山 本田	2章Ⅲ-8
	19	H4-002 史跡名勝嵐山 92MK-SW004	西京区嵐山西一川町、東一川町ほか	92.03.23 ～ 94.03.04	立会 9,700 m	上下水道	小檜山 本田	2章Ⅲ-9
	20	H4-047 上里遺跡 92MK-TC001・2	西京区大原野上里町	93.01.06 ～ 93.03.08	試掘 1,449㎡	京都市長	加納	2章Ⅲ-10
	21	H4-009-01 法住寺殿跡・池田瓦窯跡・鳥辺野古墳群 92RT-UW009	東山区今熊野南日吉町 他地内	92.06.01 ～ 92.07.09	立会 1,440 m	上下水道	竜子 尾藤	
	22	H4-005 芝町遺跡 92RT-SW002	山科区音羽平林町、音羽珍事町他	92.04.13 ～ 92.11.25	立会 755 m	上下水道	竜子 尾藤	
	23	H4-065 安祥寺下寺跡 92RT-FR001	山科区安朱中小路町 ～北屋敷町地内	93.03.25 ～ 93.04.09	試掘 88㎡	京都市交通局	高	発掘へ移行 平成5年度
	24	H4-009-05 伏見城跡 92FD-UW010	伏見区南浜町～豊後橋町 他地内	92.11.13 ～ 93.04.13	立会 3,010 m	上下水道	竜子 尾藤	
	25	H4-003 向島城跡 92FD-SW001	伏見区向島本丸町・立河原町他地内	92.04.04 ～ 93.03.12	立会 2,050 m	上下水道	竜子 尾藤	2章Ⅲ-11
	26	H4-013 向島城跡 92FD-SW008	伏見区向島本丸町・庚申町立河原町・吹田河原町地内	92.05.20 ～ 93.09.27	立会 2,467 m	上下水道	竜子 尾藤	2章Ⅲ-11
27	H4-001・025 京都市内遺跡 92BB-	京都市内一円		立会		本		

表7 その他契約一覧表

	契約No	内容	遺跡名・所在地	委託者	担当者	備考
1	H4-012	測量	平安京跡 上京区東堀川下長者町、堀川会館他	(財)京都市埋蔵文化財センター	辻純、宮原	計3箇所
2	H4-031	測量	平安京左京四条三坊十六町 中京区烏丸通四条上る笋町	(財)古代学協会	辻純、宮原	
3	H4-043	測量	平安京右京四条二坊 右京区西院巽町	関西文化財調査会	辻純、宮原	
4	H4-048	測量	月読神社境内 西京区松室山添町(月読神社境内)	月読神社境内調査会	辻純、宮原	
5	H4-054	遺物整理	平安宮中務省 92HK-DY (H4-026) 上京区丸太町通千本東入中務町 491	京都市長	木下	国庫補助
6	H4-059	報告書	京都市内遺跡 京都市内一円	京都市長	木下、本、 吉村	国庫補助
7	H4-060	遺物整理	平安宮中務省跡 92HK-DW (H4-058) 上京区丸太町通智恵光院西入中務町 933	京都市長	高橋	国庫補助